学　位　請　求　論　文

漢語の連濁と意味用法の史的変遷に関する研究

平　成　２８　年　３　月

呂　建　輝

岡山大学大学院

社会文化科学研究科

目　　次

序論 …… 5
１．本研究の目的…… 6
２．漢語連濁の先行研究と問題点…… 6
2-1 漢語の連濁について …… 6
2-2 漢語の連濁の先行研究 …… 7
(1) 鼻音による連濁…… 7
(2) 声調と連濁…… 7
(3) 呉音・漢音の連濁…… 8
(4) モーラ数と連濁…… 8
(5) 固有名詞・一般名詞の連濁…… 9
2-3 漢語連濁の通時的研究の可能性…… 9
３．調査方法と資料…… 10
3-1 調査方法…… 10
3-2 資料…… 12
４．表記法について…… 55
4-1 資料等による引用箇所について…… 55
(1) 漢字・平仮名・片仮名…… 55
(2) キリシタン文献などのローマ字表記…… 56
(3) 振り仮名…… 56
(4) アクセントの表記法…… 56
(5) 所在…… 56
4-2 筆者による記述箇所について…… 57
(1) 音注記・漢字注記…… 57
(2) 語形と意味用法の使い分け…… 57
５．本論文の構成…… 57
本論 …… 61
第１章　「～産」の連濁の史的変遷…… 62
１．先行研究…… 62
２．考察対象…… 62
３．用例の出現時期とその清濁…… 63

４.「～産」の語彙特徴について …… 72
4-1 「～産」の前部要素の特徴…… 72
4-2 「産」の自立性…… 73
５．二字漢語後部要素としての「～産」の連濁…… 75
６．和語前接の「～産」の連濁…… 76
７．意味条件の関与…… 78
８.「～産」の接尾辞用法の発生 …… 83
９．まとめ…… 84
第２章　「～勢」の連濁の史的変遷…… 87
１．先行研究…… 87
２．考察対象…… 87
３．用例の出現時期とその清濁…… 88
４.「～勢」の語彙特徴について ……107
4-1 「～勢」の前部要素の特徴……107
4-2 「勢」の自立性……108
５．平安時代の「～勢」の連濁……110
６．鎌倉・室町時代の「～勢」の連濁……111
6-1 漢語前接の場合 ……111
6-2 和語前接の場合 ……112
6-3 「～ゼイ勢」の「類別」用法の発生と拡大 ……113
７．江戸時代の「～ゼイ勢」の「類別」用法 ……114
８．近代以降の「～ゼイ勢」の「類別」用法 ……117
９．まとめ……119
第３章　「～本」の連濁の史的変遷……121
１．先行研究……121
２．考察対象……121
３．用例の出現時期とその清濁……123
４.「～本」の語彙特徴について ……142
4-1 「～本」の前部要素の特徴……142
4-2 「本」の語彙的意味……144
(1)「本」本来の意味について ……144
(2)「本」の意味変化 ……145
4-3 「本」の自立性……146

５．奈良・平安時代における「～本」の連濁……148
６．鎌倉から室町中期までの「～本」の連濁……149
6-1 漢語前接の場合 ……149
6-2 和語前接の場合 ……150
７．「本」の意味変化、並びに「書」との競合 ……151
7-1 「～本」《手本》について ……151
7-2 「本」と「書」との競合……153
８．室町後期から江戸期までの「～本」……154
９．明治期以降の「～本」……158
10．まとめ……162
第４章　接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」について……164
１．接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」の特徴について……164
1-1 音韻的特徴 ……164
1-2 語彙的特徴 ……165
1-3 意味的特徴 ……167
２．接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」と「類別」表現……170
2-1 「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」の「類別」用法……170
2-2 「類別」表現と接尾辞……170
結論 ……172
１．「～産」の連濁の史的変遷と接尾辞「～サン産」の形成……173
1-1 まとめ ……173
1-2 先行研究との違い ……173
２．「～勢」の連濁の史的変遷と接尾辞「～ゼイ勢」の形成 ……174
３．「～本」の連濁の史的変遷と接尾辞「～ボン本」の形成 ……174
3-1 まとめ ……174
3-2 先行研究との違い ……175
４．「～産」「～勢」「～本」の連濁の史的変遷の類似点と相違点について ……176
4-1 鼻音の連濁よりはじまること（類似点その１）……176
4-2 和語化が進み連濁すること（類似点その２）……177
4-3 接尾辞用法を獲得していること（類似点その３）……177
4-4 現代における連濁の仕方（相違点その１）……178
4-5 接尾辞用法の清濁（相違点その２）……178
５．接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」について……179

６．全体のまとめ……180
７．今後の課題……181
7-1 その他の漢語の連濁の史的変遷 ……181
7-2 接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」の実態……182
7-3 「類別」表現の実態……182
参考文献 ……183

序　　論

１．本研究の目的

連濁とは「ハナ花」が「クサバナ草花」のように、そもそも清音である頭子音が、ある語の後部要素に使われる場合に濁音になる現象のことである。一方で、ある語の後部要素に使われると頭子音の清音が必ず濁音になるとは限らない。「トリ鳥」が「コトリ小鳥」、「ヒ日」が「アサヒ朝日」などのように清音のままの場合もある。ではどの場合に連濁が起こるか、またどの場合に連濁が起こらないか。この問題について、長いあいだ研究されてきてはいるものの、未だに問題が多い。

ある語が連濁するかしないかは、日本語を母語とする人なら使い分けられている。しかし日本語を母語としない人に対しては難しい問題となる。筆者は一人の外国人として、日本語を勉強する際にやはり連濁の難しさを感じた。例えば「～本」の場合、同じく使い古した書籍を指すの場合でも、「フルホン古本」は清音のままだが、「チュウコボン中古本」は濁音「～ボン」になってしまう。同じくサイズの小さい書籍を指す場合でも、「コホン小本」は清音のままだが、「コガタボン小型本」は濁音「～ボン」になってしまう。この現象は非常に不思議に思い、どういう場合に連濁し、またどういう場合に連濁しないのか、とても興味をもっていた。連濁の研究が進み、連濁の条件が明らかになれば、日本語学だけでなく、外国人向けの日本語教育にも大いに役立つのではないかと思われる。

２．漢語連濁の先行研究と問題点

2-1　漢語の連濁について

今まで行われてきた連濁の研究からみて、和語と漢語とは、それぞれ異なる連濁のしかたを現していることがいえる。金田一春彦(1976)は「漢語には和語ほどは連濁が多くない」と指摘し、和語は連濁が起こりやすいのに対して、漢語は連濁することは少ないとしている。

この連濁のしかたの差について、高山倫明(2012)は「連濁は基本的には和語にかかわる問題だ」としている。漢語が連濁するという事象は、中川芳雄は「漢語系の語彙も、和語化国語化の高まりとともに、連濁の洗礼を受け、連濁可能語彙の中にくり入れられていく」と指摘したように、その原因の一つに漢語の和語化が挙げられる。

しかし、漢語は和語化され連濁するようになったとしても、必ずしも和語と同じような連濁のしかたがみられるのではない。例えば、登坂俊子(1984)は連濁とアクセントの関係については「複合時の、後音節が高い拍になっている語に連濁が多い」とし、その例に問題拍が低い「ヤマ’カワ山川」は連濁しないが、問題拍が高い「ヤ

マガワ山川」は連濁する現象を挙げている[1]。一方、漢語となると「ソ’ウザン早産」「リュ’ウザン流産」は問題拍が低いにもかかわらず連濁を起こしており、また「コクサン国産」「スイサン水産」は問題拍が高いにもかかわらず連濁を起こしていない、という場合も多く観察される。

このように、漢語の連濁は和語の連濁と比べ起こりにくいが、それでも連濁が起こる場合がある。またたとえ漢語が連濁しても、その連濁の仕方からみて和語と異なる部分がある。では、漢語が連濁する条件とは何だろうか。本論文では漢語の連濁について考察し、漢語の連濁条件を明らかにする。

2-2　漢語の連濁の先行研究

漢語の連濁について、先行研究には以下のような説がみられる。

(1) 鼻音による連濁

奥村三雄(1952)は主に中古・中世の字音資料を対象に考察した結果、「鼻音の後が連濁し易い」という結論を得た。これについて、同じく古資料を対象に考察した小林芳規(1970)、沼本克明(1982)、榎木久薫(1987)、佐々木勇(2009)等も同じような結論を得ている。

しかし一方で奥村は「カワチボン河内本」「サルヂエ猿知恵」などの例を挙げ、「現代語では、鼻音の後以外の連濁も、かなり認められる」との課題を残している。松浦陽子(1994)は「室町末期に連濁していた語が、現代に至るまでに、連濁しない語へと移行するという極めて顕著な傾向が存する」と述べ、現代では鼻音の後でも連濁しないことが増えていることを示唆している。佐藤大和(1989)は、鼻音の後で連濁するという傾向は現代語では「主に基本語内に限られており、漢語では例外も多い(「神国」「換算」など)」と指摘し、現代ではどういった連濁条件が働いているのかは未だに不明とされている。

(2) 声調と連濁

奥村三雄(1952)は連濁と声調との関連についても指摘した。「その前の字音が、鼻音尾をもつものであって、而も、上昇調アクセントのものである場合、特に、連濁が起こり易かった」と述べ、上昇調の「ジョウブ丈夫」「シンヂュウ心中」などには連濁が起こり、下降調の「ジ’ョウフ丈夫」「シ’ンチュウ心中」などには連濁が起こらない現象を挙げている。連濁と声調との関わりについてほかにも小林芳規(1970)、

[1] 「ヤマカワ・ヤマガワ山川」の清濁については、前部要素と後部要素とが並列関係をなしているか修飾関係をなしているかにかかわる、との見方もある（中川芳雄(1966)など)。

金田一春彦(1976)、沼本克明(1982)、佐々木勇(2009)などが挙げられる。

一方で高山倫明(2012)は声調と連濁との関連について「のぼり調子のアクセントが鼻音韻尾のソノリティを増す結果」であり、「結局は鼻音に関わる問題」になると指摘した。前述したように鼻音条件の制約は現代で弱まってきている。その結果、声調と連濁との関わりもそれに応じて弱くなったと考えられる。現代語では「ナ’ンザン難産」「サ’ンボン三本」などのように下降調アクセントにもかかわらず連濁する場合が多く観察される。これらの語の連濁は現代語において声調の観点で説明できない。

(3) 呉音・漢音の連濁

沼本克明(1982)は院政期から南北朝までの呉音資料・漢音資料を調査した結果、「同時代の呉音読の場合に比較して、漢音読の連濁は非常に少ない」との結論を得た。その理由について高山倫明(2012)は、呉音系漢語は「より古く移入され、かつ相対的に庶民・口頭語に近い方に位置する」のに対して、漢音系漢語は「遅れて移入され、相対的に中央・文章語に近い方に位置する」と指摘している。

一方で現代語では、漢音にもかかわらず連濁を起こすことも少なくない。例えば「山」の漢音読み「サン」は「カザン火山」「ダイセツザン大雪山」など、また「会」の漢音読み「カイ」は「会社」という語において「カブシキガイシャ株式会社」「デンリョクガイシャ電力会社」など、多数の連濁語がみられる。漢音は呉音に比べ連濁しにくいという傾向は、現代ではほとんどみられなくなっているといえる。

(4) モーラ数と連濁

佐藤大和(1989)は「漢字造語成分の連濁は、それに付く漢字のモーラ数や濁音の有無等によって決まる」と述べている。「ヒエイザン比叡山」「ケンキュウジョ研究所」は連濁し、「コウヤサン高野山」「ジムショ事務所」は連濁しない。これは「前者は二モーラ漢字が隣接し、後者は一モーラ漢字が隣接することと関係がある」と指摘した。しかし1モーラ漢字が隣接している場合でも、「ショシャザン書写山」「ダツイジョ脱衣所」など連濁する場合がある。

また、窪薗晴夫(2004) 伊東美津(2008)は「マンガボン漫画本」「フルホン古本」などの例で「語全体が4モーラまでの場合には連濁が生じにくく、4モーラを超える場合には連濁が生じる」と述べている。一方で「エドボン江戸本」「オヤボン親本」「コボン子本」などのように、語全体が4モーラまでの場合でも連濁が起こることがあり、モーラ数の観点では説明できない。

但し窪薗がモーラ数を取り上げたのは、いわゆる単純語と合成語の境界においての音韻標識としての働きを主張するものである。その具体例に「電話番号などの数字列アクセントは4モーラを最大の単位としてアクセント構造が決定され」たり、「日本語の短縮語形成は 4 モーラ以下の語を作ることが必要条件」であったりする現象が挙げられ、「4 モーラと 5 モーラの間に音韻的に大きな境界があり、5 モーラ以上の単純語は音韻的には合成語として機能している」としている。詳細は本論第３章で述べるが、この観点でみてみると、つまり濁音形で現れている場合は「マンガボン$_{漫画本}$」でも「エドボン$_{江戸本}$」でも合成語（派生語）として認識される傾向があり、濁音形「～ボン$_{本}$」は接尾辞的機能を有している可能性が考えられる。

(5) 固有名詞・一般名詞の連濁

鈴木豊(2013)は『日本国語大辞典　第 2 版』を対象に「～サン$_{山}$」の連濁について考察し、結論として「普通名詞および固有名詞（人名）は連濁する」「固有名詞（山名）は連濁しない」とまとめている。確かに外国の山を指す場合でも「アララトサン$_{アララト山}$」（トルコ）「エトナサン$_{エトナ山}$」（イタリア）など清音形で現れる場合が圧倒的に多い。一方で鈴木が挙げた語例には「ダイセツザン$_{大雪山}$」「ヒエイザン$_{比叡山}$」などのように、山名に使われているにもかかわらず連濁する例外も多い。これらについては固有名詞・一般名詞の観点では説明できない。

2-3　漢語連濁の通時的研究の可能性

このように今までの漢語連濁の研究では、ある程度の傾向性がみられるものの、現代語において例外も数多くみられる。

研究方法からみれば、奥村三雄(1952)・沼本克明(1982)は古い時代の日本語を中心に考察したが、それが現代語になって連濁状況が変わる場合も多々ある。奥村の例からみれば、古く濁音形「シンゴウ$_{信仰}$」「シンダイ$_{身体}$」だったものが現代では清音形「シンコウ$_{信仰}$」「シンタイ$_{身体}$」になっている。奥村は「各時代・各言語社会においては、それ＼゛／一定の条件のもとに連濁が行われたのだが、それら各時代における連濁の結果的現象が、時の推移と共に、各々かつてな変遷過程をたどつてきた為、現代の如き複雑な状態になつたのだ」と述べ、各時代の連濁条件は変わっていくものだと主張している。つまり、奥村・沼本が指摘している鼻音条件、声調条件は日本語史においてある時期に規則的に適用していたが、前述した 2-2 の（1）鼻音による連濁、(2) 声調と連濁、(3) 呉音・漢音の連濁で挙げた例外のように、現代では別の条件へと変わっていることも考えられる。ではこれらの漢語は現代での

連濁条件とは何か。これについては、未だに不明とされている。

一方、窪薗晴夫(2004)・鈴木豊(2013)は現代語を中心に考察したものである。しかし何故 2-2 の（4）モーラ数と連濁、(5) 固有名詞・一般名詞の連濁で述べたような例外が存在するのか。また何故「～本」と「～山」は互いに異なる連濁条件が働いているのか。これらの問題はまだ未解決に残されている。

このように、今までの漢語連濁の研究は古代語にせよ現代語にせよ、主に共時的に連濁の条件を探るのが多いが、上述のように未だに数多くの課題が残っている。金田一春彦(1976)は「連濁の原因を明らかにするためには、個々の語の古い姿が明らかになることが必要である」と述べ、連濁の通時的研究の重要性を示唆している。

そこで本論文では、例として「～産（サン・ザン)」「～勢（セイ・ゼイ)」「～本（ホン・ボン)」を取り上げ、実際に漢語連濁の史的変遷の考察を通して、現代での連濁条件を再検討し、連濁の通時的研究による可能性を検証する。

研究対象を「～産」「～勢」「～本」にする理由は、「～産」も「～勢」も「～本」も、「ソウザン早産」「リュウザン流産」「カンコクゼイ韓国勢」「アメリカゼイアメリカ勢」「ブンコボン文庫本」「コウリャクボン攻略本」などのように、鼻音の前接がないのに濁音で現れる場合があるからである。2-2 の（1）鼻音による連濁でも述べたように、一般的には漢語は鼻音の後で連濁が起こりやすいとされているが、しかし、現代では鼻音の後以外の連濁もかなり行われているとすれば、では現代では「～産」「～勢」「～本」にはどのような連濁の条件が働いているのか。この問題を本論文で明らかにしたい。

また、「～勢」の連濁に関する研究は未だにみられていない。「～勢」は現代ではどのような条件の下で連濁しているのか。また「～産」「～本」の連濁に関する研究はみられてはいるものの（本論第１章・第３章を参照)、共時的に連濁の条件を探る方法であったため、これらを通時的に考察することによって何か新しい発見はできないか。以上の理由で、本論文で「～産」「～勢」「～本」を対象に、連濁の史的変遷を考察する。

３．調査方法と資料

3-1　調査方法

調査にあたって、まず「～産」「～勢」「～本」を含む語彙を徹底的に収集した。『邦訳日葡辞書逆引索引』、『逆引き広辞苑』、ジャパンナレッジ版　『日本国語大辞典』の後部一致機能などで「～本」「～産」の語彙を集めた。次にこれらを『日本国語大辞典　第２版』やジャパンナレッジ版『新編　日本古典文学全集』、『日本古典文学大

系』などの索引、古辞書、近現代辞書などで所在を明らかにし、出現した箇所を影印・複製・活字本（清濁は原本のままのもの）などで確認した。その際「シュッサン出産」「ヒッセイ筆勢」「ケッポン欠本」などのように、入声音・促音につづく「～産」「～勢」「～本」の語例は連濁を起こしていないので、考察対象から省いた。

用例の清濁の判別については以下のように処理した。

(a) 単に漢字表記されていて音表記がない場合は、清濁不明とする。

例：陰陽失理並使難産也『医心方』

漢字に振り仮名が付いている、若しくは仮名書きで現われる場合、(b) 濁点があるものは積極的に濁音と認める。

例：・御乳には、前右大将宗盛卿の北方と定られたりしか、去七月に難産（なんざん）をしてうせ給しかば『高野本平家物語』三・公卿揃

・裏店の嚊さん達か寄り合てしもざんとやらのち産（ざん）とやらをとりあげ手は赤蔵になりけれども『傾情智恵鑑』

(c) ただし、ハ行子音をもつ「～本」に撥音が前接する場合は、濁音か半濁音か判断が難しいので、用例採集の対象とはするが、連濁の証拠とはしない。

例：・根本（コンボン）『文明本節用集』六九一

・後には様付てよぶ　よし野はこんぼんの事『好色一代男』五

(d) 読みがあっても濁点がないものは清濁不明とする。

例：・稀なる御筆者の書本（かきほん）、大竹集にてかたるぞかし『諸艶大鑑』七・勤の身は狼の切売よりは

・いと尊げに、数珠おしすりて、女人しやうさんし難からん時にと、もみいれ給時に『海人の刈藻』四

(e) キリシタン文献などのローマ字表記の場合は、「gunjei」は濁音、「taixei」は清音とした。

例:・ソレ　ナラバ　イソイデ　ヲイダセトユウテ、gunjei　ヲ　モヨヲス　ト、キコエタレバ『天草版平家物語』10

・Taixei. タイセイ（大勢）　Vôqina iqiuoi.（大きな勢）大きな勢力，あるいは，猛烈さ『邦訳日葡辞書』

古い資料の調査にあたって、清音形で現れていても、その実際の発音は清音ではなく濁音・半濁音である可能性がある。はっきりと清音である証拠となるのはキリシタン資料によるローマ字表記などと、かなり限られている。一方で、文献に濁音形で現れた場合は、その実際の発音も基本的に濁音だといえる。但し、ハ行頭音の「～ホン本」については、撥音「ン」が前接していると、濁音形で現れている場合でも実際の発音は半濁音である可能性がある。このように、清音と証明できる確証は少なく、濁音と証明できる確証は比較的に多い。また、序論の 2-1 で述べたように、和語は連濁しやすいのに対して漢語は連濁しない場合が多い。したがって本論文では、文献に現れた濁音形を主たる手掛かりにして、その出現時期等の考察を通して、古い時代から現代への変遷過程を明らかにして、現代での連濁条件を再検討する。

3-2　資料

用例の調査にあたって、使用した資料等は以下のとおりである。

Ａ．原本、あるいは原本の影印・写真版

（1）歌経標式

使用資料：『歌経標式　影印と注釈』2008 おうふう（影印）

底本：a. 天理大学附属天理図書館蔵竹柏園本（真本）（江戸時代の書写）

b. 東京国立博物館本（真本）（江戸時代の書写）

c. 宮内庁書陵部本（抄本）（真本の抄出本）

（成立時期はいずれも江戸期以降とされているので、参考程度にとどめる。但し書写された内容については、奈良時代の原本を反映していると考えられる）

（2）日本霊異記（日本国現報善悪霊異記・日本国善悪現報霊異記・日本国霊異記）

使用資料：『尊経閣善本影印集成』40『日本霊異記』2007 八木書店（影印）

底本：尊経閣文庫所蔵『日本国霊異記』（嘉禎二（1236）年の書写。後代による

ものであるので、参考程度にとどめる。但し書写された内容は奈良時代の状況を反映していると考えられるため、用例の収集に使用する）

(3) 延喜式

使用資料：覆刻日本古典全集『延喜式』1978 現代思潮社（複製）

底本：享保版（明暦版「延喜式」を享保八（1723）年に改訂して刊行したもの。江戸時代の刊行であるので、参考程度にとどめる。但し内容については、平安時代の原本を反映していると考えられる）

(4) 医心方

使用資料：覆刻日本古典全集『医心方』1978 現代思潮社（複製）

底本：安政元年十二月序の版本。（解説により「本会が今複製せる医心方は丹波康頼の撰せる處である」としている。安政の版本であるので、参考程度にとどめる。但し内容については平安時代のものを反映していると考えられる）

(5) 倭名類聚抄

使用資料：『諸本集成倭名類聚抄』京都大学文学部国語学国文学研究室編 1968 臨川書店（複製）

底本：a. 箋注倭名類聚抄（江戸後期の完成）

b. 真福寺本（稲葉通邦摸刻本、弘安六（1283）年の書写）

c. 元和古活字那波道圓本

d. 古簡集影所収の高山寺本（平安末期の書写）

（以上の四本はいずれも後代によるものであるので、参考程度にとどめる。但し書写された内容については平安時代の状況をある程度反映していると考えられる）

(6) 江談抄（水言抄）

使用資料：『尊経閣善本影印集成』44『江談抄』2008 八木書店（影印）

底本：尊経閣文庫所蔵『江談抄』（成立は平安後期とされているが、この底本は寛元三（1245）年の書写にかかるので、参考程度にとどめる。但し内容については平安後期の状況を反映していると考えられる）

(7) 図書寮本類聚名義抄

使用資料：『図書寮本類聚名義抄』1969 勉誠社（複製）

底本：清水谷公揖家旧蔵、書陵部（旧図書寮）本「類聚名義抄」（永保元（1081）年から康和 2（1100 年）年頃に成立かとみられている）

(8) 観智院本類聚名義抄

使用資料：正宗敦夫編『類聚名義抄』1938-40 日本古典全集刊行會（複製）

底本：観智院本の貴重図書複製会による複製本（室町中期の書写とされているため、参考程度にとどめるが、内容については鎌倉時代の状況を反映していると考えられる）

(9) 三巻本色葉字類抄

使用資料：中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄　研究並びに索引　本文・索引編』1964 風間書房（影印）

底本：前田家所蔵の前田本（尊経閣叢刊の覆製本、永禄八（1565）年の書写）
黒川家所蔵の黒川本（古典保存会刊行の覆製本、江戸時代の書写）
（後世によるもので、参考程度にとどめるが、書写された内容については平安末期の状況を反映している考えられる）

(10) 妙一本仮名書き法華経

使用資料：『妙一記念館本仮名書き法華経』1988-93 霊友会（影印）

底本：妙一記念館蔵本（鎌倉中期の書写）

(11) 百丈清規抄

使用資料：『続抄物資料集成』7『百丈清規抄』1980 清文堂出版（影印）

底本：両足院本「勅規桃源鈔」（1462 年成立）

(12) 有林福田方

使用資料：覆刻日本古典全集『有林福田方』1979 現代思潮社（複製）

底本：東京帝室博物館（現東京国立博物館）蔵文明中古写本

(13) 文明本節用集

使用資料：中田祝夫 1970『文明本節用集研究並びに索引　影印・索引篇』風間書房（影印）

底本：国立国会図書館蔵本「雑字類書」と箱書に題するもの（校注者は、文明六（1474）年の成立かとしている）

(14) 史記抄

使用資料：『抄物資料集成』1『史記抄』1971 清文堂出版（複製）

底本：内閣文庫本（巻末に「寛永三丙寅年閏四月下旬」とあり、寛永三（1626）年のものだとみられる。但し書写された内容については、室町時代の原本の状況を反映していると考えられる）

(15) 温故知新書

使用資料：『温故知新書』1962 白帝社（複製）

底本：前田家蔵本

(16) 乾本節用集

使用資料：『乾本　節用集』1961 白帝社（複製）

底本：草書本

(17) 山谷抄

使用資料：『続抄物資料集成』6『山谷抄』1980 清文堂出版（影印）

底本：両足院本（1500 年頃に成立）

(18) 毛詩抄

使用資料：抄物大系『毛詩抄』1971-72 勉誠社（影印）

底本：東京教育大学附属図書館蔵本（旧船橋家蔵）古活字版「毛詩抄」（解説により書写時期は永正頃から天文頃までかとしている）

(19) 漢書列伝竺桃抄

使用資料：『京大附属図書館蔵本漢書列伝竺桃抄』1968 尾道短期大学国文研究室（複製）

底本：京都大学附属図書館清家文庫所蔵本（解説では「大永三・四年ごろ、月舟を通じて借覧・転写したもの」としている）

(20) 四河入海

使用資料：『抄物資料集成』2-5『四河入海』1971 清文堂出版（複製）

底本：書陵部蔵本（凡例により「後世の補写と思える「巻一之一」、および脱葉と思える「巻一八之三」の四二丁二葉は、土井忠生氏蔵本でおぎなった」ため、内容については室町時代の状況を反映していると考えられる）

(21) 古文真宝桂林抄

使用資料：『続抄物資料集成』5『古文真宝桂林抄　古文真宝彦龍抄』1980 清文堂出版（複製）

底本：京都大学附属図書館所蔵（巻末に「天文十四乙巳岂四月廿三日書了塩沢氏」とあり、天文十四（1545）年のものだとみられる）

(22) 運歩色葉集

使用資料：中田祝夫、根上剛士、野沢勝夫編『中世古辞書四種研究並びに總合索引　影印・索引篇』1971 風間書房（影印）

底本：静嘉堂文庫蔵本（松井簡治旧蔵本）（解説では書写時期について「川瀬博士〈呂注：川瀬一馬〉によれば「室町末期を降るまじき書写本であって、恐らく天文十六・十七の著作年代を去る遠からぬ頃のもの」である」としている）

(23) 三代格（類聚三代格）

使用資料：『尊経閣善本影印集成』37『類聚三代格』2005 八木書店（影印）

底本：尊経閣文庫所蔵『類聚三代格』の写本（解説では「もと三条西家に伝来した中世後期の写本であり、前田家が、三条西家の文庫修造と蔵書整理修覆の事業を経て江戸時代中期に入手し現在に伝えるものである」とし、中世後期の写本を三条西家が整理・修復したものだとみられる）

(24) 天正十八年本節用集

使用資料：『天正十八年本節用集』1961 白帝社（複製）

底本：巻末に「干時天正十八年庚寅」とあるため、天正十八（1590）年のものだとみられる。

(25) サントスの御作業

使用資料：キリシタン資料集成『サントスの御作業』1976 勉誠社（複製）

底本：オックスフォード大学ボドレイアン文庫所蔵（天正十九（1591）年に加津佐にて刊行された『サントスの御作業のうち抜書』）

(26) 天草版平家物語

使用資料：江口正弘編『天草版平家物語対照本文及び総索引』1986 明治書院（影印）

底本：ロンドン大英図書館蔵本（1592 年刊）

(27) 天草版伊曽保物語

使用資料：福島邦道解説『伊曽保物語　天草版』1976 勉誠社（複製）

底本：ロンドン大英図書館蔵本（1593 年刊）

(28) 羅葡日辞書

使用資料：『羅葡日対訳辞書』1979 勉誠社（複製）

底本：1595 年刊天草版羅葡日対訳辞書の Oxford 大学 Bodleian Library 所蔵本

(29) 高野本平家物語

使用資料：『笠間影印叢刊』50-61『高野本平家物語』1973-74 笠間書院（影印）

底本：東京大学国語研究室蔵（解説では「本文は慶長ごろの書写にかかり」としているが、書かれた内容は鎌倉時代の状況を反映していると考えられる）

(30) 玉塵抄

使用資料：中田祝夫編『玉塵抄』1972 勉誠社（影印）

底本：国立国会図書館所蔵本（慶長二（1597）年の写本）

(31) 易林本節用集

使用資料：中田祝夫編『古本節用集六種研究並びに總合索引　影印・索引篇』1979 勉誠社（影印）

底本：国立国会図書館蔵本（慶長二（1597）年原刻本乾本）

(32) 詩学大成抄

使用資料：柳田征司著『詩学大成抄の国語学的研究』1975 清文堂出版（影印）

底本：米沢図書館蔵写本 10 冊、その他米沢本に存せず、岩瀬文庫蔵写本 1 冊（解説より「室町時代末期の写」とされている）

(33) 饅頭屋本節用集

使用資料：中田祝夫編『古本節用集六種研究並びに總合索引　影印・索引篇』1979 勉誠社（影印）

底本：東京教育大学附属図書館蔵本（室町末期刊本）

(34) 日葡辞書

使用資料：土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』1980 岩波書店（原本の和訳）

底本：オックスフォード大学ボードレイ文庫蔵本（1603-04 年刊）（室町後期の状況を反映しているとされている）

(35) 元和三年板下学集

使用資料：『古辞書叢刊』2『元和三年板下学集』1968 新生社（複製）

底本：湯本本

(36) 三河物語

使用資料：中田祝夫編『三河物語』1970 勉誠社（影印）

底本：大久保家蔵の自筆原本（成立時期について解説によると、上巻は寛永二（1625）年七月十八日、中巻は寛永二年九月廿八日、下巻は寛永三（1626）年六月十日である）

(37) 蒙求抄

使用資料：抄物大系『蒙求抄』1971 勉誠社（影印）

底本：国立国会図書館所蔵、寛永十五年版「蒙求抄」

(38) 初印本毛吹草

使用資料：『初印本　毛吹草』1978-80 ゆまに書房（影印複製）

底本：八木敬一所蔵本

(39) 啓迪集

使用資料：ノートルダム清心女子大学附属図書館所蔵線装本『啓迪集』八冊

底本：ノートルダム清心女子大学附属図書館ホームページにより、国立国会図書館所蔵本を複写・製本したものである（成立時期については、巻八の巻末に「文化丙子秋分奈須恒徳謹句」とあるものの、奥付に「慶安貳己丑歳仲秋日　上村次郎右衛門開板」とあるため、慶安二（1649）年のものだとみられる）

(40) 廣瀬文庫版太平記

使用資料：「九大コレクション貴重資料画像」九州大学附属図書館（電子版写真）

底本：平仮名の絵入本（寛文頃刊無刊記本）

(41) 捷解新語

使用資料：『三本対照　捷解新語』1972-73 京都大学文学部国語学国文学研究室（複製）

底本：a.原刊本（1676 年刊）で、旧奎章閣本（昭和 9 年、古典刊行会による複製本）

b.改修本（1781 年刊）で、東洋文庫蔵旧幣原博士蔵本

c.文釈で、旧奎章閣、現ソウル大学校蔵本

(42) 恵空編節用集大全

使用資料：中田祝夫編『恵空編節用集大全研究並びに索引 影印・索引篇』1975 勉誠社（影印）

底本：無窮会神習文庫蔵「節用集大全」（延宝八（1680）年刊）

(43) 好色一代男

使用資料：『新編西鶴全集』1　2000-07 勉誠出版（翻刻、原本複製あり）

底本：旧赤木文庫（横山重）蔵本（天和二（1682）年刊）

(44) 諸艶大鑑

使用資料：『新編西鶴全集』1　2000-07 勉誠出版（翻刻、原本複製あり）

底本：京都大学附属図書館蔵本（貞享元（1684）年刊）

(45) 病名彙解

使用資料：「河村文庫画像データベース」滋賀医科大学附属図書館（電子版写真）
底本：貞享三（1686）年本（蘆川桂洲によって著された病名病症辞典）

(46) 好色一代女

使用資料：『新編西鶴全集』1　2000-07 勉誠出版（翻刻、原本複製あり）
底本：国立国会図書館蔵の特製本（五巻五冊）と真山青果記念館蔵の第一次再摺本（第六巻）（貞享三（1686）年刊）

(47) 本朝二十不孝

使用資料：『新編西鶴全集』2　2000-07 勉誠出版（翻刻、原本複製あり）
底本：国立国会図書館蔵本（貞享三（1686）年刊）

(48) 懐硯

使用資料：『新編西鶴全集』3　2000-07 勉誠出版（翻刻、原本複製あり）
底本：底本の所蔵情報なし（解題では校注者は早稲田大学附属図書館蔵本（五巻五冊）と天理図書館蔵本（巻一、二、五）と大阪府立中ノ島図書館蔵本（巻三、五）を挙げ、また翻刻・原本複製の内容は五巻の内容が全部揃っているため、早稲田大学附属図書館蔵本を底本にして天理図書館蔵本と大阪府立中ノ島図書館蔵本を参考に校注を行った可能性があるとみられる。校注者は、この三本はいずれも初版本ではないとしている、早大本の印記に「詞華堂　待賈堂　江戸四日市古今珍書僧達摩屋五一　饗庭文庫」とあるため、江戸末期のものかとみられる。したがって、内容は江戸前期の初版本をある程度反映していると考えられるが、但し清濁に関しては江戸末期の状況を反映している可能性がある）

(49) 補忘記（貞享版）

使用資料：『補忘記　貞享版』1962 白帝社（複製）
底本：底本の所蔵情報なし（巻末に「貞享四丁卯歳仲冬望前日」とあるため、貞享四（1687）年のものだとみられる）

(50) 武道伝来記

使用資料：『新編西鶴全集』2　2000-07 勉誠出版（翻刻、原本複製あり）
底本：早稲田大学所蔵本（旧赤木文庫所蔵本）（貞享四年（1687）四月刊）

(51) 日本永代蔵

使用資料：『新編西鶴全集』3　2000-07 勉誠出版（翻刻、原本複製あり）

底本：『近世文学資料類従　西鶴編』9（吉田幸一蔵本の影印）（貞享五（1688）年刊）

(52) 武家義理物語

使用資料：『新編西鶴全集』3　2000-07 勉誠出版（翻刻、原本複製あり）

底本：『近世文学資料類従　西鶴編』10（貞享五（1688）年二月刊行の初版本、吉田幸一蔵本の複製）

(53) 西鶴織留

使用資料：『新編西鶴全集』4　2000-07 勉誠出版（翻刻、原本複製あり）

底本：『近世文学資料類従　西鶴編』16（天理大学附属天理図書館蔵（旧小谷省三蔵）の元禄版原刻本の複製）（元禄七（1694）年刊）

(54) 補忘記（元禄版）

使用資料：『補忘記 元禄版』1962 白帝社（複製）

底本：底本の所蔵情報なし（巻末に「元禄八年歳次乙亥首夏吉旦」とあるため、元禄八（1695）年のものだとみられる）

(55) 倭語類解

使用資料：『倭語類解』1958 京都大学文学部国語学国文学研究室（複製）

定本：金沢庄三郎旧蔵版本（刊年については解説より「十七世紀末から十八世紀初にかけて」とされている）

(56) 弁疑書目録

使用資料：森銑三、中島理寿編著『近世著述目録集成』1978 勉誠社（影印）

底本：東京都立中央図書館特別買上文庫蔵（中山久四郎旧蔵書）（宝永七（1710）年六月刊）

(57) 書言字考節用集

使用資料：中田祝夫、小林祥次郎『書言字考節用集研究並びに索引　影印・索

引篇』1973 風間書房（影印）

底本：国立国会図書館岡田文庫蔵（享保二（1717）年板本）

(58) 通俗赤縄奇縁（赤縄奇縁）

使用資料：中村幸彦編『近世白話小説翻訳集』2　1984-88 汲古書院（影印）

底本：故長澤規矩也蔵本（宝暦十一（1761）年刊）

(59) 弓勢智勇湊

使用資料：「電子版黒木文庫」東京大学教養学部（電子版写真）

底本：刊記が「明和八年辛卯正月廿日」の版本

(60) 御存商売物

使用資料：a.『日本古典文学大系』59『黄表紙　洒落本集』1958 岩波書店（写真付の翻刻）

b.「電子版霞亭文庫」東京大学附属図書館（電子版写真）

底本：a、b とも東京大学附属図書館霞亭文庫蔵本（天明二（1782）年刊）

(61) 啌多雁取帳

使用資料：現代教養文庫 1037『初期黄表紙』1980 社会思想社（翻刻、原本複製あり）

底本：東京都立中央図書館加賀文庫蔵（天明三（1783）年刊）

(62) 従夫以来記（夫従以来記）

使用資料：現代教養文庫 1107『江戸の戯作絵』1984 社会思想社（翻刻、原本複製あり）

底本：上冊：東京都立中央図書館加賀文庫蔵

中下冊：国立国会図書館蔵（天明四（1784）年刊）

(63) 三筋緯客気植田

使用資料：「国立国会図書館所蔵黄表紙集」CD 復刻版第三期第十一巻『三筋緯客気植田』2010 フジミ書房（電子版写真）

底本：国立国会図書館所蔵本（天明七（1787）年刊）

(64) 隣語大方

使用資料：京都大學文學部國語學國文學研究室編『隣語大方』1963 京都大學國文學會（複製）

底本：ソウル大学所蔵本（寛政頃に成立）

(65) 心学早染艸（大極上請合売心学早染草）

使用資料：現代教養文庫 1039『変革期黄表紙』1982 社会思想社（翻刻、原本複製あり）

底本：東京都立中央図書館東京誌料蔵本、国立国会図書館蔵本（4 ウ 5 オ、6 ウから 11 オまで）（寛政二（1790）年刊）

(66) 江戸繁昌記

使用資料：『新日本古典文学大系』100『江戸繁昌記　柳橋新誌』1989 岩波書店（翻刻、原本複製あり）

底本：青表紙本

(67) 和蘭字彙

使用資料：桂川甫周編『和蘭字彙』1974 早稲田大学出版会（複製）

底本：早稲田大学図書館（安政二（1855）年五月～安政五（1858）年五月刊行）

(68) 西洋事情

使用資料：「デジタルで読む福澤諭吉」（電子版写真）

底本：慶應二（1866）年丙寅初冬尚古堂発兌『西洋事情』

(69) 和英語林集成

使用資料：a. 初版：『和英語林集成』1966 北辰（複製）

b. 再版：『和英語林集成』1970 東洋文庫（複製）

c. 三版：『和英語林集成』1974 講談社（複製）

d. 『和英語林集成　初版・再版・三版対照総索引』2000 港の人

底本：a の初版は 1867 横浜版、b の再版は 1872 横浜版、c の三版は松村明所蔵の丸善商社蔵版、d の総索引は以上三本の対照索引である

(70) 清英交際始末

使用資料：「デジタルで読む福澤諭吉」（電子版写真）

底本：明治二（1869）年己巳初夏尚古堂発兌『清英交際始末』

(71) 布令必用新撰字引

使用資料：『明治期漢語辞書大系』3『令典熟語解　布令必用新撰字引　日誌字解　増補新令字解　未味字解漢語都々逸』1995 大空社（複製）

底本：松井栄一所蔵本（明治二（1869）年四月刊行）

(72) 漢語字類

使用資料：『明治期漢語辞書大系』2『漢語字類』1995 大空社（影印）

底本：松井利彦所蔵本（明治二（1869）年一月刊行）

(73) 日誌字解

使用資料：『明治期漢語辞書大系』3『令典熟語解　布令必用新撰字引　日誌字解　増補新令字解　未味字解漢語都々逸』1995 大空社（影印）

底本：土屋信一所蔵本（明治二（1869）年五月刊行）

(74) 西洋聞見録

使用資料：『明治欧米見聞録集成』1『西洋聞見録』1987 ゆまに書房（影印）

底本：明治二（1869）年四月刊本（後編跋に「明治三年仲秋」とあるため、明治二年刊本の再版かと考えられる）

(75) 新聞雑誌

使用資料：明治文化研究会編『幕末明治新聞全集』1961-62 世界文庫（複製）

底本：東京両国若松町日新堂発行（明治四（1871）年五月の創刊より明治七（1872）年十二月二十八日の終刊まで合計 357 号）

(76) 柳橋新誌

使用資料：『新日本古典文学大系』100『江戸繁昌記　柳橋新誌』1989 岩波書店（翻刻、原本複製あり）

底本：明治七（1874）年刊黄表紙版本

(77) 広益熟字典

使用資料：ノートルダム清心女子大学附属図書館佐藤茂文庫蔵和装本『広益熟字典』（明治八（1875）年十一月序）

(78) 交隣須知

使用資料：『交隣須知』1966 京都大学文学部国語学国文学研究室（影印）

底本：明治初年に国分哲・全桂玉が編纂したもの

(79) 諷誡京わらんべ

使用資料：a.「近代デジタルライブラリー」（電子版写真）

b.坪内雄藏『逍遥選集』1926-27 春陽堂（翻刻）

底本：a.『諷誡京わらんべ全』1886 日野書館

b.底本の所蔵情報はないが、解説より「著者が一回だけは綿密に校正して下されて」とあるため、坪内逍遥の校正による再版かと思われる。

(80) 西国立志編

使用資料：中村正直訳述『西國立志編』1888 修學堂（ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵本）

(81) 日本風景論

使用資料：『日本風景論』1977 飯塚書房（復刻）

底本：政教社、明治二十七（1894）年十月二十七日発行刊本

(82) 福翁百話

使用資料：「デジタルで読む福澤諭吉」（電子版写真）

底本：明治三十（1897）年七月出版時事新報社発兌『福翁百話　全』

(83) 福澤全集緒言

使用資料：「デジタルで読む福澤諭吉」（電子版写真）

底本：明治三十（1897）年十二月出版時事新報社発兌『福澤全集緒言　全』

(84) 福翁自伝

使用資料：「デジタルで読む福澤諭吉」（電子版写真）

底本：明治三十二（1899）年六月時事新報社発行『福翁自傳　全』

(85) るしへる

使用資料：『傀儡師』1971 日本近代文学館（復刻）

底本：芥川龍之介著、大正八（1919）年新潮社版『傀儡師』

(86) 新聞語辞典

使用資料：『近代用語の辞典集成』37『新聞語辞典』1996 大空社（復刻）

底本：千葉亀雄編「新聞語辞典」（栗田書店、昭和八（1933）年一〇月）

(87) 暗夜行路

使用資料：『暗夜行路』1969 日本近代文学館（復刻）

底本：座右宝刊行会本（昭和十八（1943）年刊）

（1）～（87）の資料は原本をそのまま反映するものである。そのため、以上の資料に現れる濁点は確実に原本にあるといえる。

B．原本の復刻本、あるいは翻刻本だが濁点を原本のままにしたり、校注の際に新に振った濁点を原本にある濁点と区別したりした資料

(88) 海人の刈藻（海人刈藻物語）

使用資料：『海人の刈藻　全訳注語句総索引』1991 右文書院（翻刻）

底本：宮内庁書陵部本の写真版

清濁：凡例より特に清濁に関する説明はない。但し「書写形式は可能な限り底本にならった」や「漢字・仮名の区別・仮名遣などは底本のままとした」との説明があり、濁点は底本によったと考えられる。

(89) 源平盛衰記

使用資料：『通俗日本全史』3『源平盛衰記』1912 早稲田大学出版部（翻刻）

底本：片仮名本

清濁：凡例より特に清濁に関する説明はない。但し、「本文外の記入本を、本文と区別せる点に於て、裨益尠からずと雖も、校訂者が陋劣なる片仮名本に依りて傍訓句読点を附し、噴飯すべき漢文の誤読をも、其儘に大切に保存したるは惜まざるべからず」とあり、濁点は底本によったと考えら

れる。

(90) 保元物語

使用資料 :『日本古典文学大系』31『保元物語　平治物語』1961 岩波書店（翻刻）

底本：金刀比羅宮所蔵本（成立時代については編集者は室町時代かと推測している）

清濁：凡例より「濁音符の有無は底本の通りにした」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(91) 平治物語

使用資料 :『日本古典文学大系』31『保元物語　平治物語』1961 岩波書店（翻刻）

底本：金刀比羅宮所蔵本（成立時代については編集者は室町時代かと推測している）

清濁：凡例より「濁音符の有無は底本の通りにした」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(92) 延慶本平家物語

使用資料：北原保雄、小川栄一編『延慶本平家物語』1990-96 勉誠社（翻刻）

底本：大東急記念文庫蔵（成立時期については、解説では「延慶書写のものを、応永二十六、七年（1419、1420）のころに同じ根来寺の諸院において、多聞丸、有重、融憲、有淳などの学僧が手分けして書写したものであると知られる」としている）

清濁：凡例より「底本においては濁点の打たれているところはきわめてわずかであるが、読みやすさを図って、濁点のない仮名にも適宜濁点を施す。そして、底本にもとからある濁点はその旨を頭注欄に注記する」とある。そのため、頭注欄に注記した場合、その箇所の濁点は底本によったことになる。

(93) 応永本論語抄

使用資料 :抄物大系『東山御文庫蔵称光天皇宸翰　応永二十七年本論語抄』1976 勉誠社（翻刻）

底本：東山御文庫蔵御本論語抄五冊（その第一冊が称光天皇宸翰である）

清濁：凡例より「本書の濁点は原本のままである」とあり、濁点は底本によっ

たと思われる。

(94) 六物図抄

使用資料：寿岳章子，樺島忠夫，大塚光信編『永正本六物圖抄　附解説及索引』1959（翻刻）

底本：壽岳章子現蔵本（巻末に「永正五歳次戊辰新正吉晨　慧山自悦回回」とあり、永正五（1508）年のものだとみられる）

清濁：凡例より「傍訓濁点などは原本のまゝで私意を加えていない」とあり、濁点は底本によったと考えられる。

(95) 湯山聯句抄（湯山聯句鈔）

使用資料：来田隆編『湯山聯句抄　本文と総索引』1997 清文堂出版（翻刻）

底本：京都大学附属図書館谷村文庫蔵文禄三（1594）年写本

清濁：凡例より「濁点は底本のままとした」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(96) 虎明本狂言集

使用資料：『大蔵虎明本狂言集の研究』1972-83 表現社（翻刻）

底本：笹野堅編『古本能狂言集』影印版

清濁：凡例より「本書では底本のままにして私意は加えない」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(97) 釈迦の本地（釈迦の御本地）

使用資料：『室町時代物語大成』7　1973-88 角川書店（翻刻）

底本：a. 戸川浜男蔵写本（解説より「書写の年代は近世初頭と推定される」とある）

b. 赤木文庫蔵本（寛永二十（1643）年刊本）

清濁：凡例より「濁点は、原則として原本通りとしたが、なかに、読みやすくするために、校訂者が新たに濁点を加えた本がある。そのような本については、前付の解説の中でその旨をことわった」とある。特に解説で説かれていない場合は、濁点は底本によったと考えられる。

(98) 満散利久佐

使用資料：『近世文藝資料』9『近世初期遊女評判記集』1965 古典文庫（翻刻）

底本：天理図書館蔵本（明暦二（1656）年刊）

清濁：凡例より「当然濁点を施すべきところに、濁点のない例が多いのであるが、これも原文通りにした」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(99) 野郎虫

使用資料：『歌舞伎評判記集成』1　1972-77 岩波書店（翻刻）

底本：天理図書館蔵（巻末に「万治三庚子年四月上旬」とあり、万治三（1660）年のものだとみられる）

清濁：凡例より「仮名表記及び濁点の有無は底本通りにして改めなかった」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(100) 前太平記

使用資料：板垣俊一校訂『前太平記』1988-89 国書刊行会（翻刻）

底本：国立公文書館内閣文庫所蔵の片仮名交り本『前太平記』（無刊記四十一冊本）（成立時期について解題では「本書の成立は、貞享年間から元禄の初期あたりであった、と推測できる」としている）

清濁：凡例より「仮名の清濁はほぼ原文に従ったが、多少半濁点を補った」とあり、少なくとも濁点は底本によったと考えられる。

(101) 佐々木先陣

使用資料：『近松全集』1　1985-96 岩波書店（翻刻、原本複製あり）

底本：大阪大学図書館蔵本（解説より貞享三（1686）年七月の上演だとされている）

清濁：凡例より「仮名遣、清濁、誤字、衍字は底本通りとした」とある。濁点は底本によったと考えられる。

(102) 好色破邪顕正（好色破邪顕）

使用資料：『近世文藝資料』10『好色物草子集』1968 古典文庫（翻刻）

底本：尾崎久彌蔵本（貞享四（1687）年五月序）

清濁：凡例より「濁点の有無は原本通りにした」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(103) 烏帽子折

使用資料：『近松全集』2　1985-96 岩波書店（翻刻、原本複製あり）

底本：天理図書館蔵本（解説によると、元禄三（1690）年正月に上演したと推定されている）

清濁：凡例より「仮名遣、清濁、誤字、衍字は底本通りとした」とある。濁点は底本によったと考えられる。

(104) 元禄大平記（大平記）

使用資料：『評釋江戸文學叢書』2『浮世草子名作集』1970 講談社（翻刻）

底本：元禄十五（1702）年三月刊本

清濁：凡例より「新たに濁点を加へたものは・符を以て之を示し」とあり、特に「・」が加えられていない濁点は底本によったと考えられる。

(105) 土井本太平記

使用資料：西端幸雄、志甫由紀恵共編『土井本太平記　本文及び語彙索引』1997 勉誠社（翻刻）

底本：故土井忠生蔵『太平記』（古筆了仲による「元禄十六年」の極め書があることから、元禄十六（1703）年のものだとみられる）

清濁：凡例より「墨によって施されている読点・濁点、さらには踊り字なども底本のままとした」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(106) けいせい伝受紙子

使用資料：a.『新日本古典文学大系』78『けいせい色三味線　けいせい伝受紙子　世間娘気質』1989 岩波書店（翻刻）

b.『八文字屋本全集』2　1992-2013 汲古書院（翻刻）

底本：a. 四之巻までは国立国会図書館蔵の初印本、五之巻および奥付はケンブリッジ大学蔵の初印本による

b. 国立国会図書館蔵本（一～四之巻は初印本（京大本）、五之巻は復印本（天理本）による）（ケンブリッジ大本・京大本の初印本の奥付には「宝永七年閏八月吉日」との刊記があり、宝永七（1710）年のものだとみられる）

清濁：a. 凡例より「清濁は校注者の判断により、「かかやく（輝）」「こうりよく（合力）」「せんしよう（僭上）」等現今と異るものもいちいち注しない。

「けふり」「さふらひ」「たはふれ」「とふらふ」の類の語の処理はなお問題が存すると思われるので原本のままにした。「かたふく」は原本に濁点を付した箇所のみ濁点を付した」とある。濁点が付いている場合は、底本にも濁点で現れたと考えられる。

b. 凡例より「漢字や濁音のない仮名に濁点をつけている場合は右肩に「†」を付けた」とあり、特に「†」が付けられていない場合の濁点は、底本によったと考えられる。

(107) 傾城禁短気

使用資料：a.『日本古典文学大系』91『浮世草子集』1966 岩波書店（翻刻）
b.『八文字屋本全集』2　1992-2013 汲古書院（翻刻）

底本：a. 京都大学文学部蔵無刊記初摺本
b. 東京大学総合図書館蔵本（巻末に「宝永八年卯月吉日」とあり、宝永八（1711）年のものだとみられる）

清濁：a. 凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「出来る限り原本の面影を残そうとした。仮名遣・振仮名・誤字・衍字・宛字など、すべて原本に従って改めず、必要ある場合は頭注に指摘した」との記述がみられる。このことから、特に頭注に指摘されていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

b. 凡例より「漢字や濁音のない仮名に濁点をつけている場合は右肩に「†」を付けた」とあり、特に「†」が付けられていない場合の濁点は、底本によったと考えられる。

(108) 嫗山姥

使用資料：『近松全集』7　1985-96 岩波書店（翻刻、原本複製あり）

底本：東洋文庫（三Ｆ・ａほ・イ９）（解説より上演は正徳二（1712）年九月以前と推定されている）

清濁：凡例より「仮名遣、清濁、誤字、衍字は底本通りとした」とある。濁点は底本によったと考えられる。

(109) 艶狩剣本地

使用資料：『近松全集』9　1985-96 岩波書店（翻刻、原本複製あり）

底本：文楽協会山城少掾文庫（義太夫・近松・一三〇）（解説より上演は正徳四

（1714）年とされている）

清濁：凡例より「仮名遣、清濁、誤字、衍字は底本通りとした」とある。濁点は底本によったと考えられる。

（110）史林残花

使用資料：『洒落本大成』1　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：練木準蔵本（細見末に「享保十五年毎月改　遊戯堂発行」とあり、享保十五（1730）年のものだとみられる）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。そのため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

（111）当風辻談義

使用資料：『談義本集』3　1994 古典文庫（翻刻）

底本：宝暦三（1753）年刊本

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「本文の翻刻については、できる限り原本に忠実にと心懸、また挿絵は全て収めた。誤字、脱字、仮名遣いの誤り、衍字などは、原文のままとし、できるだけ右傍に（ママ）を附した」との記述がみられる。このことから、特に右傍に（ママ）が付いていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

（112）教訓不弁舌（教訓不辯舌）

使用資料：『談義本集』3　1994 古典文庫（翻刻）

底本：東京国立博物館本、国立国会図書館本（刊年については巻之五に「宝暦四甲戌載孟春吉旦」とあり、宝暦四（1754）年のものだとみられる）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「本文の翻刻については、できる限り原本に忠実にと心懸、また挿絵は全て収めた。誤字、脱字、仮名遣いの誤り、衍字などは、原文のままとし、できるだけ右傍に（ママ）を附した」との記述がみられる。このことから、特に右傍に（ママ）が付いていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(113) 禁現大福帳

使用資料：『洒落本大成』2　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：国立国会図書館蔵本（巻末に「宝暦五ッのとし初春」とあり、宝暦五（1755）年のものだとみられる）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。そのため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(114) 傾城買指南所

使用資料：『洒落本大成』7　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：東京都立中央図書館（加賀文庫）蔵本（叙末に「安永七ッの　とし　戌の春　田水金魚撰」とあるため、安永七（1778）年のものだとみられる）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。そのため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(115) 淫女皮肉論

使用資料：『洒落本大成』7　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：天理図書館蔵本（序末に「安永七　戌の孟春　田水金魚撰」とあるため、安永七（1778）年のものだとみられる）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。そのため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(116) 耳嚢（耳袋）

使用資料：『日本庶民生活史料集成』16『奇談・紀聞』1970 三一書房（翻刻）

底本：巻一～五：東北大学図書館所蔵狩野文庫本　巻六、巻八～十：日本芸林叢書本　巻七：尊経閣本（成立時期について、解説では以上三本の底本の書写時期がそれぞれ違うが、巻一の内容の下限は天明二年春で、最終巻の巻十の下限は文化十一年六月としている。これらの事情を考えると、底本の成立時期は天明頃から文化頃かと思われる）

清濁：凡例より「原則として濁点は底本のままとした」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(117) 歌妓琴塩屋之松

使用資料：『洒落本大成』2　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：東京都立中央図書館（加賀文庫）蔵本（天明三（1783）年春の刊行）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。そのため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(118) 契情手管智恵鏡（傾城智恵鑑）

使用資料：『洒落本大成』2　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：天理図書館蔵本（解説では「刊行は天明三年初春の蔦屋板である」としている）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。そのため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(119) 二日酔巵觶

使用資料：『洒落本大成』12　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：東京都立中央図書館（加賀文庫）蔵本（序末に「天明四三月　万象亭述印」とあり、天明四（1784）年のものだとみられる）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。そのため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(120) 手管早引廓節要（廓節要）

使用資料：『洒落本大成』17　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：東京都立中央図書館（加賀文庫）蔵本（自序末に「維時寛政十をとれば初会　の春　遊于式亭草堂　楽亭馬笑述　㊞回」とあり、寛政十（1798）年のものだとみられる）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。そのため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(121) 甲子夜話

使用資料：『洒落本大成』20　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：故長沢規矩也蔵本（刊年について、解説は「寛政十三年（享和元年)」刊としてよい）としている）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。そのため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(122) 椿説弓張月

使用資料：『日本古典文学大系』60-61『椿説弓張月』1958-62 岩波書店（翻刻）

底本：鈴木重三所蔵の初版本（文化四－五(1807-08)年刊）

清濁：凡例より「濁点・半濁点も底本にあるものだけをつけ、当然あるべき所にも底本にない時はつけなかった」とある。濁点は底本によったと考えられる。

(123) 浮世風呂

使用資料：『日本古典文学大系』63『浮世風呂』1957 岩波書店（翻刻）

底本：森武之助蔵本（文化五（1808）年脱稿、文化六（1809）年正月刊行）

清濁：凡例より「濁点・半濁点は底本にあるものだけをつけ、当然あるべきとみられても、底本にない場合にはつけなかった」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(124) 浮世床

使用資料：中西善三校註『浮世床』1955 朝日新聞社（翻刻）

底本：吉田幸一蔵本

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「誤字嵌字振仮名等はすべて原文通りとした」との記述がみられるため、濁点が現れた場合は底本によったと考えられる。

(125) 南総里見八犬伝

使用資料：『新潮日本古典集成』別巻『南総里見八犬伝』2003-04 新潮社（翻刻）

底本：国立国会図書館蔵、瀧澤家旧蔵本（作者曲亭馬琴の手沢本）

清濁：凡例より「底本の本文にある濁音の符号は、原則として有無をそのままとした」とあり、濁点は底本によったと思われる。

(126) 青楼籬の花

使用資料：『洒落本大成』25　1978-88 中央公論社（翻刻）

底本：九州大学文学部蔵本（文化十四丁丑（1817）年刊）

清濁：凡例より特に清濁についての説明はない。但し、「活字化にあたっては、できる限り底本どおりにすることを原則とした。ただし誤脱と認められるものは、最小限の訂正、あるいは補いをし、補いをした場合には、本文該当個所に＊印をして、解題に注記した」との記述がみられる。その

ため、＊印が付けられたり解題で注記されたりしていないかぎり、濁点は底本によったと考えられる。

(127) 春色梅児誉美

使用資料：『日本古典文学大系』64『春色梅兒譽美』1962 岩波書店（翻刻）

底本：鈴木重三蔵初刷本（1832-33 年刊）

清濁：凡例より「濁点・半濁点で、底本を改めたものは、一々頭注にことわった」とある。頭注で説明されていない濁点は、底本にも出現したと考えられる。

(128) 春色辰巳園

使用資料：『日本古典文学大系』64『春色梅兒譽美』1962 岩波書店（翻刻）

底本：天理図書館所蔵、旧石田元季蔵の初刷本によったが、それに欠けた巻三は鈴木重三所蔵の、巻七・十二は中村幸彦所蔵の同系の本によった（1833-35 刊）

清濁：凡例には「本文作成の要領は梅児誉美と同様である」とあるため、頭注で説明されていない濁点は、底本にも出現したと考えられる。

(129) 明六雑誌

使用資料：「明六雑誌コーパス」2012 国立国語研究所

底本：『明六雑誌』（1874～1875 年、明六社刊）

(130) 朝日新聞

使用資料：「聞蔵Ⅱビジュアル　朝日新聞データベース」（コーパス）

底本：明治十二（1879）年創刊号以来の「朝日新聞」

(131) 女学雑誌

使用資料：「近代女性雑誌コーパス」2006 国立国語研究所

底本：『女学雑誌』（女学雑誌社）1894・1895 年 31 冊、『女学世界』（博文館）1909 年 6 冊、『婦人倶楽部』（講談社）1925 年 3 冊

(132) 太陽

使用資料：「太陽コーパス」2005 国立国語研究所

底本：『太陽』（博文館刊）1895 年、1901 年、1909 年、1917 年、1925 年の通常号

(133) 吾輩は猫である

使用資料：『夏目全集』1　1993－99 岩波書店（翻刻）

底本：夏目金之助蔵の著者自筆原稿

清濁：凡例より特に清濁に関する説明はない。但し、「本全集本文のルビは底本に付されているものと、編集部で施した〔　〕付きのものがある。このうち、底本にあるルビを変更する場合（誤記と判断される場合など）はその旨を記す」とある。したがって、特に〔　〕が付いていないかぎり、ルビに出てくる濁点は底本によったと考えられる。

(134) こゝろ（心）

使用資料：『漱石全集』9　1993-99 岩波書店（翻刻）

底本：原稿等の自筆資料（岩波書店蔵）

清濁：凡例より特に清濁に関する説明はないが、本論文で用例に使用した振り仮名については「ルビ（振り仮名）は、漱石自身により相当数付されている」「底本のルビを、仮名遣いそのままに復元する」「編集部が補うルビは現代仮名遣いとし、原ルビと区別し〔　〕で括る」との説明があり、振り仮名の形態は底本によったと考えられる。

(135) 雁

使用資料：『鴎外全集』8　1971-75 岩波書店（翻刻）

底本：大正四（1915）年五月十五日発行の籾山書店版『雁』

清濁：凡例より「清濁も明らかな誤り以外は底本通りとした」とある。濁点は基本的に底本によったと考えられる。

(136) 明暗

使用資料：『漱石全集』11　1993－99 岩波書店（翻刻）

底本：夏目金之助蔵「漱石山房」原稿用紙

清濁：凡例より特に清濁に関する説明はない。但し、「本全集本文のルビは底本に付されているものと、編集部で施した〔　〕付きのものがある。このうち、底本にあるルビを変更する場合（誤記と判断される場合など）は

その旨を記す」とある。したがって、特に〔　〕が付いていないかぎり、ルビに出てくる濁点は底本によったと考えられる。

(137) 門三味線

使用資料：『明治文学全集』28『斎藤緑雨集』1966 筑摩書房（翻刻）

底本：博文館『縮刷緑雨全集』大正十一（1922）年四月本

清濁：凡例より「しばしばみえるルビにおける濁音、半濁音の省略など、いずれも原のままにした」とあり、濁点は底本によったと考えられる。

(138) 渋江抽斎

使用資料：『鴎外全集』16　1971-75 岩波書店（翻刻）

底本：昭和二十六（1951）年八月十日岩波書店の『鷗外全集』著作篇第七巻所収本文（解説より「大正十二年四月二十五日発行の『鷗外全集』第七巻及び昭和五年五月八日発行の『鷗外全集』第十五巻の口絵として、366 頁 14 行「これに壻を」の「に」脱落、同頁 16 行「持して」の傍訓「じ」の二ヵ所の違いがあるのみである」とある。この二箇所以外の部分は、昭和二十六年のものと大正十二年のものと一致することになる。したがって、本資料では昭和二十六年本を使用されているが、これを以て大正十二年本の内容を知ることができると考えられる）

清濁：凡例より「清濁も明らかな誤り以外は底本通りとした」とある。濁点は基本的に底本によったと考えられる。

(139) 当世書生気質

使用資料：『日本近代文学大系』3『坪内逍遥集』1974 角川書店（翻刻）

底本：春陽堂版『逍遥選集』別冊第一(1926-27 年刊)

清濁：凡例より特に清濁に関する説明はない。但し、「本文の表記は、明らかなる誤字・誤植などをのぞき、かなづかい、漢字、段落、句読点、符号の用いかたなど、すべて右の底本にしたがった」とあるため、濁点は底本によったと考えられる。

(140) 大道無門

使用資料：『昭和文學全集』33『里見弴　菊池寛』1954 角川書店（翻刻）

底本：底本の所蔵情報なし

清濁：濁点は編集者によった可能性があるが、資料は 1954 年のものを使用しているため、少なくとも濁点は昭和中期の状況を反映しているといえる。

（88）～（140）の資料は底本での確認はできなかったが、編集者が複製・翻刻の際に濁点を忠実に再現したもので、濁点は底本によったと考えられる。

なおその他、近現代辞書には以下のものを使用した。

（141）和漢雅俗いろは辞典

使用資料：a.『和漢雅俗いろは辞典』1889 いろは辞典発行部

b.『和漢雅俗いろは辞典　増訂 4 版』1899 いろは辞典発行部

（142）言海

使用資料：a. 大槻文彦『言海』1889 秀英舎

b. 大槻文彦『言海　75 版』1907 秀英舎

c.『大言海』1933 冨山房

（143）日本大辞書

使用資料：『日本大辞書　復刻版』1978 ノーベル書房（1893 年版の複製）

（144）日本大辞林

使用資料：a.『日本大辭林』1894 宮内省

b.『日本大辞林』1907 吉川弘文館

（145）日本新辞林

使用資料：『日本新辞林』1897 三省堂

（146）ことばの泉

使用資料：a.『ことばの泉』1899 大倉書店

b.『大増訂日本大辞典・ことはのいつみ』1914 大倉書店

（147）国民必携類語大辞典

使用資料：『国民必携類語大辞典　18 版』1917 博愛館

(148) 大日本国語辞典

使用資料：a.『大日本国語辞典』1919 金港堂書籍

b.『大日本国語辞典　10 版』1921 冨山房

c.『大日本国語辞典　修訂 6 版』1940 冨山房

(149) 新辭典

使用資料：『新辞典』1929 至文堂

(150) 大辞典

使用資料：『大辭典　覆刻版』1974 平凡社（1934-36 年版の複製）

(151) 言苑

使用資料：『言苑』1938 博文館

(152) 明解国語辞典

使用資料：a.『明解国語辞典　第 12 版』1948 三省堂

b.『明解国語辞典　新装版改訂版』1967 三省堂

(153) 言林

使用資料：『言林』1949 全国書房

(154) 辞海

使用資料：『辞海　縮刷版』1954 三省堂

(155) 角川国語辞典

使用資料：a.『角川国語辞典　25 版』1957 角川書店

b.『角川国語辞典　新版』1988 角川書店

c.『角川国語辞典　新版 68 版』1972 角川書店

d.『角川国語中辞典』1979 角川書店

e.『角川国語大辞典』1982 角川書店

(156) 広辞林

使用資料：a.『広辞林　新版』1958 三省堂

b.『広辞林　第 5 版』1973 三省堂

(157) 新撰国語辞典

使用資料：a.『新選国語辞典』1959 小学館

b.『新選国語辞典　改訂新版』1966 小学館

c.『新選国語辞典　第 6 版』1987 小学館

(158) 旺文社国語辞典

使用資料：a.『旺文社国語辞典』1960 旺文社

b.『旺文社国語辞典　新訂版』1973 旺文社

(159) 三省堂国語辞典

使用資料：a.『三省堂国語辞典』1960 三省堂

b.『三省堂国語辞典　新装版』1968 三省堂

c.『三省堂国語辞典　第 2 版』1974 三省堂

d.『三省堂国語辞典　第 3 版』1982 三省堂

e.『三省堂国語辞典　第 4 版』1992 三省堂

(160) 岩波国語辞典

使用資料：a.『岩波国語辞典　初版』1963 岩波書店

b.『岩波国語辞典　第 2 版』1971 岩波書店

c.『岩波国語辞典　第 3 版』1979 岩波書店

d.『岩波国語辞典　第 4 版』1986 岩波書店

e.『岩波国語辞典　第 6 版』2000 岩波書店

f.『岩波国語辞典　第 7 版』2011 岩波書店

(161) 講談社国語辞典

使用資料：『講談社国語辞典　増補版』1966 講談社

(162) 三省堂新国語中辞典

使用資料：『三省堂新国語中辞典』1967 三省堂

(163) 新国語辞典

使用資料：『新国語辞典　9 版』1967 大修館書店

(164) 広辞苑

使用資料：a.『広辞苑　第 2 版』1969 岩波書店

b.『広辞苑　第 2 版補訂版』1976 岩波書店

c.『広辞苑　第 3 版』1983 岩波書店

d.『広辞苑　第 4 版』1991 岩波書店

e.『広辞苑　第 5 版』1998 岩波書店

f.『広辞苑　第 6 版』2008 岩波書店

(165) 新明解国語辞典

使用資料：a.『新明解国語辞典』1972 三省堂

b.『新明解国語辞典　第 2 版』1974 三省堂

c.『新明解国語辞典　第 3 版』1981 三省堂

d.『新明解国語辞典　第 4 版』1989 三省堂

e.『新明解国語辞典　第 5 版』1997 三省堂

f.『新明解国語辞典　第 6 版』2005 三省堂

(166) 例解国語辞典

使用資料：『例解国語辞典　33 版』1972 中教出版

(167) 日本国語大辞典

使用資料：a.『日本国語大辞典』1975 小学館

b.『日本国語大辞典　第 2 版』2001 小学館

(168) 学研国語大辞典

使用資料：a.『学研国語大辞典』1978 学習研究社

b.『学研国語大辞典　第 2 版』1988 学習研究社

(169) 言泉

使用資料：a.『日本大辞典言泉』1981 日本図書センター

b.『国語大辞典言泉』1986 小学館

(170) 国語大辞典

使用資料：『国語大辞典』1981 小学館

(171) 例解新国語辞典

使用資料：a.『例解新国語辞典』1984 三省堂

b.『例解新国語辞典　第 2 版』1987 三省堂

(172) 現代国語例解辞典

使用資料：『現代国語例解辞典』1985 小学館

(173) 大辞林

使用資料：a.『大辞林』1988 三省堂

b.『大辞林　第 2 版』1995 三省堂

c.『大辞林　第 3 版』2006 三省堂

(174) 福武国語辞典

使用資料：『福武国語辞典』1989 福武書店

(175) 辞林 21

使用資料：『辞林 21』1993 三省堂

(176) 大辞泉

使用資料：a.『大辞泉』1995 小学館

b.『大辞泉　第 2 版』2012 小学館

(177) NHK 日本語発音アクセント辞典

使用資料：『NHK 日本語発音アクセント辞典』1998 日本放送出版協会

(178) 明鏡国語辞典

使用資料：a.『明鏡国語辞典』2002 大修館書店

b.『明鏡国語辞典　第 2 版』2010 大修館書店

(141) ～ (178) の近現代辞書は原本もしくは原本の複製にあたるものであるが、

版を重ねるに際し、前版本の内容をそのまま引き継ぐ場合もあり、内容を増減する場合もある。そのため、初版本の辞書に現れた濁点はそのまま信用する。後版本の辞書に現れた濁点は、その前版本にも濁点で現われた場合は、前版本の濁点を優先に採用する。

このように、用例に濁点の有無の確認には、以上（1）～（178）の資料を使用した。

C．翻刻本で、清濁に関する説明がない、若しくは編集者により新に濁点を付けたときに原本の濁点と区別しなかった資料

（179）万葉集

使用資料：『新日本古典文学大系』1-4『萬葉集』1999 岩波書店（翻刻）

底本：西本願寺本（後代の複製につき、参考程度にとどめるが、内容は奈良時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：清濁に関する説明はない。

（180）続日本紀

使用資料：『新日本古典文学大系』12-16『続日本紀』1989-98 岩波書店（翻刻）

底本：名古屋市博物館蓬左文庫所蔵の蓬左文庫本（後代の書写につき、参考程度にとどめるが、内容は平安時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：清濁に関する説明はない。

（181）凌雲集

使用資料：『羣書類從』123『凌雲集』1980 日本文化資料センター（謄写）

底本：社団法人温故学会所蔵古版本（巻末に「右以弘文院本及太田覃本校正了」とあり、弘文院本・太田覃本の校正本だとみられる。後代の書写であるため、参考程度にとどめるが、内容は平安時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：清濁に関する説明はない。

（182）三代実録（日本三代実録）

使用資料：『増補六国史』9-10『三代實録』1940-41 朝日新聞社（翻刻）

底本：寛文の版本で、跋文に「二三十年来、世有二写書之商一、蔵二本朝群書一、筆耕以為レ養、好レ事者就求レ之、商人所レ写不二精詳一、故三代実録亦文字日変、終至二於不一レ可レ知」とあるもの（成立時期について解説では「寛文十三年三月、松下見林氏の校訂する所なり」としている。後代によるものにつき、参考程度にとどめるが、内容は平安時代の状況を反映していると考えられる）

清濁：清濁についての説明はない。

（183）源氏物語

使用資料：『新日本古典文学大系』19-23『源氏物語』1993-97 岩波書店（翻刻）

底本：古代学協会蔵飛鳥井雅康等筆本五十三冊（大島本）（後代の書写であるため、参考程度にとどめるが、内容は平安時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：凡例より「語の清濁については近年の研究成果を参照して、これを区別する」とある。そのため、文献に付された濁点は、清濁判断の証拠としない。

（184）宇津保物語

使用資料：『日本古典文学大系』10-12『宇津保物語』1959-62 岩波書店（翻刻）

底本：延宝五（1677）年刊行の木板本（後代の版本につき、参考程度にとどめるが、内容は平安時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：凡例より「新たに句読点・濁点を施し」とあり、濁点は編集者によった可能性がある。

（185）本朝文粋

使用資料：『日本古典文学大系』69『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』1964 岩波書店（翻刻）

底本：正保五（1648）年刊本（後代の刊本につき、参考程度にとどめるが、内容は平安時代の原本をある程度反映していると考えられる）

清濁：清濁に関する説明はない。

（186）中右記

使用資料：『増補史料大成』9-15『中右記』1965 臨川書店（翻刻）

底本：村上勘兵衛献本に、近衛・九条二家所蔵本を補写した百九冊（後代の写本につき、参考程度にとどめるが、内容は平安時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：清濁についての説明はない。

(187) 今昔物語集

使用資料：『新日本古典文学大系』33-37『今昔物語集』1993-99 岩波書店（翻刻）

底本：巻一・三・四：東京大学文学部国語研究室蔵　紅梅文庫旧蔵本

巻二・五：京都大学附属図書館蔵　鈴鹿家旧蔵本

（解説では 1120 年頃の写かとしている）

清濁：清濁に関する説明はない。

(188) 後二条師通記

使用資料：『大日本古記録』7『後二條師通記』1956-58 岩波書店（翻刻）

底本：財団法人陽明文庫所蔵の師通自筆本一巻、平安時代の書写にかかる古写本二十九巻（書写年代について解説では「永長元年冬の一巻にのみ仁平元年の奥書があるだけで、他の巻には記されてゐないが、紙質・筆跡・校合の状態等より推して、此の時期に他の巻も写されたものと見受けられる」としている）

清濁：清濁についての説明はない。

(189) 玉葉（玉海）

使用資料：『玉葉』1966 すみや書房（明治三十九年活字本の複製）

底本：明治三十九年国書刊行会によって刊行された『玉葉』（寛政中幕府の写本を活字化したもの。後代の書写につき、参考程度にとどめるが、内容は平安・鎌倉時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：清濁についての説明はない。

(190) 梁塵秘抄

使用資料：『新日本古典文学大系』56『梁塵秘抄　閑吟集　狂言歌謡』1993 岩波書店（翻刻）

底本：天理図書館蔵綾小路家本（室町時代の書写であるため、参考程度にとど

めるが、内容は平安末期の原本の状況を反映していると考えられる）

清濁：凡例より「清濁は校注者の見解による」とある。

(191) 教行信証

使用資料：『定本親鸞聖人全集』1『教行信証』1969 法蔵館（翻刻）

底本：東本願寺蔵国宝真蹟本

清濁：清濁に関する説明はない。

(192) 古今著聞集

使用資料：『日本古典文学大系』84『古今著聞集』1966 岩波書店

底本：宮内庁書陵部蔵本（1254 年跋）

清濁：凡例より「底本には、濁音符・半濁音符を欠くが、校注者の判断によってこれを施した」とある。そのため、文献に付された濁点は、清濁判断の証拠としない。

(193) 春のみやまぢ

使用資料：『中世日記紀行文学全評釈集成』3『源家長日記　飛鳥井雅有卿記事春のみやまぢ』2004 勉誠出版（翻刻）

底本：平野神社蔵本『春のみやまぢ』（巻末に「安永庚子夏六月　正二位前亜槐藤宗城」とあり、安永九（1780）年のものだとみられるが、本文の後に「右仮名記者飛鳥井雅有卿于時三位侍従四十歳述作也」との説明もみられ、本文部分は飛鳥井雅有の作を書き写したものだと思われる。後世の写本につき、参考程度にとどめるが、内容は鎌倉時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：凡例より「必要に応じて句読点・濁点・送り仮名を補い」とあり、濁点は編集者によった可能性がある。

(194) 百錬抄

使用資料：『国史大系』14『百錬抄　愚管抄　元亨釋書』1901 經濟雑誌社（翻刻）

底本：塙保己一校本（後代による校本につき、参考程度にとどめるが、内容は鎌倉時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：清濁についての説明はない。

(195) 河海抄

使用資料：『国文注釈全書』9『河海抄　花鳥餘情　紫女七論』1908 国学院大学出版部（翻刻）

底本：宮内庁図書寮本

清濁：清濁に関する説明はない。

(196) 蔭涼軒日録

使用資料：『大日本仏教全書』133-137『蔭涼軒日録』1980 名著普及会（翻刻）

底本：東京大学附属図書館所蔵本（後代によるものにつき、参考程度にとどめるが、内容は室町時代の状況をある程度反映していると考えられる）

清濁：清濁についての説明はない。

(197) 大乗院寺社雑事記

使用資料：『続史料大成』26-37『大乗院寺社雑事記』1978 臨川書店

底本：内閣文庫本

清濁：清濁に関する説明はない。

(198) 言継卿記

使用資料：a.『新訂増補言継卿記』1、2、5、6　1966-67 続群書類従完成会

b.『言継卿記』3、4　1998 続群書類従完成会

底本：東京大学所蔵自筆原本

清濁：清濁に関する説明はない。

(199) 鶯宿梅（俳諧鶯宿梅）

使用資料：『雑俳集成』1・4『享保江戸雑俳集』1987 東洋書院（翻刻）

底本：『未刊雑俳資料』九期所収本文（享禄十五（1542）年秋成立）

清濁：凡例より「全文に濁点、文中に句読点を加え」とあり、濁点は編集者によった可能性がある。

(200) 臥雲日件録

使用資料：『大日本古記録』13『臥雲日件録抜尤』1961 岩波書店（翻刻）

底本：田中穣所蔵本（旧相国寺光源院の伝蔵本）（解説ではこの底本について「永祿五年二月、妙安八十三歳の晩年に、周鳳の原日記から抄録した「抜尤」

の自筆原本」としている）

清濁：漢文体につき、凡例より清濁についての説明はない。

(201) 言経卿記

使用資料：『大日本古記録』11『言経卿記』1959 岩波書店（翻刻）

底本：東京大学史料編纂所所蔵の自筆原本

清濁：凡例より清濁に関する説明はない。

(202) 慶長古活字本太平記

使用資料：『日本古典文学大系』34-36『太平記』1960-62 岩波書店（翻刻）

底本：慶長八（1603）年の刊記を持つ古活字本

清濁：凡例より「句読点を施し、清濁を区別し」とあり、濁点は校注者によった可能性がある。

(203) 彝倫抄

使用資料：『日本思想大系』28 石田一良、金谷治校注『藤原惺窩　林羅山』1975 岩波書店（翻刻）

底本：東京教育大学附属図書館所蔵版本（解説より「本書の成立は、著者の跋により、寛永十七年であることが知られる」（1640 年）とされている）

清濁：凡例より「濁点を施した」とあり、濁点は校注者によった可能性がある。

(204) 浮世物語

使用資料：『日本古典文学大系』90『仮名草子集』（底本の翻刻）

底本：日比谷図書館蔵本(1665 年頃刊)

清濁：凡例より「濁点は、適宜新に付したが、〈呂中略〉特に問題になりそうな語句の清濁は頭注で説明した」とみられる。濁点は編集者によった可能性がある。

(205) 国町の沙汰

使用資料：『未刊文藝資料』3・5 朝倉治彦、吉田幸一共編『茶屋諸分調方記　元禄六年板　附　禰宜町往來　國町の沙汰』1953 古典文庫（翻刻）

底本：林若樹旧蔵本（延宝二（1674）年写本）

清濁：凡例より「なほこの翻刻に当つては句読点や濁点を施した」とあり、濁

点は編集者によった可能性がある。

(206) 俳諧広原海（寅年誹諧廣原海）

使用資料：『雑俳集成』2・5-6『不角前句付集』1991（翻刻）

底本：『未刊雑俳資料』二三、二四期所収本文（元禄十一（1698）年より十六（1703）年に成立）

清濁：凡例より「全文に濁点、文中に句読点を加え」とあり、濁点は編集者によった可能性がある。

(207) 愚管抄

使用資料：『日本古典文学大系』86『愚管抄』1967 岩波書店（翻刻）

底本：島原市公民館蔵本（成立時期について解説では「筆致より推すと江戸時代前期をさかのぼらないことは確実である」とし、江戸中期頃以降かと思われる）

清濁：凡例より「底本には濁点のある仮名がままある。今、校注者が意によって適宜加除した」とあり、濁点は校注者によった可能性がある。

(208) 国姓爺合戦（父は唐土母は日本国姓爺合戦）

使用資料：『近代日本文学大系』7『近松門左衛門集』下 1927-28 国民図書株式会社（翻刻）

底本：底本の所蔵情報なし。解説では「正徳五年十一月一日より竹本座にて上演」としている

清濁：清濁に関する説明はない。

(209) 女殺油地獄

使用資料：『近代日本文学大系』7『近松門左衛門集』下 1927-28 国民図書株式会社（翻刻）

底本：底本の所蔵情報なし。解説では「享保六年七月十五日より竹本座にて上演」としている

清濁：清濁に関する説明はない。

(210) 童の的（俳諧童の的）

使用資料：『新日本古典文学大系』72『江戸座点取俳諧集』1993 岩波書店（翻刻）

底本：東京大学総合図書館洒竹文庫蔵本（増補板）（宝暦五（1755）年冬刊）

清濁：凡例より「清濁は校注者の判断により、これを区別した」とあり、濁点は編集者によった可能性がある。

(211) 蘐園雑話

使用資料：森銑三、北川博邦編『続日本随筆大成』4　1979-81 吉川弘文館（翻刻）

底本：『日本思想家史伝全集』18 所収本文（首藤多喜馬所蔵写本を活字化したもの）

清濁：凡例より「濁点、句読点などは適宜これを施した」とあり、濁点は編集者によった可能性がある。

(212) 繁野話（古今奇談繁野話）

使用資料：『新日本古典文学大系』80『繁野話　曲亭伝奇花釵児　催馬楽奇談　鳥辺山調綫』1992 岩波書店（翻刻）

底本：早稲田大学図書館蔵本（明和三年（1766）正月刊）

清濁：凡例より「仮名の清濁は校訂者において補正した」とあり、濁点は編集者によった可能性がある。

(213) 役者論語

使用資料：守随憲治編『役者論語』1954-73 東京大学出版会（翻刻）

底本：「役者論語」原版本

清濁：清濁に関する説明はない。

(214) 鯛の味噌津

使用資料：『日本名著全集』江戸文芸の部 14『滑稽本集』1927 日本名著全集刊行会（翻刻）

底本：底本の所蔵情報なし（解説では「安永八年の板」（1779 年）としている）

清濁：清濁に関する説明はない。

(215) 当世阿多福仮面

使用資料：『日本名著全集』江戸文芸の部 14『滑稽本集』1927 日本名著全集刊行会（翻刻）

底本：底本の所蔵情報なし（解説では「安永八年の板」（1779 年）としている）

清濁：清濁に関する説明はない。

(216) 白石先生手簡

使用資料：『日本思想大系』35『新井白石』1975 岩波書店（翻刻）

底本：東京大学総合図書館所蔵（萩野本）の写本（巻末に「寛政庚戌正月十六日」とあり、寛政二（1790）年のものだとみられる）

清濁：凡例より「読解の便をはかり<呂中略>濁点を補った」とあり、濁点は編集者によった可能性がある。

(217) 好古小録

使用資料：『日本随筆大成』1・22『三のしるべ　好古日録　好古小録　茅窓漫録』1994 吉川弘文館（翻刻）

底本：『日本芸林叢書』3 所収本文

清濁：清濁に関する説明はない。

(218) 好古日録

使用資料：『日本随筆大成』1・22『三のしるべ　好古日録　好古小録　茅窓漫録』1994 吉川弘文館（翻刻）

底本：静嘉堂文庫所蔵の貞幹自筆の初稿本（本文三十二枚）

清濁：清濁に関する説明はない。

(219) 東牖子

使用資料：『日本随筆大成』1・19『筆の御霊　東牖子　嗚呼矣草　斉諧俗談　一宵話』1994 吉川弘文館（翻刻）

底本：旧大成本（『日本随筆大成』1928 吉川弘文館）1・10 所収本文（巻末に「辛酉秋日　蒹葭隠士恭識」とあり、享和元（1801）年のものかと思われる）

清濁：清濁に関する説明はない。

(220) 東海道中膝栗毛

使用資料：『日本古典全書』51『東海道中膝栗毛』1953 朝日新聞社（翻刻）

底本：初版本

清濁：特に清濁についての説明はない。

(221) 戯作評判花折紙

使用資料：『徳川文藝類聚』12『評判記』1914 国書刊行会（翻刻）

底本：享和二（1802）年の版本

清濁：清濁に関する説明はない。

(222) 戯場粋言幕の外

使用資料：『新日本古典文学大系』86『浮世風呂　戯場粋言幕の外　大千世界楽屋探』1989 岩波書店（翻刻）

底本：天理図書館蔵『戯場粋言幕の外』の色摺りの袋（解説より「色摺の袋をかぶせた戯作本がいつから売り出されたかは明らかにし得ない」としつつ、「文化年間に入るとすべての洒落本・滑稽本・草双紙類は色摺りの袋付で売り出されたと見てよい」との説明がある。このように考えると、本資料も文化頃に刊行された可能性がある）

清濁：凡例より「本文及び振り仮名の清濁は、校訂者において区別した」とあり、濁点は編集者によった可能性がある。

(223) 八笑人（花暦八笑人）

使用資料：『日本名著全集』江戸文芸の部 14『滑稽本集』1927 日本名著全集刊行会（翻刻）

底本：底本の所蔵情報なし（刊年について解説では初編は文政三（1820）年、四編は天保五（1834）年、五編は嘉永二（1849）年としている）

清濁：清濁に関する説明はない。

(224) 幕末御触書集成

使用資料：石井良助，服藤弘司編『幕末御触書集成』1992-97 岩波書店（翻刻）

底本：内閣文庫所蔵の御書付留・触留・幕令類編・憲法類集続編、国立国会図書館所蔵旧町奉行所の記録たる触留・諸事留帳、その他未刊の諸史料集、既刊の諸法令集・諸編纂物などからの法令（合計六千件ほど）

清濁：清濁に関する説明はない。

(225) 英対暖語（春抄媚景英対暖語）

使用資料：『近代日本文学大系』20『為永春水集』1928 国民図書株式会社（翻刻）

底本：底本の所蔵情報なし（天保八（1837）年板）

清濁：清濁に関する説明はない。

(226) 春色梅美婦禰

使用資料：『近代日本文学大系』20『為永春水集』1928 国民図書株式会社（翻刻）

底本：底本の所蔵情報なし（天保十二（1841）年板）

清濁：清濁に関する説明はない。

(227) 新世帯

使用資料：『明治文学全集』68『徳田秋声集』1971 筑摩書房（翻刻）

底本：初版本

清濁：清濁に関する説明はない。

(228) 夜明け前

使用資料：『藤村全集』11　1966-71 筑摩書房（翻刻）

底本：改版本（「定本版藤村文庫」昭和十一（1936）年七月四日刊行）

清濁：清濁に関する説明はない。

濁点の有無の確認には、以上の（179）～（228）の資料は使用しない。

4．表記法について

本論文では、用例を挙げる際に、なるべく元の資料を忠実に引用している。但し、意味を理解しやすいように、また本論文において資料等による引用箇所と筆者による記述箇所とが区別できるように、以下のように表記の変更を行った。

4-1　資料等による引用箇所について

(1) 漢字・平仮名・片仮名

文献に現れた漢字・平仮名は、基本的にそのまま引用している。但し、「産(産)」「算(算)」などのように、現代で使われなくなった旧体字については、特に書名・人名・機関名などではないかぎり、常用漢字に直した。

片仮名については、漢字片仮名交じり文の場合は読みやすいように、片仮名を平仮名に直した。漢字片仮名交じり文以外の場合は片仮名のままにした。

(2) キリシタン文献などのローマ字表記

キリシタン文献による用例は、読みやすいように全体的にローマ字表記を片仮名に直した。但し、実際の発音の判断に関わる箇所はローマ字のままにした（下線は筆者による）。

例：Feiqe ua vôjei no ninju vomotte voicaqe tatematçurareta
→ヘイケ　ワ　vôjei　ノ　ニンジュ　ヲモッテ　ヲイカケ　タテマツラレタ

(3) 振り仮名

振り仮名は基本的に引用する原本のままにした。但し書式の関係で、振る位置は括弧に入れてその漢字の後に付けた（下線は筆者による）。

例：此方へ母共に預り、手前にて安産（あんざん）いたさせ

(4) アクセントの表記法

アクセント表記は、基本的にアクセント核の位置で示している（下線は筆者による）。

例：箸（ハ’シ）　【頭高型】
　　橋（ハシ’）　【尾高型】
　　端（ハシ）　【平板型】

但し、○や●で示す場合もある。

例：○●●●のもの：洒落本
　　○●●●●のもの：ぞっき本

(5) 所在

用例の所在は、該当用例の右下に小文字で示す（下線は筆者による）。

例：いまめかしきてほむならはゞいとようかいたまひてむとみ給『源氏物語』若紫

4-2　筆者による記述箇所について

(1) 音注記・漢字注記

ある語の発音を示すときは、その語形も参考に示す必要がある場合は、該当発音の右下に小文字で示す（下線は筆者による)。

例：フルホン$_{\underline{\text{古本}}}$　　～ゼイ$_{\underline{\text{勢}}}$

同じように、ある語の語形を示すときは、その発音も参考に示す必要がある場合は、該当語形の右下に小文字で示す（下線は筆者による)。

例：生$_{\underline{\text{しょう}}}$産　　流$_{\underline{\text{りゅう}}}$産

(2) 語形と意味用法の使い分け

語形と意味用法とは別々に表記する。例えば同じ「出産」でも、語形上の漢字の「出産」と、意味用法としての「出産」(子供を生む）とがある。この場合、語形と区別するように、意味用法のほうを指すときは《　》で包んだ形で示す。

例：「難産」の「～産」は《財産》ではなく《出産》を表す。

また、出産の意味を有する「～産」という形式を示す場合、「～産」《出産》として示す場合もある。

５．本論文の構成

本論文は序論・本論・結論からなる。

序論では、以上述べてきたように、連濁という音韻現象を概説的に記述し、今までどのような研究がされてきたのか、またなぜ本論文で漢語の連濁にしぼって考察を行うのかを先行に述べる。そして漢語の連濁に関して、どのような先行研究がみられるのか、それらの先行研究においてどの問題点があり、また未だに解決されていない課題は何かを解説し、そこで本論文でどのような考察・研究の方法を採用するかを述べる。

本論では、第１章、第２章、第３章、第４章とにわける。

第１章、第２章、第３章では、それぞれ「～産」「～勢」「～本」の連濁の史的変遷について考察する。各章において、まず考察対象となる語例を確認する。そして、それらの語がどの時代にどのような形（清音形か濁音形か）で現れたかを調査する。本論文では序論 3-1 で述べたように、濁音形を主な手掛かりとして調査を行っているため、いつの時代にどのような特徴（鼻音が前接していたり、和語が前接していたり、ある特定な意味を表したりするといった特徴）をもつ濁音形が現れたかを分析し、その時代の連濁条件を検討する。予告だが、結論からいうと「～産」「～勢」「～本」のどちらも時代の下りにしたがってその連濁条件を変えてきた。では、とある時代になぜ連濁条件が変わったのか、その時代の「～産」「～勢」「～本」の語彙上の事情等を考慮しながら記述する。

第１章は「～産」、第２章は「～勢」、第３章は「～本」、という順番であるが、この順番にしたのは以下三つの理由がある。

一つ目は、連濁の問題か接尾辞の問題かである。本論文は「連濁」についての研究であり、どの場合に連濁するか、またどの場合に連濁しないかを追及するのは本来の目的である。結論から見れば、「～産」は第１章で述べるように、《出産》を表すと濁音をとる場合がある、という意味条件の関与がみられる。一方で「～勢」「～本」は現代ではほとんど連濁しないのである。「ニッポンゼイ日本勢」「ブンコボン文庫本」などが濁音で現れているが、これらは連濁ではなく、濁音形をする接尾辞になっているのである（詳しくは第２章、第３章を参照）。そのため、現代でまだ連濁が働いている「～産」を先に記述し、連濁とほとんど無縁になっている「～勢」「～本」を後に記述することにした。

二つ目は、連濁の史的変遷の近似性である。「～産」の連濁の史的変遷と「～勢」の連濁の史的変遷は互いに似ている部分がある。両方とも鼻音の前接による連濁から始まり、後に和語が前接するようになり、和語が前接する場合は連濁していた。一方で「～本」の場合は、鼻音の前接による連濁までは「～産」「～勢」と同じだが、和語が前接するようになったときは連濁を起こさなかったのである。詳細は第３章で述べるように、これには「～本」なりの事情があったが、とにかく、基本的には和語が前接していると連濁しやすいと考えられる。そのため、和語の前接によって連濁していた「～産」「～勢」を先に記述し、和語が前接しても連濁しなかった特殊的な「～本」を後に記述することにした。

三つ目は、議論を起こすかどうか、詳しい記述の必要性である。本論文の結論として、連濁から離れ、接尾辞用法に転じている現象に注目している。「日本産」「長野産」の「～産」、「日本勢」「アメリカ勢」の「～勢」は接尾辞的に働いているとの

認識は一般的にある。しかし「文庫本」「料理本」の「～本」の場合、これは「文庫＋本」「料理＋本」のように複合語構造なのではないかとの意識が強い。接尾辞ではなく、複合語中に起こる連濁だと思われがちである。そのため、「文庫本」「料理本」の「～本」は語の複合による連濁ではなく、濁音形をする接尾辞と証明する必要があり、「～本」の内容を最後の第３章で記述することにした。

そして第４章では、第１章「～産」・第２章「～勢」・第３章「～本」の連濁の史的変遷を考察したことによって、新に出来た発見を記述する。この新たな発見には特に二点が挙げられる。

一点は、接尾辞に対する再検討である。一般的に接辞とは、阪倉篤義(1986)が述べるように「「ことり」「可愛がる」「大人ぽい」のように〈呂中略〉単独の用法を持たず常に上のような基幹（とり、可愛、大人）を成す要素と結合して一つの単語を形成する要素」のことであり、そして「「がる」「ぽい」のように下に付くものを接尾語（接尾辞）と呼ぶ」。従来では漢語の接尾辞というと、典型的なものとして「世界的」「否定的」の「～的」、「映画化」「近代化」の「～化」、「工事中」「仕事中」の「～中」などが挙げられる。これらの接尾辞は、詳しくは第４章で述べるが、文法化が進んでおり、「的」「中」「化」本来の意味がほとんど残っていない。また品詞を変える機能もある。一方で「九州産」「長野産」の「～産」、「日本勢」「大阪勢」の「～勢」「文庫本」「長唄本」の「～本」は、「産」「勢」「本」本来の意味が残っており、また品詞を変える機能も備えていない。この異質の接尾辞「～産」「～勢」「～本」は果たしてどういったような接尾辞なのか、「～的」「～中」「～化」との違い、また複合語との違いは何か。これについて記述する。

もう一点は、「類別」表現である。「類別」という用語は本論文で新に打ち出したものだが、日本語にはある集合体を分類するといった「類別」表現が数多くみられる。詳細は第４章で述べるが、前掲した「九州産」「長野産」の「～産」、「日本勢」「大阪勢」の「～勢」、「文庫本」「長唄本」の「～本」も、産地・競技グループ・書籍を「類別」しているため「類別」表現にあたると考えられる。では「類別」表現は日本語の中でどういった役割を果たしているのか。「～産」「～勢」「～本」以外にまた他にどのような「類別」表現がみられるのか。「類別」表現はどのような特徴をもつカテゴリーなのか。これらの問題について記述する。

結論では、本論で考察した内容をまとめ、更に今後の課題について述べる。具体的にいうと、結論１節は、本論第１章「～産」の連濁の史的変遷のまとめ、及び得られた結論と先行研究との違いからなる。結論２節は「～勢」の連濁に関する先行

研究がみられていないため、本論第２章「～勢」の連濁の史的変遷のまとめのみとなる。結論３節は、本論第３章「～本」の連濁の史的変遷のまとめ、及び得られた結論と先行研究との違いからなる。結論４節は、「～産」「～勢」「～本」の連濁の史的変遷への考察を通して、「～産」「～勢」「～本」の間にみられる類似点と相違点についてまとめ、先行研究との関連性も触れて論じるものである。結論５節は、本論第４章の接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」の特徴についてのまとめである。結論６節では、本論文を全体的にまとめ、本論文によって新にできた発見を整理する。最後に結論７節では、本論文で未だに明らかにできていない、今後の課題とする部分を述べる。

本　　論

第１章　「～産」の連濁の史的変遷

本章では「～産」の連濁の史的変遷について考察する。

１．先行研究

佐藤大和(1989)は、意味と連濁の関係について「意味の違いで清濁を使い分ける場合がある」と述べている。例えば「日」は太陽を指す場合は連濁せず（アサヒ朝日、ユウヒ夕日など)、日差し・曜日などを指す場合は連濁する（ニシビ西日、タンジョウビな誕生日など)。

岩岡登代子(2002)は「漢語にも、意味の違いを連濁によって使い分けている例もある」と述べている。その例には「～産」を取り上げ、「「安産　初産ウイザン　早産　難産　流産」等「ザン」と連濁をおこす言葉は、子供が生まれるお産を意味する。「国産　財産　生産　倒産　不動産　名産」等お産以外のものは連濁をおこさない」と主張している。

しかし「ジョサン助産」「セイキサン正期産」「カキサン過期産」などの「～産」は《出産》を表しているにもかかわらず連濁していない。では現代で「～産」の連濁条件とは何か。また「～産」は古くの連濁条件は何で、どのような経緯で現代の連濁条件が成立するようになったのか。本章では、これらの問題をめぐって「～産」の連濁の史的変遷を考察し、古くの連濁条件から現代の連濁条件への変遷過程を明らかにする。

２．考察対象

序論で述べた調査方法で以下のような「～産」の語例が集められ、考察対象とする。

資産　畜産　家産　同産　土産　平産　財産　流産　破産　難産　恒産　名産
寺産　安産　臨産　逆産　小産　和産　半産　国産　所産　海産　無産　厚産
田産　中産　製産　動産　授産　有産　鉱産　天産　農産　倒産　水産　殖産
遺産　蕩産　陸産　多産　私産　死産　治産　早産　共産　年産　特産　助産
道産　減産　増産　原産　量産　米産　電産　晩産　遅産　単産　林産　通産
敵産　湖産　妊産　営産　休産　巨産　工産　公産　易産　郷産　坐産　屍産
襲産　常産　大産　泰産　貯産　非産　美産　邦産　房産　民産　孕産　養産
獣産　不動産　後ご産　後こう産　生しょう産　生せい産　初しょ産

過期産　国内産　外国産　西洋産　天竺産　日本産
ういさん　はつさん　あとさん　のちさん　よこさん　きずさん　ながれさん　ねむりさん
いづこさん　おさん
アジアさん　トリエントさん　ペルシアさん

そのうち、「アジア産」「トリエント産」「ペルシア産」の3例は、『日本国語大辞典　第2版』の接尾辞「～産」の見出し項目に出ている用例に見られたものである。また「西洋産」「天竺産」「いづこ産」は「デジタルで読む福澤諭吉」「近代女性雑誌コーパス」などのコーパスを使い収集したものである。

但し「出産しゅっさん」「物産ぶっさん」「月産げっさん」「日産にっさん」「実産じっさん」「屈産くっさん」「立産りっさん」のように、入声音・促音につづく「～産」の語例は、連濁を起こさないものとして、考察対象から省いた。

３．用例の出現時期とその清濁

「～産」は文献で濁音形で確認できたのは「難産」「安産」「臨産」「生しょう産」「ういさん」「あと産」「しも産」「のち産」「ながれ産」「逆産」「早産」「初しょ産」「流りゅう産」「死産」の14語である。

(1) 難産

「難産」は『医心方』に出現している。底本は後代に書写されたものとされているが、ある程度、平安時代の原本の内容を反映していると考えられる。この「難産」も平安時代に既に使われていた可能性がある。

・陰陽失理並使難産也『医心方』

音表記が最初に確認できたのは『高野本平家物語』である。

・御乳には、前右大将宗盛卿の北方と定られたりしか、去七月に難産（なんざん）をしてうせ給しかば高野本『平家物語』三・公卿揃

この例は振り仮名に「なんざん」があり、濁音形で現われている。底本の書写された時期からみると、少なくとも慶長頃には「難産」は濁音で使われたとみられる。この用例のほかにも、「難産」は以下のように、室町・江戸時代の多数の文献に濁音

形で確認される。

・難得（ナントク）〈呂中略〉―産（ザン）『文明本節用集』四三八
・・難堪（ナンカン）〈呂中略〉・難産（ザン）『運歩色葉集』一八四
・難渋（ナンジウ）〈呂中略〉―産（ザン）『饅頭屋本節用集』七六
・Nanzan. ナンザン（難産）　危険な，または，困難なお産．Nanzanni voyobu.l, nanzande gozaru.（難産に及ぶ．または，難産でござる）困難なお産をする『邦訳日葡辞書』
・難行（なんぎやう）　―産（ざん）『惠空編節用集大全』四二三
・難産（ナンザン）毛詩所レ謂坼副是矣『書言字考節用集』五 17
・Nan-zan, ナンザン, 難産, n. Difficult parturition. -szru『和英語林集成』（初版）

「難産」は古くから現代まで、濁音形のままで使われてきた可能性が高いと思われる。

(2) 安産

「安産」は、文献に初めて確認できたのは『言経卿記』である。

・去比南庄伊勢屋へハヤメ薬・愛洲薬遣了。安産トテ両瓶等送了『言経卿記』天正一三年・閏八月一六日

音表記が最初に確認できたのは江戸時代の『傾城禁短気』であり、振り仮名に濁音形が確認される。

・此方へ母共に預り、手前にて安産（あんざん）いたさせ『傾城禁短気』四・三

また江戸末期の『和英語林集成』（初版）にも「安産」は濁音形で現われている。

・Anzan, アンザン, 安産, (Yaszku umu,) n. An easy or natural labor, -szru.『和英語林集成』（初版）

従来の説では漢語は鼻音の後で連濁しやすいとされている。「安産」は「産」に鼻

音が前接しているため、古くから連濁し、そしてその濁音形のままで現代まで使われてきた可能性が高いとみられる。

(3) 臨産

「臨産」は前述した「難産」と同じく『医心方』には確認される。『医心方』の底本は後代によるものではあるが、書写された内容についてはある程度、平安時代の状況を反映していると考えられる。「臨産」は平安時代に既に使われていた可能性がある。

・右臨産預至心礼讖誦満千遍神験不可言常用有効『医心方』

音表記が最初に確認できたのは室町時代の『文明本節用集』である。

・臨時（リンジ）〈呂中略〉―産（サン）『文明本節用集』一九四

この用例は清音形で現れている。古い文献では濁音でも清音で表記される場合があるため、この場合の「りんさん」は清濁不明である。

「臨産」は最初に濁音表記が確認されたのは『和英語林集成』（初版）である。

・Rinzan, リンザン 臨産, n. The approach of parturition. - no toki『ヘボン和英語林集成』（初版）

「臨産」も、「産」に鼻音が前接している。そのため、古くから連濁し、濁音形のまま近代まで使われてきた可能性がある。但し「臨産」は現代では使われなくなり、姿を消している。

(4) 生しょう産

「生産」は、文献に初めて確認できたのは『江談抄』である。使用された『江談抄』の底本は後代の書写にかかるが、書かれた内容はある程度、平安後期の状況を反映していると考えられる。「生産」は平安後期には既に使われていた可能性がある。

・従者之中一人妊者アリテ、於二旅行之共一生産。此者如レ此之物中ニヤ生タルトテ『江談抄』六

因みに、「生産」は現代では「セイサン」と発音するが、但しこの「セイサン」という発音が最初に確認できたのは江戸末期の『和英語林集成』（初版）である。

・†Seisan, セイサン, 生産, n. Occupation, means『和英語林集成』（初版）

一方で古く「生産」には「ショウサン」という発音も存し、最初に確認できたのは鎌倉時代の『海人の刈藻』で、「セイサン」より出現時期が遥かに早い。

・いと尊げに、数珠おしすりて、女人しやうさんし難からん時にと、もみいれ給時に『海人の刈藻』四

この事情を考えてみれば、以上『江談抄』に現れた漢字表記の「生産」は、実際の発音は「セイサン」ではなく、「ショウサン」もしくは「ショウザン」だったのではないかと推測される。

では「生しょう産」の清濁は如何だろうか。音表記の「生しょう産」が最初に確認できたのは、前掲した『海人刈藻物語』だが、濁音表記はなく清濁は不明である。但し『日葡辞書』では「生しょう産」は清音形で現れているため、少なくとも清音形の「ショウサン」は室町末期頃には存したと思われる。

・†Xŏsan. シャウサン（生産）　Vmare, vmu.（生まれ、産む）出産. 文書語『邦訳日葡辞書』

一方で『太平記』にも「生しょう産」が現れているが、『日本国語大辞典　第２版』によると、寛永八年板の『太平記』に「生しょう産」は濁音形で現われている。

・六月八日の朝、生産（ざん）容易して、而も男子にてぞ坐しける『太平記』（寛永八年板）二五・宮方怨霊会六本杉事（『日本国語大辞典　第２版』より）

この『太平記』（寛永八年板）にみられる「生産（ざん）」は、用例の資料での確認ができておらず、「生産」は実際に濁音で現れたかどうかは不確かである。ただし仮に『日本国語大辞典　第２版』に挙げられている濁音形が確かであるとしても、「生しょう産」の前部要素「生」は古く中国原音で ng 韻尾を有したもので、奥村三雄(1952)

が指摘したように、鼻音の前接によって連濁を起こしたものだと考えられる。

それ以降、「生しょう産」は文献に確認できなくなり、姿を消したと思われる。

(5) うい産

「うい産」は、文献に初めて確認できたのは江戸中期の『好色一代女』である。

・はや初産（うゐざん）して逆者いふより守刀産着をかさね『好色一代女』四・一

この用例は既に濁音表記が振り仮名に付されており、江戸中期には「うい産」は連濁したと思われる。それ以降も『和英語林集成』（初版）や小説『雁』などに濁音形が確認され、現代でも濁音で使われている。

・†Ui, ウヒ, 初, a. The first. - zan, a first labor, or parturition『和英語林集成』（初版）

・其女房が三十を越しての初産（うひざん）でお玉を生んで『雁』六

「うい産」は江戸中期に文献に現われてから現代まで濁音形のまま使われてきたとみられる。

(6) あと産

「あと産」は、江戸中期の『弓勢智勇湊』に出現しているが、濁点がなく、その実際の清濁は不明である。

・浪々の身の其中に女房が懐胎、産落せしは女の子。跡産（さん）のもつれにて我妻はあへなき最期『弓勢智勇湊』道行恋の道草

近代以降、大正期の『大日本国語辞典』にも「あと産」が現れ、濁音形が確認される。また現代でも、「あと産」は濁音で使われている。「あと産」は少なくとも近代以降には濁音で使われてきたと思われる。

・あと-ざん　後産（名）産後に、胞衣のおるること『大日本国語辞典』

・後産　アト’ザン　アトザン『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

(7) しも産

「しも産」は江戸中期の『傾情知恵鑑』に用例がみられる。

・裏店の嚊さん達か寄り合てしもざんとやらのち産（ざん）とやらをとりあげ手は赤蔵になりけれども『傾情智恵鑑』

この用例は濁音形で現れており、「しも産」は江戸中期には連濁したと思われる。但し「しも産」はそれ以降の文献に確認できなくなり、姿を消したと思われる。

(8) のち産

「のち産」は、文献に初めて確認できたのは江戸中期の『傾情知恵鑑』である。

・裏店の嚊さん達か寄り合てしもざんとやらのち産（ざん）とやらをとりあげ手は赤蔵になりけれども『傾情智恵鑑』

この用例は既に濁音表記が振り仮名に付されており、江戸中期には「のち産」は連濁したと思われる。後の時代に『和英語林集成』（三版）にも濁音形が確認され、現代でも濁音で使われている。

・Nochizan ノチザン 後産 n. After-birth『和英語林集成』（三版）

「のち産」は江戸中期に文献に現われてから現代まで濁音形のまま使われてきたとみられる。

(9) ながれ産

「ながれ産」という語は、文献に初めて確認できたのは江戸中期の俳諧『広原海』であるが、その実際の清濁は不明である。。

・借物の五つの水や流れ産『広原海』一八

音表記が初めて確認できたのは江戸末期の『和英語林集成』（初版）で、濁音で現われている。

・Nagare-zan, ナガレザン, 流産, n. Miscarriage, abortion『和英語林集成』(初版)

但し「ながれ産」は現代では使われなくなっている。このように、「ながれ産」は江戸中期から末期にかけて文献に出現し、濁音形で現れていた。

(10) 逆産

「逆産」という漢語は、文献に初めて確認できたのは室町時代の『有林福田方』であるが、音表記はされていない。

・横産　逆産『有林福田方』

音表記が初めて確認できたのは江戸中期の『病名彙解』である。また『書言字考節用集』にも用例が確認される。

・逆産（ギヤクサン）正産ニアラズ正ニサカフヲ皆逆産ト云リ『病名彙解』六
・逆産（ギヤクサン）又云佪産。出レ左『書言字考節用集』五 29

これらの用例は濁音表記はないため、その清濁は不明である。しかし、この「逆産」の場合だけ、他の語とは違い、前部要素「逆」に濁音が入っている。しかも『病名彙解』『書言字考節用集』の両文献にとも濁音表記が確認される。この二つの文献の濁点の付け方を調査したところ、「ベンダク（便濁)」「ザンゲツ（残月)」のように語の前部と後部両方濁点を付けるものや、「ヒヤウジヤセツ（病蛇節)」のように語の前部にある濁点が省かれるものはあるが、前部に濁点があり後部の濁点がない例は見当たらない。そのため、「ギャクサン（逆産)」も、前部に濁点があり後部に濁点がないタイプで、当時実際の発音も、連濁しない「ギャクサン」だった可能性が高いとみられる。

そしてこの「逆産」は、江戸末期の『和英語林集成』(初版）になると濁音形で現れる。

・Giyaku-zan, ギャクザン, 逆産, n. An unnatural labor『和英語林集成』(初版)

このように、「逆産」は江戸中期までは連濁しなかったが、江戸末期になると連濁するようになったのではないかと考えられる。

(11) 早産

「早産」という漢語は、文献に初めて確認できたのは明治期の雑誌『太陽』であるが、音表記はされていない。

・自由黨内閣は、『早産』といはれし程に根本薄く『太陽』1895 年 8 号

音表記が初めて確認できたのは小説『暗夜行路』であり、濁音形で現われている。序論 3-2 で述べた『暗夜行路』の底本の出版年からみれば、少なくとも昭和中期頃には「早産」は濁音で使用されたことが分かる。

・早産（さうざん）と云ふ程ではないと思ひます『暗夜行路』三・一七

但し同じごろの『明解国語辞典　第 12 版』には「早産」は未だに清音形がみられる。

・そお-さん⓪【早産】サウ―（名）月足らずの出産『明解国語辞典　第 12 版』

このことから、「早産」は昭和中期頃に濁音形で現われたが、但し同時に清音形も存したと思われる。今のように専ら濁音形で定着したのは昭和後期以降だとみられる。

(12) 初しょ産

「初しょ産」は、文献に初めて確認できたのは大正期の『大日本国語辞典』であり、清音で記されていた[2]。

・しょ-さん　｛初産（名）うひざん。はつざん『大日本国語辞典』

後に小説『大道無門』で初めて濁音表記が確認される。『大道無門』の底本は序論 3-2 でも述べたように、1954 年のものを使用しているため、少なくとも昭和中期頃には「初しょ産」は濁音で使われたと思われる。

---

[2] 『大日本国語辞典』では、「そそぐ　注　灌」「あそびごころ　遊心」などのように、濁点が多数使用されているので、濁点が省かれたとは考えられにくい。

・あければ二十六、初産（しょざん）としては少しおくれてもゐたし『大道無門』微症・二

その後の他の辞書においても、清音形・濁音形両方みられるが、現代では「初しょ産」のかわりに「うい産」を使うことが多い。「初しょ産」は使用頻度が低く、清音形・濁音形両形の間で揺れていたのではないかと思われる。

(13) 流りゅう産

「流りゅう産」は、文献に初めて確認できたのは江戸末期の『和英語林集成』（初版）である。

・Riu-zan, リウザン, 流産, a. Abortion, miscarriage at the 3d month『和英語林集成』（初版）

この用例は濁音で記されている。それ以降も大正期の小説『こゝろ』や、『大日本国語辞典』などにも濁音表記が確認される。

・妹は此前懐妊した時に流産（りうざん）したので『こゝろ』
・りう-ざん　{流産　胎児の、分娩の月数満たずして、死して母胎より出でること。半産『大日本国語辞典』

「流りゅう産」は、その語形を現してから現代までずっと濁音形だったと思われる。
ところで漢字表記の「流産」は古く『中右記』にみられるが、その発音は不明である。

・愛女房并左大弁女房〈泰仲（高階）朝臣女子也〉共流産已卒去『中右記』承徳元年十月十六日

(14) 死産

「死産」は、『日本国語大辞典　第２版』によると、明治期の『内務省訓令第二一号』には出現している。

・死産に関し埋火葬認許証を与ふるときは『内務省訓令第二一号』明治三三年・六月二七日（『日本

国語大辞典　第２版』による）

その後、大正期の『大日本国語辞典』で初めて発音が確認され、清音であった。

・し-さん　｛死産　死胎をうむこと。流産『大日本国語辞典』

後に昭和中期の『辞海　縮刷版』で清濁両形で初めて濁音表記が確認され、昭和後期になって濁音しか確認できなくなる。

・し-さん㊀【死産】（名）胎児が死んでうまれること。しざん『辞海　縮刷版』
・〔し-ざん　死産〕〈―する〉妊娠中生きていた胎児が死体となって分娩されること『現代国語例解辞典』

「死産」は最初に明治期には清音「シサン」で使われていたが、昭和中期に清濁両形使われるようになり、更に昭和後期より専ら濁音「シザン」しかもたない発音になったと思われる。

４．「～産」の語彙特徴について

4-1　「～産」の前部要素の特徴

「～産」は最初に、漢語の後部要素として使われていた。『日葡辞書』には、「産」字を後部要素に有するものは以下のように４例みられるが、全て漢語である。

Nanzan 難産　Zaisan 財産　Tosan 土産　†Xŏsan 生産

江戸中期になると、「～産」に和語の前接が可能となり、「うい産」「ながれ産」「しも産」「のち産」などが文献に確認できるようになる。

・はや初産（うぶざん）して逆者いふより守刀産着をかさね『好色一代女』四・一
・借物の五つの水や流れ産『広原海』一八
・裏店の嗅さん達か寄り合てしもざんとやらのち産（ざん）とやらをとりあげ手は赤蔵になりけれども『傾情知恵鑑』

更に明治期頃になって、「日本産」「アジア産」などのように自立漢語や外来語に

付くようになり、「産」は接尾辞的に働くようになった。

・日本産の品を積荷として輸出する時は、五分の運上を納むへし『幕末御触書集成』三・安政六年・六月

・一目亜細亜産（さん）の動物なりとは、誰にもわかりさうな『諷誡京わらんべ』五

4-2　「産」の自立性

「産」は『日葡辞書』では以下のように、単独でも使える自立漢語であった。

・San. サン（産）　Vmu.（産む）出産．例，Sanuo tayasŭsuru.（産を輙うする）安産する．Sanno fimouo toqu.（産の紐を解く）産む『邦訳日葡辞書』

そして『和英語林集成』（初版）にも以下のように、「San wo szru」（産をする）、「San ga karui」（産が軽い）など、産が単独で用いる用法がみられる。

・San, サン, 産, n. Parturition, birth. - wo szru, to be in labor. - ga karui, the labor was easy. - ga omoi, the labor was difficult. - no ke ga tszku, to have the appearance of being confined. Watakushiwa kiushū no - de gozarimas, I was born in Kiushu『和英語林集成』（初版）

そのため、「産」は自立性の高い状態が近代まで続いたとみられる。しかし今では、「産をする」「産が軽い」などの用法は、むしろ「お産をする」「お産が軽い」などのように、「お産」の形で使われている。「少納言 KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス」を調査した結果からみても、以下のように 3 例しかないと非常に少なく、「産」の自立性は現代では非常に低下しているといえる。

・君の祖父は、足尾銅山で産をなした大富豪であった『友を偲ぶ』（「少納言 KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス」による）

・彼は門司の産にして、京都郡の小学校にありて、諸礼及裁縫を女生に授けたりき『鴎外・五人の女と二人の妻』もうひとつのキタ・セクスアリス（「少納言 KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス」による）

・フロレンスの産で、代代音楽家で、父親は相当有名な宮廷のピアニストだったらしい『近きより』（「少納言 KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス」による）

但し、近代以降に出現したとみられる《財産》を表す用法[3]で、「産を傾ける」「産を破る」の言い方がある。しかし、《財産》ではこれら決まった言い方でしかいえず、「財産を失う」「多額の財産」などでは「*産を失う」「*多額の産」とはいえない。したがって、この《財産》を表す用法でも、「産」の自立性は低いとみられる。

また、『和英語林集成』（初版）には、「Watakushiwa Kiushu no san de gozarimas」（私は九州の産でございます）という「～の産」の用法もみられるが、当時はまだ「私は九州生まれです」のように《生まれたところ》としか使われていなかった。つまり、商品の《産出》ではなく、子供の《出産》で使われていたのである。当時《出産》の意味での「産」は、前述したようにまだ自立性が高かった。今では「長野県の産」「茨城県の産」のように《産地》を表す用法として使う場合があるが、しかしこの《産地》の用法では「～の産」という決まった言い方しかなく、「産地は長野県だ」「産地は不明だ」などでは「*産は長野県だ」「*産は不明だ」とはいえない。したがって、《産地》を表す用法でも、「産」の自立性は低いと思われる。

このように、「産」は古く単独で使う用法と二字漢語の後部要素に使う用法とがあったが、江戸中期になって和語前接の用法が現われた。更に近代以降、前代に単独で使う「産」は「お産」に変り、単独では使用されなくなる。また近代以降、自立語に接続する、接尾辞的に働く「～産」の用法が新たに生じたと思われる。

以上をまとめると、〈表 1〉となる。

[3] 自立漢語としての「産」は『日葡辞書』『和英語林集成』（初版）では、《出産》しかもたないことから、「産」で《財産》を表す用法は『和英語林集成』（初版）以降、つまり近代以降に現われたとみられる。

〈表 1〉

文　献	うい産	あと産	しも産	のち産	ながれ産	難産	生しょう産	安産	臨産	流りゅう産	逆産	早産	初しょ産	死産	生せい産	多産	日本産	アジア産
医心方						□			□									
中右記										□(?)								
江談抄							□											
高野本平家物語						●												
海人の刈藻							△											
源平盛衰記							△											
有林福田方						□					□							
文明本節用集						●			△									
運歩色葉集						●												
啓迪集						□	□		□									
言経卿記								□										
饅頭屋本節用集						●												
易林本節用集						△												
日葡辞書						●	○											
寛永八年板太平記（日国）							●											
惠空編節用集大全						●												
病名彙解											○							
好色一代女	●																	
広原海					□													
傾城禁短気								●										
書言字考節用集						●					○							
弓勢智勇湊		△																
傾情智恵鑑			●	●														
幕末御触書集成																	□	
和英語林集成（初版）	●				●	●		●	●	●	●				○			
新聞雑誌（七号）															○			
和英語林集成（三版）	●			●	●	●		●	●	●	●				○			
諷誡京わらんべ																		△
日本風景論																□		
太陽												□					□	
福翁自伝																○		
内務省訓令第二一号（日国）														□				
新世帯												□						
こゝろ										●								
大日本国語辞典		●		●		●		●		●	○		○	○	○			
暗夜行路												●						
大道無門													●					
明解国語辞典（第 12 版）	●	●		●		●		●		●	●	○	○	○	○			
辞海（縮刷版）	●	●		●		●		●		●	●	●	●	○●	○			
現代国語例解辞典	●	●		●		●		●		●	●	●	●○	●	○	○		
ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典	●	●				●		●		●		●		●	○	○		

注：　□　音表記なし　　△　音表記あり、清濁不明　　○　音表記あり、清音　　●　音表記あり、濁音

以下で５節より、「～産」の前部要素の特徴、そして連濁する傾向を基に、時代に分けて、それぞれの時代における「～産」の連濁条件を探る。

５．二字漢語後部要素としての「～産」の連濁

「～産」は江戸初期まで専ら二字漢語の後部要素として使われていた。江戸初期までに文献に現れた「～産」は以下のとおりである（以下において●で濁音形で現れたものを示す）。

●難産高野本『平家物語』三・公卿揃　●安産『傾城禁短気』四・三　資産『続日本紀』霊亀元年・五月辛巳
畜産『律』逸文・廐庫・故殺官私馬牛条　家産『続日本紀』天応元年・正月辛酉
同産『三代実録』元慶三年・三月二三日　養産『聖徳太子伝暦』上・敏達天皇元年　獣産『倭名類聚抄』
臨産『医心方』　土産『宝生院文書』永延二年・一一月八日尾張国郡司百姓等解
平産『中右記』寛治元年・三月一六日
財産『本朝麗藻』下・贈心公古調詩　流産『中右記』長治元年・八月一五日　生しょう産『江談抄』六
破産『本朝文粋』二・意見十二箇条
恒産『東海一漚集』一・答不聞　名産『文明本節用集』八七三７　易産『満済准后日記』永享五年・閏七月二四日
寺産『蔭涼軒日録』文明一七年・一二月一〇日　郷産『蔭涼軒日録』長享元年・一二月四日　逆産『有林福田方』
泰産『地蔵菩薩霊験記』一四・二　小産『女重宝記』三・三　坐産『婦人寿草』

そのうち、濁音形が確認されたのは「難産」と「安産」の二例である。

・御乳には、前右大将宗盛卿の北方と定られたりしか、去七月に難産（なんざん）をしてうせ給しかば高野本『平家物語』三・公卿揃
・此方へ母共に預り、手前にて安産（あんざん）いたさせ『傾城禁短気』四・三

「ナンザン」「アンザン」はいずれも鼻音の後で連濁を起こしている。奥村三雄(1952)などでは、漢語の連濁は鼻音の後で起こりやすいとの指摘がみられる。「難産」「安産」はまさに鼻音の前接により連濁しているのではないかと思われる（第Ⅰ段階）。

６．和語前接の「～産」の連濁

江戸中期に入り、「～産」に和語の前接ができるようになる。以下は江戸中期に文献に出現した「～産」である。

和産『風来六部集』放屁論後編　美産『日本新永代蔵』二・三　孕産『滑稽雑談』四月
半産『書言字考節用集』五
●うい産『好色一代女』四・一　●しも産『傾情智恵鑑』　●のち産『傾情智恵鑑』
ながれ産『広原海』一八　あと産『弓勢智勇湊』道行恋の道草
きず産『御仕置裁許帳』六・五三二・元禄二年三月二八日

江戸中期に濁音形で確認できたのは「うい産」「しも産」「のち産」である。

・はや初産（うゐざん）して逆者いふより守刀産着をかさね『好色一代女』四・一
・裏店の嚊さん達か寄り合てしもざんとやらのち産（ざん）とやらをとりあげ手は赤蔵になりけれども『傾情智恵鑑』

また「ながれ産」「あと産」は江戸中期より文献に出現しはじめるが、後に江戸末期・大正期には濁音形が確認される。

・借物の五つの水や流れ産『広原海』一八
・浪々の身の其中に女房が懐胎、産落せしは女の子。跡産（さん）のもつれにて我妻はあへなき最期『弓勢智勇湊』道行恋の道草
・Nagarezan, ナガレザン, 流産 n. Miscarriage, abortion『和英語林集成』（初版）
・あと-ざん　後産（名）産後に、胞衣のおるること『大日本国語辞典』

江戸中期に連濁した「うい産」「しも産」「のち産」は、いずれも「～産」に和語が前接している。金田一春彦(1976)は、「連濁は和語にはじまり、漢語や洋語も和語と同じような親しい単語ということになると連濁をするようになる」と述べている。江戸中期に連濁した「うい産」「しも産」「のち産」は和語の前接によって、またこれらいずれも「出産」に関わる用語で日常生活に使いやすいこともあり、後部要素「産」は漢語でありながら和語のような親しい語になった。そのため、連濁が起こったのではないかと考えられる。

ところで「きず産」に関しては、『日本国語大辞典　第２版』によると以下の文献に出現している。これらの用例の清濁については確認できておらず、不明である。

・まん儀昨夜致傷産、相果候由、訴来る付『御仕置裁許帳』六・五三二・元禄二年三月二八日（『日本国語大辞典　第２版』による）
・其上出産又は傷産流産致候は、是又為知可申候『御触書寛保集成』四七・元禄九年八月（『日本国語大辞典　第２版』による）

但しこの「きず産」は前述した「うい産」「あと産」「しも産」「のち産」と同じように「出産」に関わる用語で日常生活に使いやすいことから、和語の前接により連濁していた可能性がある。

一方、二字漢語の「～産」はこの時期、新に濁音形で文献に出現したものはない。前代で連濁した「難産」「安産」などは以下のように、江戸後期になっても濁音形で現れていることから、「難産」「安産」などは前代に受け継ぎ、江戸中期においても濁音で使われていたとみられる（第Ⅱ段階）。

・Nan-zan, ナンザン, 難産, n. Difficult parturition. -szru『和英語林集成』（初版）

・Anzan, アンザン, 安産, (Yaszku umu,) n. An easy or natural labor, -szru『和英語林集成』（初版）

７．意味条件の関与

江戸後期以降、以下のような「～産」が文献に出現している。

●臨産『和英語林集成』（初版）　●流りゅう産『和英語林集成』（初版）　●逆産『和英語林集成』（初版）
●早産『暗夜行路』三・一七　●初しょ産『大道無門』微症・二　●死産『辞海　縮刷版』
国産『料理早指南』三　所産『輿地誌略』八　海産『和蘭字彙』　民産『経済小学』下・貧窮
農産『米欧回覧実記』一・二　無産『公議所日誌』一五中・明治二年五月　生せい産『和英語林集成』（初版）
営産『漢語字類』　巨産『西洋聞見録』後・一　厚産『西国立志編』二・一一　田産『西国立志編』八・一六
大産『西国立志編』四・一六　中産『新聞雑誌』六号・明治四年七月　製産『新聞雑誌』二七号・明治五年正月
動産『仏国政典』二・一　授産『広益熟字典』
非産『明六雑誌』一三号・民選議員を立るには先政体を定むべきの疑問　有産『文明論之概略』一・一
不動産『講学余談』一号・海商法大意　鉱産『米欧回覧実記』一・二　天産『米欧回覧実記』一・四
工産『米欧回覧実記』一・二　邦産『米欧回覧実記』二・三七　房産『米欧回覧実記』二・三〇
貯産『日本開化小史』三・五　襲産『改訂増補哲学字彙』　遺産『雪中梅』下・五　常産『将来之日本』七
倒産『和英語林集成』（三版）　水産『和英語林集成』（三版）　殖産『和英語林集成』（三版）
蕩産『皇室典範』明治二二年・五三条　陸産『浮城物語』三九　私産『福翁百話』七六
治産『皇室典範』明治二二年・五三条　共産『一握の砂』忘れがたき人人・一
年産『東京大正博覧会出品之精華』五・漁網　多産『日本風景論』四　特産『江戸から東京へ』六上・七
助産『健康保険法』一三条　公産『現代大辞典』　道産『旅』昭和五年・八月号・北海道の横顔
減産『現代語大辞典』　増産『飯の社会学』　原産『第２ブラリひょうたん』間違い　量産『記念碑』
日本産『幕末御触書集成』一三・安政六年六月　国内産『日本のむこ殿』　外国産『清英交際始末』下
天竺産『清英交際始末』下

お産『河童』四[4]　よこ産『日本大辞書』　いづこ産『女学雑誌』1894年32号

アジア産『諷誡京わらんべ』五　トリエント産『うたかたの記』上　ペルシア産『吾輩は猫である』一

濁音形で現れているのは「臨産」「流りゅう産」「逆産」「早産」「初産」「死産」である。

・Rin-zan, リンザン, 臨産, n. The approach of parturition. - no toki『和英語林集成』(初版)

・Riu-zan, リウザン, 流産, a. Abortion, miscarriage at the 3d month『和英語林集成』(初版)

・Giyaku-zan, ギャクザン, 逆産, n. An unnatural labor『和英語林集成』(初版)

・早産（さうざん）と云ふ程ではないと思ひます『暗夜行路』三・一七

・あければ二十六、初産（しょざん）としては少しおくれてもゐたし『大道無門』微症・二

・し-さん⓪【死産】(名) 胎児が死んでうまれること。しざん『辞海　縮刷版』

「臨産」は、「～産」に鼻音の前接があり、前代の鼻音の条件により連濁していたと考えられる。

「流りゅう産」「初しょ産」は、同じ漢字で和語前接の形「ながれ産」「うい産」が先行にみられる。「ながれ産」「うい産」は本章６節で述べたように、和語の前接により連濁していた。「流りゅう産」「初しょ産」は、「流ながれ産」「初うい産」の前接部を音読みにして出来、後部要素「ザン」は濁音のまま残した可能性がある。

一方で「逆産」「早産」「死産」は鼻音の前接がないのに連濁している。何故「逆産」「早産」「死産」は連濁しているのだろうか。

本章５節で述べたように、二字漢語の「～産」は前代で鼻音の前接によって連濁していた。また６節で述べたように、和語が前接するようになって、和語前接の「～産」は連濁していた。これによって、江戸中期頃までに連濁していた語は以下のとおりである。

・Nanzan, ナンザン（難産）危険、または困難ななお産『邦訳日葡辞書』

・此方へ母共に預り、手前にて安産（あんざん）いたさせ『傾城禁短気』四・三

・はや初産（うゐざん）して逆者いふより守刀産着をかさね『好色一代女』四・一

[4] 「お産」が連濁しないのは、後部要素に連濁を起こさない接頭辞「お～」のためであろう（例：お香、お豆腐など）。

・裏店の嚊さん達か寄り合てしもざんとやらのち産（ざん）とやらをとりあげ手は赤蔵になりけれども『傾情知恵鑑』

「～産」で表している意味からみると、以上の「難産」「安産」「うい産」「しも産」「のち産」のいずれも《出産》を表している。これに対して、連濁していない「～産」は以下のとおりである（清音形は『日葡辞書』及び『和英語林集成』（初版）を参考とする）。

・Tosan トサン（土産）Fiqidemono（引出物）進物、あるいは、贈物『邦訳日葡辞書』
・Zaisan ザイサン（財産）Tacara tacara（財たから）財産『邦訳日葡辞書』
・Xŏsan シャウサン（生産）Vmare,vmu（生まれ、産む）出産。文書語『邦訳日葡辞書』
・†Seisan, セイサン, 生産, n. Occupation, means『和英語林集成』（初版）
・Mei-san,メイサン,名産, n. A celebrated article of production, or manufacture『和英語林集成』（初版）
・Koku-san, コクサン, 国産, n. The productions of a country『和英語林集成』（初版）
・Shō-san, セウサン, 小産, n. A premature birth. - szru『和英語林集成』（初版）
・Hei-san, ヘイサン, 平産, An ordinary or natural parturition『和英語林集成』（初版）
・Hansan, ハンサン, 半産, n. An abortion, miscarriage『和英語林集成』（初版）

これらの「～産」は《財産》（財産、生産）や《産出》（土産、名産、国産）を表すものがほとんどである。但し『日葡辞書』に現れた「生しゃう産」は《出産》を表しているが、江戸期に入りほとんど現れなくなった。また『和英語林集成』に現れた「小産」「平産」「半産」も《出産》を表しているが、現代語では既に使われていない。「小産」「平産」「半産」の近代以降の使用頻度を知るため、ジャパンナレッジ版「日本古典文学全集」「新編西鶴全集」「明治の文豪」「太陽コーパス」「デジタルで読む福澤諭吉」「近代女性雑誌コーパス」「大正の文豪」「新潮文庫の 100 冊」「少納言 KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス」で調べたところ、以下の結果を得た。

〈表 2〉

時期	コーパス	小産	平産	半産
江戸期以前	日本古典文学全集[5]	0	5	0
	新編西鶴全集	0	18	0
近代以降	明治の文豪	0	0	0
	太陽	0	0	1
	デジタルで読む福沢諭吉	0	0	0
	近代女性雑誌	0	0	0
	大正の文豪	0	0	0
	新潮文庫の 100 冊	0	0	0
	少納言	0	1	0

〈表 2〉から分かるように、江戸期より以前は「平産」が多用されていた。しかし近代以降、「平産」はほとんど使われていない。また「小産」「半産」は江戸期以前にも近代以降にもほとんど使われていなかった。いずれにせよ、「小産」「平産」「半産」は江戸末期頃には既にほとんど使用されていなかった可能性が高く、そのため連濁が起こらなかったのではないかと考えられる。

このように、江戸中期まで「～産」は二字漢語の場合の連濁条件と和語前接の場合の連濁条件があった。これによって出来た連濁語は意味上《出産》を表すものに集中し、非連濁語は《出産》以外を表すものに集中していた。こうして江戸後期になり、《出産》を表すかどうかという意味の条件が連濁に関与したのではないかと思われる。鼻音前接のない二字漢語でも、「逆産」「早産」「死産」は連濁する「難産」「安産」「うい産」「しも産」「のち産」と同じように《出産》を表しているため、連濁が起こったと考えられる。

因みに、この時代に出現した語の中、明治期の『日本大辞書』に現われるものを以下のように挙げる。

- ‡あん・ざん（第一上）名｛安産｝安クシタ産。＝ラクニ子ヲ産ムコト。＝ヘイサン『日本大辞書』
- ‡なん・ざん（第一上）名｛難産｝字音。容易デナイ出産『日本大辞書』
- ぎやく・ざん（(‥‥)）〈呂注：前八条目「客」（(第一、二合)）のこと〉（‥‥）〈呂注：前条「逆意」（第三上）のこと〉名。｛‥‥産｝〈呂注：前条「逆意」のこと〉字音。子ガ生マレル時、順ニ頭から出ズ、他ノ部分カラ出ルコト。＝サカゴ。＝サカサザン『日本大辞書』
- のち・ざん（第二上）名｛後産｝子ガ生マレテ後チ胞ナド出ルコト＝ノチノモノ『日本大辞書』

[5] 『新編西鶴全集』に出現した用例を除いたもの。

・‡うい・ざん（(‥‥)）〈呂注：前八条目「初」（第二イ）のこと〉（第三上）名。｛初産｝始メテノ出産『日本大辞書』
・し・さん（第一上）名。漢語。⊙｛(資産＝貲産)｝身代。＝財産。＝モチモノ『日本大辞書』
・ざい・さん（‥‥）〈呂注：前条「再三」（第一上）のこと〉｛(財産)｝漢語。人ノ所有物『日本大辞書』
・か・さん（‥‥）〈呂注：前条「加餐」（第一上）のこと〉名。｛(家産)｝漢語。ソノ家ノ財産。＝シンダイ。＝家資『日本大辞書』
・‡は・さん（第一上）名。⊙｛(破産)｝漢語。身代限り『日本大辞書』
・ふどう・さん（第二上）名。｛‥‥動産｝〈呂注：前条「不同」のこと〉字音。動カセヌ財産（家、蔵、土地ナド)。◎動カスベキ財産ハ動産トイフ『日本大辞書』
・ど・さん（全平）名。｛(土産)｝漢語。（一）其土地ノ産物。（二）○ミヤゲ。＝イヘヅト『日本大辞書』
・○こう・さん（全平）名。漢語⊙｛(恒産)｝キマツテアル財産『日本大辞書』
・めい・さん（‥‥）〈呂注：前三条目「鳴弦」（全平）のこと〉名。｛(名産)｝漢語。名物『日本大辞書』
・せう・さん（(第一シヨ合)）（全平）名。字音。⊙‡｛小産｝流産『日本大辞書』
・わ・さん（全平）名。字音。⊙｛‥‥産｝〈呂注：前条「和讃」のこと〉日本ノ産出デアルコト。―「和産ノ洋酒」『日本大辞書』
・‡はん・さん（全平）名。｛半産｝字音。流産『日本大辞書』
・こく・さん（全平）名。｛(国産)｝漢語。其国ノ産物『日本大辞書』
・かい・さん（全平）名｛(海産)｝漢語。海ニ産スルモノ（スベテノ魚類、介類、海草類ヲヒキクルメテイフ)『日本大辞書』
・じう・さん（‥‥）〈呂注：前四条目「捜索」（全平）のこと〉名。｛獣産｝字音。獣類ノ出産
・よこ・さん（‥‥）〈呂注：前三条目「横さ」（前平）のこと〉名。｛横産｝出産ニ臨ミ、胎児ガ俄ニ下腹ノ中ニ横ハリ、出カネルコト『日本大辞書』

これらを『日本大辞書』で示されたアクセント型の別で分けてみると〈表 3〉のとおりである。

〈表 3〉

	アクセントの核が「産」の前(+)	アクセントの核が「産」の前(−)
連濁する	安産　難産　逆産　のち産	うい産
連濁しない	資産　財産　家産　破産　不動産	土産　恒産　名産　小産　和産　半産 国産　海産　獣産　よこ産

当時は、連濁語にはアクセントの核が「産」の前に現われるものが多く、非連濁語にはアクセントの核が「産」の前に現われないものが多い、という傾向があった。その中で特に注意すべきなのは、平板型アクセントで連濁しない「和産」「国産」である。詳細は本章８節で述べるが、「和産」「国産」は江戸末期より接尾辞用法を生み出していくのである（第Ⅲ段階）。

８．「～産」の接尾辞用法の発生

本章７節で述べたように、江戸後期に「倭産」「国産」などのように《産地》を表す「～産」があった。

・是まで倭産になき産物を見出せるも亦少からず『風来六部集』放屁論後篇（『日本国語大辞典第２版』による）

・国産塩から類、みな一種遣ひの物也『料理早指南』三（『日本国語大辞典　第２版』による）

これらの例では「倭産」「国産」は《産地が日本（のもの）》を表している。これに続き江戸末期に、以下挙げるように、同じく《産地が日本（のもの）》で「日本産」が出来た。

・日本産の品を積荷として輸出する時は、五分の運上を納むへし『幕末御触書集成』一三・安政六年六月

「日本産」の出現により、産地を表す「～産」には二字漢語の前接ができるようになった。そして近代以降、《産地が日本（のもの）》の「日本産」に対して、《産地が外国（のもの）》を表す「外国産」が出来、更に具体的に国名を示す必要がある場合は「天竺産」「亜細亜産」なども出来た。

・英船ニテ外国産ノ穀物ヲ載セ港へ輸入シ『清英交際始末』下

・無税品ノ事黄金、棹銀、外国貨幣、小麦ノ粉、天竺産ノ穀ノ粉、沙胡米、麺

包『清英交際始末』下

・一目亜細亜産の動物なりとは、誰にもわかりさうな『諷誡京わらんべ』五

また《どこからの品物か》を表す場合は「いづこ産」という言い方もあった。

・食鹽（しよくえん）は何處産（いづこさん）又（また）は如何（いか）なるものを良（よし）とすとか其（その）各（おの＼／）に付（つき）ての良品（りやうひん）の檢定法（けんていはふ）を附記（ふき）せられたき『女学雑誌』1894 年 32 号

こうして「～産」《産地》は前接部の語種が拡大し、漢語でも（日本産）和語でも（いづこ産）外来語でも（アジア産）前接部にくるようになった。現代では「～産」《産地》は造語力が強く、国名でも（日本産・アメリカ産）、地域名でも（アジア産・九州産）、県名でも（滋賀産・長野産）前接することが出来る。またこれらの「～産」は全部清音形「～サン」で現れ、アクセントも全部平板型となっている。地名語に後接し《産地》を表す「～サン$_{産}$」のこのような用法は接尾辞的に働いていると考えられる。「～サン$_{産}$」はどういった特徴をもつ接尾辞なのか。これについてまた４章で詳しく記述する（第Ⅳ段階）。

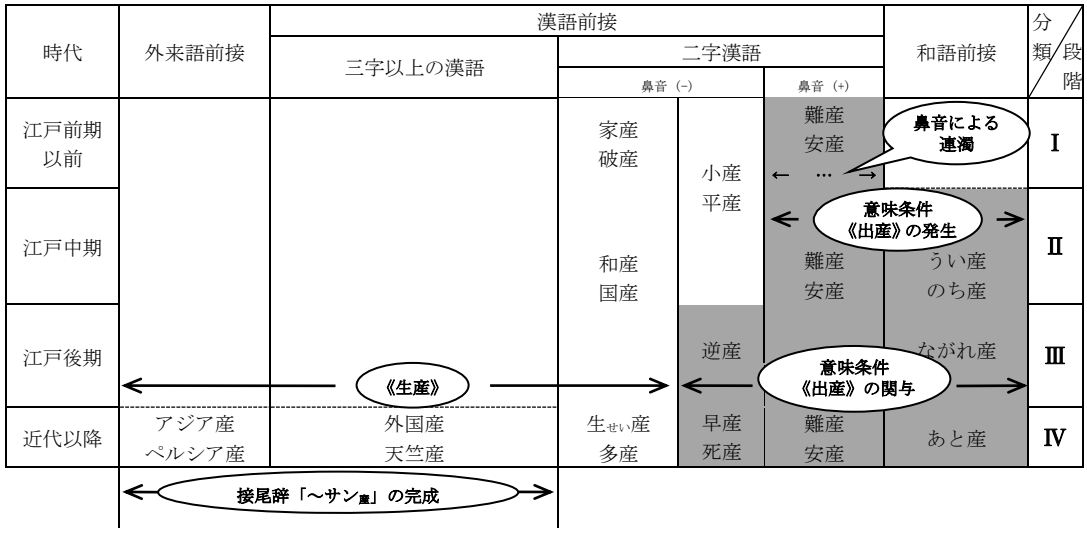
９．まとめ

「～産」の連濁の史的変遷を考察し、以下のようにまとめることができる。

「～産」は最初に二字漢語の後部要素として出現し、「難産」「安産」のように鼻音の前接によって連濁していた（第Ⅰ段階）。江戸中期になって和語前接の「～産」が出現し、この場合は「うい産」「のち産」のように連濁が起こっていた（第Ⅱ段階）。こうして出来た二字漢語の「～産」と和語前接の「～産」の連濁語は、いずれも《出産》を表している。この影響を受け、江戸後期になって《出産》を表す二字漢語の「早産」「逆産」などは鼻音の前接がなくても連濁が起こった（第Ⅲ段階）。江戸末・近代以降、清音形をとる《産地》を表す「倭産」「国産」から「日本産」「外国産」など接尾辞用法の「～サン$_{産}$」が発生した（第Ⅳ段階）。

これをまとめると〈図 1〉になる。

〈図 1〉



「〜産」は以上四つの段階を経て、現代では和語前接の場合は連濁する。二字漢語の場合は古く鼻音の前接によるもの以外は、基本的に連濁しないが、ただし《出産》を表す「〜産」には連濁が起こる場合がある。また接尾辞的用法「〜サン産」があり、地名語に後接し《産地》を表す。

第 1 章　調査文献

資料類

医心方／中右記／江談抄／三巻本色葉字類抄／海人の刈藻／源平盛衰記／有林福田方／文明本節用集／観智院本類聚名義抄／運歩色葉集／啓迪集／言経卿記／高野本平家物語／易林本節用集／饅頭屋本節用集／日葡辞書／浮世物語／好色一代女／病名彙解／恵空編節用集大全／補忘記（貞享版）／広原海／傾城禁短気／書言字考節用集／弓勢智勇湊／傾情知恵鑑／幕末御触書集成／和英語林集成（初版）（三版）／清英交際始末／新聞雑誌／諷誡京わらんべ／女学雑誌／日本風景論／太陽／福翁自伝／新世帯／こゝろ／雁／暗夜行路／大道無門

近現代辞書

言海（75 版）／大言海／日本大辞書／日本大辭林／日本大辞林／日本新辞林／ことばの泉／大増訂日本大辞典・ことはのいつみ／国民必携類語大辞典（18 版）／大日本国語辞典（初版）（10 版）（修訂 6 版）／新辞典／大辭典／言苑／明解国語辞典（第 12 版）（新装版改訂版）／言林／辞海　縮刷版／角川国語辞典（25 版）（新版）（新版 68 版）／角川国語中辞典／角川国語大辞典／広辞林（新版）（第 5 版）／新選国語辞典（初版）（改訂新版）（第 6 版）／旺文社国語辞典（初版）（新訂版）／三省堂国語辞典（初版）（新装版）（第 2 版）（第 3 版）（第 4 版）／岩波国語辞典（初版）（第

2 版）（第 3 版）（第 4 版）（第 6 版）（第 7 版）／講談社国語辞典（増補版）／三省堂新国語中辞典／新国語辞典（9 版）／広辞苑（第 2 版）（第 2 版補訂版）（第 3 版）（第 4 版）（第 5 版）（第 6 版）／新明解国語辞典（初版）（第 2 版）（第 3 版）（第 4 版）（第 5 版）（第 6 版）／例解国語辞典（33 版）／日本国語大辞典（初版）（第 2 版）／学研国語大辞典（初版）（第 2 版）／日本大辞典言泉／国語大辞典言泉／国語大辞典／例解新国語辞典（初版）（第 2 版）／現代国語例解辞典／大辞林（初版）（第 2 版）（第 3 版）／福武国語辞典／辞林 21／大辞泉（初版）（第 2 版）／ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典／明鏡国語辞典（初版）（第 2 版）

第２章　「～勢」の連濁の史的変遷

１．先行研究

序論 2-2 の（1）鼻音で述べたように、漢語の連濁は鼻音の後で起こりやすいとされている（奥村 1952 など）。例えば「～勢」の場合、「グンゼイ軍勢」はまさに鼻音の前接によって連濁していると考えられる。しかし現代では「かんこくぜい韓国勢」「アメリカぜいアメリカ勢」など、特に鼻音が前接していなくても濁音で使われる場合が多々ある。

第１章では「～産」の連濁について、先行研究を踏まえ、その連濁の史的変遷を考察した。一方で「～勢」の連濁についての研究は特にみられていない。「～勢」は現代ではどのような連濁の仕方をしているのか。またその連濁の仕方はどのような経緯をたどって出来たのか。本章ではこの問題を明らかにするため、「～勢」の連濁の史的変遷について考察する。

２．考察対象

序論で述べた調査方法で以下のような「～勢」の語例が集められ、考察対象とする。

威勢　有う勢　雨勢　運勢　栄勢　駅勢　奥勢　音勢　海勢　外勢　概勢
火勢　加勢　家勢　寡勢　我勢　観勢　岸勢　眼勢　危勢　気勢　棋勢　機勢
義勢　球勢　挟勢　強きょう勢　教勢　京勢　形ぎょう勢　局勢　去勢　虚勢
均勢　句勢　軍勢　群勢　形けい勢　渓勢　激勢　見勢　権勢　現勢　攻勢
強ごう勢　国勢　碁勢　語勢　金こん勢　作勢　山勢　市勢　姿勢　字勢　事勢
時勢　辞勢　弱勢　衆勢　守勢　趨しゅ勢　樹勢　商勢　勝勢　小勢　城勢
常勢　情勢　助勢　陣勢　腎勢　水勢　衰勢　趨すう勢　世せい勢　盛勢　勢勢
世せ勢　専勢　戦勢　潜勢　総勢　増勢　賊勢　村勢　大たい勢　体たい勢　対勢
隊勢　態勢　退勢　大だい勢　多勢　惰勢　地勢　中勢　町勢　長勢　潮勢
体てい勢　敵勢　党とう勢　等勢　騰勢　動勢　党どう勢　都勢　内勢　難勢
人勢　能勢　敗勢　波勢　藩勢　番勢　非勢　微勢　病勢　風勢　伏勢　不勢
府勢　武勢　無ぶ勢　文勢　分勢　兵勢　砲勢　無む勢　猛勢　有ゆう勢　勇勢
優勢　余勢　落勢　理勢　流勢　両勢　論勢　一番勢　諸軍勢　二番勢
あつまり勢　あつめ勢　あと勢　うき勢　うま勢　おお勢　おさえ勢　おち勢

かくし勢　かけつけ勢　かたらい勢　かみ勢　かり勢　くに勢　こ勢　さき勢
すけ勢　そい勢　たすけ勢　たのみ勢　たばかり勢　つき勢　つくり勢
つれ勢　て勢　とも勢　とりあつめ勢　ふせぎ勢　ふせ勢　へろへろ勢
みず勢　みせ勢　みつぎ勢　みやこ勢　もよおし勢　ゆ勢　ゆん勢　よ勢
よせ勢　よりあい勢

また、以下のような「～勢」は辞書に現れないため、網羅的に「～勢」の語彙を集めるべく、「聞蔵Ⅱビジュアル」「少納言　KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス」「太陽コーパス」「デジタルで読む福澤諭吉」のコーパスを使って収集した。なお、以下の「～勢」は表す意味《軍勢（兵隊)》も考え、軍記物に出現すると予測され、語例収集の際には、慶長古活字本『太平記』『天草版平家物語』『烏帽子折』『前太平記』などの資料も使用した。

越後勢　奥州勢　嘉義勢　韓国勢　関西勢　関東勢　下向勢　豪州勢　西国勢
信州勢　台北勢　長州勢　筑紫勢　東海勢　東国勢　坂東勢　仏帝勢　北條勢
米国勢
アメリカ勢　インド勢　ソ連勢　ドイツ勢　モンゴル勢　ローマ勢
あきた勢　あさくら勢　あさひかわ勢　あしかが勢　いば勢　いわて勢
おだわら勢　かがわ勢　かごしま勢　かながわ勢　かまくら勢　かみがた勢
くまの勢　さいたま勢　さとみ勢　しまね勢　たけだ勢　ちば勢　とっとり勢
ながの勢　にいがた勢　にった勢　はしば勢　ふくい勢　ふくしま勢　みえ勢
やまぐち勢　やまと勢　やまなし勢　よこはま勢　ろくはら勢　わかやま勢

但し、「一勢」「筆勢」「末勢」「劣勢」のように入声音・促音につづく「～勢」は連濁を起こしていないので、研究対象から省いた。

３．用例の出現時期とその清濁

「～勢」は江戸期まで、文献で濁音形で確認できたのは「軍勢」「諸軍勢」「音勢」「難勢」「番勢」「文勢」「猛勢」「動勢」「両勢」「京勢」「総勢」「党どう勢」「敵勢」「大たい勢」「多勢」「無ぶ勢」「下向勢」「ゆん勢」「ゆ勢」「て勢」「こ勢」「おお勢」「もよおし勢」「みせ勢」「さき勢」「すけ勢」「ふせ勢」「かたらい勢」「よ勢」「おさえ勢」「ひき勢」「おち勢」「あと勢」「みやこ勢」「関東勢」「越後勢」「坂東勢」「奥州勢」「東国勢」「六波羅勢」「筑紫っくし勢」「やまと勢」「かまくら勢」「ちば勢」の 44 語

である。

(1) 軍勢・諸軍勢

「軍勢」は『今昔物語集』には出現している。鎌倉時代には「軍勢」は使われたと思われる。

・世ノ昔物語ニコソスレ、未ダ此許ノ軍勢不見トゾ人寄異ガリケル『今昔物語集』二五・九

仮名表記で最初に確認できたのは『文明本節用集』である。この例は清音形で現れたが、実際の発音に関しては清音か濁音か不明である。

・軍兵（グンビヤウ）〈呂中略〉—勢 セイ『文明本節用集』五〇一

キリシタン資料では「軍勢」は濁音形で現れている。「軍勢」は少なくとも室町末期頃には濁音で使われていたと思われる。

・ソレ　ナラバ　イソイデ　ヲイダセトユウテ、gunjei　ヲ　モヨヲス　ト、キコエタレバ『天草版平家物語』10
・Gunjei. グンゼイ（軍勢）軍勢，あるいは，兵士の集団『邦訳日葡辞書』

またそれ以降、江戸時代にも以下のように多数の濁音形の「軍勢」が文献に確認できる。

・蒙古蒙夷の鬼をあつめて軍勢（ぐんぜい）とし平家をやすく亡さん『烏帽子折』12ウ
・軍勢　クンゼイ『元和三年板下学集』
・軍勢（グンゼイ）　統レ軍持レ勢者将也。制レ勝破レ敵者衆也『書言字考節用集』四
・Gun-zei, グンゼイ, 軍勢, n. An army『和英語林集成』（初版）

以上から「軍勢」は室町末より濁音形が確認され、江戸期に入ってからも多数の濁音形が確認される。また現代でも「軍勢」は濁音形で使われている。「軍勢」は古くから連濁し、濁音形である状態が現代まで続いてきたと思われる。

ところで「諸軍勢」については『日葡辞書』、また『前太平記』に濁音形で現れている。室町末・江戸前期に濁音で使われていたと思われる。

・Xogunjei. ショグンゼイ（諸軍勢）同上〈呂注：Xogun. l, gunjei〉『邦訳日葡辞書』
・斯くて経基王、諸軍勢（しよぐんぜい）に向かつて下知し給ひけるは『前太平記』四・箕田城軍評定事

(2) 音勢

「音勢」は最初に文献に確認できたのは『古今著聞集』である。

・音勢もありてめでたき琵琶にてぞ侍りける『古今著聞集』一二・四二八

その後「音勢」とみられる用例が室町末・近代初期の謡曲『烏帽子折』に濁音形で出現した。

・夜ととも笛をあそばせし、おんぜいいきさし程ひやうし物あひすむだる所は、唐橋殿の笛にはみきはまさつておぼえたり『烏帽子折』

それ以降「音勢」は文献に確認できなくなり、姿を消したと思われる。

(3) 難勢

「難勢」は『日本国語大辞典　第 2 版』によると鎌倉時代の『私聚百因縁集』には出現している。

・諸方難勢有り『私聚百因縁集』八・六（『日本国語大辞典　第 2 版』による）

江戸期になり「難勢」は濁音形で文献に確認される。

・惟茂ゆみやの法をしらぬとは。尤わぬしに似合たる難勢（なんぜい）『艶狩剣本地』一

それ以降「難勢」は文献に確認できなくなり、姿を消したと思われる。

(4) 番勢

「番勢」は『日本国語大辞典　第２版』によると『山中文書』に出現している。

・上は五十、下は拾七をかぎり在陣あるべく候。永陣におゐては番勢たるべく候『山中文書』一一月一六日・伊賀惣国一揆掟書（『日本国語大辞典　第２版』による）

『日葡辞書』では「番勢」は以下のように濁音形で現れている。

・Banjei. バンゼイ（番勢）戦争の時警備に任ずる軍勢『邦訳日葡辞書』

「番勢」も「～勢」に鼻音の前接があり、古くから連濁していた可能性がある。但し江戸期以降、「番勢」は文献に確認できなくなり、姿を消したと思われる。

ところで室町後期・江戸初期頃において、「一番勢」「二番勢」のような言い方もあった。その清濁に関しては不明だが、「番勢」が鼻音の前接によって連濁していたことを考えれば、「一番勢」「二番勢」も連濁していた可能性があるとみられる。

・前将軍ハ一番勢也『史記抄』一五・李将軍列伝

・ココデハ二番勢ヲタツル時分ゾ。生タハハジメヤワラカナハ二番勢ノトキゾ『毛詩抄』九

(5) 文勢

「文勢」は『史記抄』には出現している。序論でも述べたように『史記抄』は江戸初期の書写を底本にしているが、『史記抄』が成立したといわれている室町時代の状況をある程度反映しているのではないかと考えられる。室町時代の原本に既に「文勢」が出現した可能性がある。

・フセラウヨリハ博奕ハマシト云タ文勢ゾ『史記抄』三・史記集解序

江戸期には以下のように、漢字表記の「文勢」に振り仮名が確認され、濁音形で現れている。

・ことばかたく、文勢（ぶんぜい）ふつつかなり『満散利久佐』序

現代では「文勢」は以下のように清音である。

・文勢　ブンセイ『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

このように「文勢」は古く連濁していたが、後に清音化し、現代では清音で使われている。

(6) 猛勢

「猛勢」は『保元物語』には出現している。

・是こそ猛勢なるべきが嫡子義朝に付いて多分は内裏へ参りけり『保元物語』上・新院御所各門々固めの事

『日葡辞書』には「猛勢」は濁音形で現れ、また江戸期にも「猛勢」は濁音形で確認される。

・Mǒjei. マウゼイ（猛勢）すなわち，Taxei.（多勢）勇猛な人々，たとえば，軍勢などの集団『邦訳日葡辞書』
・いよ／＼猛勢（まうぜい）になる候ひぬ廣瀬文庫版『太平記』一九・奥州国司顕家の卿上洛并新田徳寿丸上洛の事

但し江戸末の『和英語林集成』（初版）には「猛勢」は清音形で現れてくる。江戸期において「猛勢」の清音化したと思われる。

・†Mōsei, マウセイ, 猛勢,（takeki ikioi）. Valiant, intrepid『和英語林集成』（初版）

現代では「猛勢」はほとんど使われなくなっている。

(7) 動勢

「動勢」は『日葡辞書』に濁音形で現れている。

・†Dôjei, ドゥゼイ（動勢）必要に応じて助勢に向かうために部隊の後部に控

えている身分のある人々〔武士たち〕『邦訳日葡辞書』

他の文献に「動勢」が出現することが確認できなかった。「動勢」は室町末期には濁音形で使われていたが、それ以降、姿を消したと思われる。

(8) 両勢

「両勢」は『太平記』には現れるが、廣瀬文庫版『太平記』には清音形の振り仮名がみられる。その実際の清濁は不明である。

・両せいを一手になして大勢の中へうけ入、時うつる迄ぞたゝかひたる廣瀬文庫版『太平記』八・持明院殿六はらに行幸の事

江戸中期になり「両勢」は『嫗山姥』に濁音形で現れた。

・源氏方にもあまさじと、両ぜいどっと入みだれ火水に。なれとぞ、〻たゝかひける『嫗山姥』一

このように「両勢」は少なくとも江戸中期頃には濁音形で使われていたとみられる。但し現代では「両勢」はほとんど使わなくなり、江戸後期以降に姿を消したを思われる。

(9) 京勢

「京勢」は『太平記』に出現している。平仮名が振られている江戸期の廣瀬文庫版『太平記』には「京勢」は濁音形で現れている。具体的な時期は不明だが、『太平記』が成立した室町頃から江戸前期頃までの間、「京勢」は濁音で使われたと考えられる。

・京勢（きやうぜい）かさねて南方発向の事付仁木没落の事廣瀬文庫版『太平記』目録

但しそれ以外に「京勢」は文献に確認できず、また現代でも「京勢」は使われていないため、『太平記』より以降、姿を消したと思われる。

(10) 総勢

『日本国語大辞典　第 2 版』によると、江戸中期の雑俳『柳多留』に「惣勢」が出現している。この「惣勢」の用例は『日本国語大辞典　第 2 版』では「総勢」と同語源のものとみなされている。また『日本国語大辞典　第 2 版』では以下のように濁音形で示しているが、その実際の清濁の確認はできておらず、不明である。

・惣勢（そうぜい）は土手をおしてくよしの落『柳多留』二三（『日本国語大辞典　第 2 版』による）

近代以降、「総勢」は文献に濁音形で確認され、現代でも濁音で使われている。

・先づ人数を聞糺し、惣勢（そうぜい）三十何人と分て『福翁自伝』欧羅巴各国に行く
・五日より十日まで惣勢（そうぜい）替る替る訊問を受けた『夜明け前』第二部・下・一一・三
・総勢　そうぜい『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

「総勢」は少なくとも近代以降から現代まで濁音で使われてきたといえる。但し「総勢」の「～勢」の前接部「総」は古く中国原音で ng を有したもので、鼻音の前接により古くから連濁していた可能性もある。

（11）党どう勢

「党どう勢」は江戸中期の『けいせい伝受紙子』に濁音形で現れていた。

・門門馬場に待居たる諸大名の党勢（どうぜい）、面面主人の身の上心もとなく我一とさはぎたち『けいせい伝受紙子』一・三

「党どう勢」という語形はそれ以降に文献に確認できなくなり、現代でも使われていない。

但し『日本国語大辞典　第 2 版』ではこの用例を「同勢」としている。「同勢」は現代でも濁音で使われている。もし「同勢」は「党どう勢」と同語源のものだとすれば、「党どう勢」は江戸中期より現代まで濁音形のまま使われてきた可能性がある。

・同勢　ド’ーゼイ　ドーゼイ『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

(12) 敵勢

「敵勢」は『日葡辞書』には濁音形で出現している。

・†Teqijei. テキゼイ（敵勢）敵の部隊，あるいは，敵の軍隊『邦訳日葡辞書』

それ以降「敵勢」は文献に確認できなかったが、現代でも「敵勢」が使われる場合は濁音で現れる。「敵勢」は室町末期より濁音のまま使われてきた可能性がある。

・敵勢　テキゼイ『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

(13) 大たい勢

「大たい勢」は鎌倉中期には用例がみられる。但し以下の用例は濁点が付されておらず、その実際の清濁に関しては不明である。

・大勢（たいせい）のほとけ、および断苦の法をもとめず『妙一本仮名書き法華経』一・方便品第二

『日葡辞書』には「大たい勢」は清音形で現れている。

・Taixei. タイセイ（大勢）　Vôqina iqiuoi.（大きな勢）大きな勢力，あるいは，猛烈さ『邦訳日葡辞書』

「大勢」は室町中期の文献に仮名表記の用例がみられるものの、濁音形が確認されておらず、また『日葡辞書』に「大たい勢」は清音形で現れたことも考え、「大たい勢」は室町末期まで清音形で使われていた可能性がある。

江戸後期になると「大たい勢」は以下のように濁音形で現れてくる。現代でも「大たい勢」は濁音形で使われている。

・再て討手の大勢（たいぜい）を向られなば、いかにし脱れ給はん『椿説弓張月』続・四〇四

・大勢　タイゼイ『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

このように、「大たい勢」は古く清音だったが、江戸後期には濁音形で現れるように

なり、現代まで使い続けられてきたと考えられる。

(14) 多勢

「多勢」は『平治物語』には出現している。

・此無勢にて、多勢にあふてうたれん事こそ無念なれ『平治物語』上・六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事

『日葡辞書』には「多勢」は清音形で現れた。「多勢」は古くから清音で使われていた可能性がある。

・Taxei. タセイ（多勢）Vôjei（大勢）に同じ．たくさんの人々．▶Mô jei『邦訳日葡辞書』

また、室町末・江戸前期の他の資料においても「多勢」はまた以下のように濁音形で現れることはなかった。

・あら物々しわおとこよ、わおとこよ、たせいにひとりが叶ふべきか『虎明本狂言集』髭櫓
・龍女もおどろくべき多勢（たせい）なり『武家義理物語』三・五

ところが江戸末期・明治期になると『和英語林集成』(初版)、『和英語林集成』(再版）には「多勢」は濁音形で現れるようになる。

・Ta-zei, タゼイ, 多勢, (ōzei). n. A large army, or crowd of men『和英語林集成』(初版）
・Ta-zei, タゼイ, 多勢, (ōzei). n. A large army, or crowd of men『和英語林集成』(再版）

但し『和英語林集成』(三版）には「多勢」は清音形で現れている。

・Tasei　タセイ　多勢（ōzei）　Many: - busei, many, and few『和英語林集成』(三版）

「多勢」は江戸末期・明治期になって濁音形で現れるようになったが、その濁音形はまだ完全に定着しておらず、清濁の間で揺れをみせていたのではないかとみられる。現代では「多勢」は既に濁音形で定着している。

・多勢　タゼイ『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

(15) 無ぶ勢

「無ぶ勢」も『平治物語』に出現している

・此無勢にて、多勢にあふてうたれん事こそ無念なれ『平治物語』上・六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事

『平家物語』にも「無ぶ勢」が出現している。延慶本『平家物語』には「無ぶ勢」は清音形で現れるため、その清濁は不明である。

・「ブセイニタヤスクカケラレテサウラフ。ココカケタマヘ」ト申ケレバ延慶本『平家物語』

但しキリシタン資料には「無ぶ勢」は以下のように清音で現れている。「無ぶ勢」は室町末期まで清音で使われていた可能性がある。

・トッテカエシ、トッテカエシ　ロクジョウカワラト、サンジョウガワラノ　アイダデ　buxei　ナレドモ、タセイヲ　ゴロクド　マデ　ヲイカエイテ『天草版平家物語』242

・Buxei. ブセイ（無勢）すなわち，Buninju（無人数），sucunai xei.（少ない勢）少ない軍勢『邦訳日葡辞書』

また江戸期の文献にも「無ぶ勢」は以下のように濁点が付けられることは確認できなかった。

・味方無勢（ぶせい）の間、意ならず敗北しぬ『前太平記』巻第十九・良門再び勢を集めて反撃す

明治期になっても「無勢」は『和英語林集成』(三版)、濁点が多数施されている『日本大辞書』には未だに清音で現れており、「無勢」が清音の状態が少なくとも明治期まで続いたとみられる。

・Busei　ブセイ　無勢 (sukunashi)　Not many persons or troops; few persons: tasei ni - totemo kanawanu, a few are unable to contend with a multitude『和英語林集成』(三版)

・ぶ・せい (全平、又、第一上) 根。{無勢}　字音。人数ノ少イコト。―「多勢に無勢」『日本大辞書』

ところが現代では「無ぶ勢」は濁音形で使われている。

・無勢　ぶぜい『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

このように「無ぶ勢」は明治期まで清音だったが、現代では濁音へと変わったと思われる。

(16) 下向勢

「下向勢」は『太平記』に現れている。読みが確認できる江戸前期の廣瀬文庫版『太平記』には「下向勢」は濁音形で現れている。「下向勢」は少なくとも『太平記』が成立した室町期頃から江戸前期までの間、濁音で使われたことがあると考えられる。

・北国下向勢 (げかうぜい) こゞへ死の事廣瀬文庫版『太平記』一七・表題

それ以外に文献に出現することは確認できなかった。

(17) ゆん勢・ゆ勢

「ゆん勢」は『日本国語大辞典　第 2 版』によると、平安・鎌倉時代の『扶桑略記』に出現した。

・語二義家一曰、僕欲レ試二君弓勢一如何『扶桑略記』康平五年・一二月二八日 (『日本国語大辞典　第 2 版』による)

室町末期・江戸期になり、濁音形の「ゆん勢」が以下の文献に現われた。

・菩薩ハ位ガマシテ吾ガ悟ルバカリデモナク、人ヲモヲスエテ悟ラスルユンゼイガアルゾ『詩学大成抄』九
・Yunjei, ユンゼイ（弓勢）Yumino iqiuoi.（弓の勢）弓の射手の力，または，弓の力．▶Yujei『邦訳日葡辞書』
・我が弓勢（ゆんぜい）を顕はさんとて、必ず徒矢な射そ『前太平記』巻第四・箕田城軍評定事
・あすけ殿の御弓勢（ゆんぜい）日頃承り候しほどはなけりけり廣瀬文庫版『太平記』三・笠置軍の事付陶山小見山夜討の事
・人々是を見て、あつはれつよき弓ぜいやと、をのをのかんじていたりけり『釈迦の御本地』二
・Yun-zei, ユンゼイ，弓勢，(yumi no ikioi).The power of a bow or the force of an arrow. -ni szgatte tatsz, stood leaning on his bow『和英語林集成』(初版)

「弓勢」は中世頃に文献に出現し、濁音形で使われてきたと思われる。
ところで「弓勢」は『日葡辞書』によると「ゆぜい」という発音もあった。但し「ゆぜい」は他の文献に出現することは確認できなかった。「ゆぜい」は室町末期において一時期使われていたが、後ほど姿を消したと思われる。

・Yujei. ユゼイ（弓勢）Yumino chicara.（弓の力）人が持っている，弓の弦を引っ張る力．▶Yunjei『邦訳日葡辞書』

(18) て勢

「て勢」は『日本国語大辞典　第 2 版』によれば、鎌倉時代の『吾妻鏡』に出現している。

・仰二御家人等面面一、被レ注二手勢一『吾妻鏡』文治五年・七月二八日（『日本国語大辞典　第 2 版』による）

室町末・江戸期になり、以下のように濁音形の「て勢」が文献に多数確認される。

・ナント　ヲモワレタ　カ、ミチ　カラ　tejei　サンビャク　アマリ　ヲ　ヒキワケテ『天草版平家物語』188
・Tejei. テゼイ（手勢）自分の配下の兵士や軍勢『邦訳日葡辞書』
・手ぜい合て六万よき御さき手とぞこたへける『烏帽子折』32 オ
・手勢（テゼイ）『書言字考節用集』四 62
・手勢（てぜい）四五十人を将て南風原に赴き『椿説弓張月』続巻四・第四十回
・Te-zei, トママゼイ, 手勢, n. One’s company, or division of troops『和英語林集成』（初版）

「て勢」は古くから濁音形で使われてきたと思われる。

(19) こ勢

「こ勢」は『平家物語』には出現している。延慶本『平家物語』には以下のように既に濁音表記がみられる。

・「オホゼイヲマチツケテイクサハセヨ。コゼイニテ先ニススムデフカクスナ」トノタマヘバ延慶本『平家物語』四・永僉議

またそれ以降の文献にも濁音形の「こ勢」が多数確認される。

・ナイナイ　ヲタチ　ノ　ヤウダイ　モ　cojei　デ　タヤスウ　セメ　ヲトシガタカラウズ『天草版平家物語』122
・イクサワ　ショウブノ　コト　ナレバ〈呂中略〉cojeivomotte　ヲウ　ゼイニ　カツ　コトワ　ソノ　タメシガ　ナイ　デモ　ナイ『天草版伊曽保物語』鳥と獣の事
・Cojei. コゼイ（小勢）小人数『邦訳日葡辞書』
・されども敵は僅かの小勢（こぜい）なれば『前太平記』巻第三・御厨三郎軍事
・頼光は忍びの旅小ぜいの供人大半討れ『嫗山姥』第一・15 オ
・こ・ぜい　（全平）名。（小勢）　漢語。人数ノスクナクアルコト。―「こぜいノ人数」『日本大辞書』
・小勢（こぜい）な人数には広過ぎる古い家がひっそりしてゐる中に『こゝろ』中・四

このように「こ勢」は古くから連濁し、濁音形のまま近代まで使われてきたと思

われる。

(20) おお勢

「おお勢」は最初に文献に確認できたのは『平家物語』である。延慶本『平家物語』には「おお勢」は濁音形で出現している。

・カツウハマタコマツノ内大臣イゲノクワンビヤウ、オホゼイニテカタメテ候モンモンヲバヤブリタマハデ延慶本『平家物語』一・卅六

それ以外にも「おお勢」は多数の文献に濁音形で現われている。

・大概（ヲヽムネ）〈呂中略〉—勢（ゼイ）『文明本節用集』二一八
・ヘイケ　ワ　vôjei　ノ　ニンジュ　ヲモッテ　ヲイカケ　タテマツラレタ『天草版平家物語』125
・大旨（オホムネ）〈呂中略〉—勢（ゼイ）『易林本節用集』一二七
・Vôjei. ヲゥゼイ（大勢）たくさんの人々. Caqeyaburi,ru; Fiqitachi,u『邦訳日葡辞書』
・一人シテ事ヲスレバワルイ事ガアルホドニ、ヲウゼイシテ談合スルゾ『史記抄』一一・蒙恬
・二十四人の者共大勢（おほぜい）の中へみだれ入て、おもてもふらずきつてまわる廣瀬文庫版『太平記』一・頼員かへり忠の事
・さしもの大ぜい。しどろに成て見へけるが近郷の農人浪人『嫗山姥』第一 15 ウ
・Ōzei, オゼイ[ママ], 大勢, n. A multitude, a great company. - no hito, a great many people『和英語林集成』(再版)

現代でも「おお勢」は濁音形で使われている。「おお勢」は古くから連濁して濁音形で現代まで使い続けられてきたと思われる。

・大勢　オオゼイ『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

(21) もよおし勢

「もよおし勢」は『太平記』に出現している。用例の読みが確認できる江戸前期の廣瀬文庫版『太平記』には「もよおし勢」は濁音形で現れている。「もよおし勢」

は少なくとも『太平記』が成立した室町時代頃から江戸前期までの間に濁音で使われたことがあると考えられる。

・諸国のもよをし勢（ぜい）路次の軍に降人に出たりつる坂東勢廣瀬文庫版『太平記』一四・官軍箱根を引しのぞく事

それ以外に「もよおし勢」は文献に確認できなくなり、姿を消したと思われる。

(22) みせ勢

「みせ勢」は『太平記』には用例が確認され、江戸前期の廣瀬文庫版『太平記』には「みせ勢」は濁音形で現れている。

・龍泉がみねに屏を塗やぐらをかゝせて、見せ勢（ぜい）になしてぞをきたりける廣瀬文庫版『太平記』三四・新将軍南方進発の事付軍勢狼藉の事

また『日葡辞書』にも「みせ勢」は濁音が現れている。「みせ勢」は少なくとも室町末・江戸前期頃に濁音で使われていたとみられる。

・†Mixejei. ミセゼイ（見せ勢）戦争の際にわざと敵に見せつける軍勢『邦訳日葡辞書』

但しそれ以降は「みせ勢」は文献に確認できず、江戸中期頃より姿を消したと思われる。

(23) さき勢

「さき勢」は『日本国語大辞典　第 2 版』によると安土桃山時代頃の『江濃記』に出現している。

・浅井勢は御会寺村へ取り込みて陣を取る。翌日未明に先勢の者ども人数を押し出だし『江濃記』道三最後之事（『日本国語大辞典　第 2 版』による）

『日葡辞書』にも「さき勢」が現れており、濁音形が確認される。「さき勢」は室町末期において一時期、濁音形で使われていたとみられる。

・Saqijei. サキゼイ（先勢）前衛の軍勢『邦訳日葡辞書』

その後「さき勢」は文献に確認できず、姿を消したと思われる。

(24) すけ勢

「すけ勢」は『易林本節用集』に出現し、濁音形が確認される。

・助勢（スケゼイ）『易林本節用集』二四一

それ以外にも、『日葡辞書』『書言字考節用集』にも濁音形の「すけ勢」は濁音形で出現した。

・‡Suqe jei. スケゼイ（助勢）→ 前条〈呂注：Suqe,uru〉『邦訳日葡辞書』
・援勢（スケゼイ）『書言字考節用集』一二57

但し江戸後期からは「すけ勢」は文献に確認できなくなる。「すけ勢」は室町末期より江戸中期にかけて濁音で使われていたが、その後、姿を消したと思われる。

(25) ふせ勢

「ふせ勢」は室町後期の『玉塵抄』には出現している。

・城ヲトリマワイテフセ勢ヲヲイテ敵ノナリヲミタレバクタビレタゾ『玉塵抄』二五

『日葡辞書』にも「ふせ勢」が現れ、濁音形が確認される。

・†Fuxejei. フセゼイ（伏勢）敵に攻めかかるために，待ち伏せをしたりして隠れている軍勢『邦訳日葡辞書』

また、江戸末期の『和英語林集成』にも濁音形の「ふせ勢」が確認できる。

・Fuse-zei, フセゼイ，伏兵，n. An ambuscade. Syn. Fuku-hei『和英語林集成』（初版）

「ふせ勢」は少なくとも室町末期から濁音で使われてきたとみられる。但し現代では「ふせ勢」は使わなくなっているため、近代以降に姿を消したと思われる。

(26) かたらい勢

「かたらい勢」は最初に『文明本節用集』に確認されるが、濁点が付されていないため、その実際の清濁は不明である。

・語傳（カタリツタエ）〈呂中略〉―勢（カタライセイ）『文明本節用集』二七九

その後『易林本節用集』『日葡辞書』にも「かたらい勢」が現れ、濁音形が確認される。

・語勢（カタラヒゼイ）『易林本節用集』七一
・Cataraijei. カタライゼイ（語らひ勢）援助，または，救助の軍勢『邦訳日葡辞書』

「かたらい勢」は少なくとも中世末期頃には濁音形で使われていたと思われる。但しそれ以降、「かたらい勢」は文献に確認できなくなり、姿を消したと思われる。

(27) よ勢

「よ勢」は『日葡辞書』に濁音形で出現している。

・Yojei. ヨゼイ（夜勢）夜，敵を急襲するために行く軍勢．Yojeiuo facobu.（夜勢を運ぶ）夜襲などをするために，その軍勢を派遣する『邦訳日葡辞書』

但しそれ以外の文献には確認できなかった。「よ勢」は室町末期に一時期、濁音形で使われていたが、そのあと使われなくなり、姿を消したと思われる。

(28) おさえ勢

「おさえ勢」は『日葡辞書』に濁音形で現れている。

・‡Vosayejei. ヲサエゼイ（押さへ勢）→ Vosaye『日葡辞書』

それ以外に「おさえ勢」は文献に確認できず、また現代でも「おさえ勢」は使われていない。「おさえ勢」は室町末期に一時期濁音形で使われていたが、その後、姿を消したと思われる。

(29) ひき勢

「ひき勢」は『日葡辞書』に用例が確認され、濁音形で現れている。

・Fiqijei. ヒキゼイ（引勢）退却して行く軍勢，または，引きさがって行く軍勢『邦訳日葡辞書』

それ以外に「ひき勢」は文献に確認できなかった。「ひき勢」は室町末期に濁音で使われたが、後に姿を消したと思われる。

(30) おち勢

「おち勢」は江戸初期の『三河物語』に濁音形で現れている。

・森山ヲ落テ帰ル。森山モ落勢（ヲチゼイ）ナレ供、心モ替シテ『三河物語』一

但しそれ以降の文献には確認できなかった。「おち勢」は江戸初期に濁音形で使われていたが、その後は姿を消したと思われる。

(31) あと勢

「あと勢」は『日本国語大辞典　第 2 版』によると、江戸初期の『当代記』に出現している。

・慶長十九年十一月六日将軍永原に暫逗留し給、跡勢待給『当代記』(『日本国語大辞典　第 2 版』による)

同じ頃の『三河物語』には「あと勢」とみられる用例は濁音形で現れていることから、「あと勢」は江戸初期に濁音形で使われていたとみられる。

・天野宮内右衛門尉けた之郷より出て、あとぜいにしきつてしたい付『三河物語』三

それ以降「あと勢」は文献に確認できなくなった。「あと勢」は江戸初期に濁音で使われていたが、その後、姿を消したと思われる。

(32) みやこ勢

「みやこ勢」とみられる用例は『日本国語大辞典　第 2 版』によると、江戸前期の浄瑠璃『四天王女大力手捕軍』に出現している。『日本国語大辞典　第 2 版』では以下のように濁音形で示しているが、その実際の清濁に関しては確認ができておらず、不明である。

・都ぜい、よを日についでうつ程に『四天王女大力手捕軍』三（『日本国語大辞典（第 2 版）』による）

但し同じ頃の『前太平記』には「みやこ勢」は濁音形で確認されている。

・又都勢（みやこぜい）を防ぐべき意見を訪はれけるに『前太平記』八

現代では「みやこ勢」は既に使われていないが、江戸前期に「みやこ勢」は濁音で使われていたとみられる。

(33) その他（関東勢・やまと勢など）

その他、固有名詞等に付いて、接尾辞的に働く「～勢」の用法は『平家物語』に全くみられないが、『太平記』には多数出現している。その読みが確認できたのは江戸初期の廣瀬文庫版『太平記』で、多数の濁音形で確認される。これらの「～勢」は少なくとも『太平記』が成立した室町時代頃から江戸前期までの間、濁音で使われたことがあると考えられる。

・新田義貞むほんの事付天狗催越後勢（ゑちごぜい）事廣瀬文庫版『太平記』目録
・東国勢（とうごくぜい）百万余騎にて上洛し廣瀬文庫版『太平記』七・先帝船の上臨幸の事
・諸国のもよをし勢路次の軍に降人に出たりつる坂東勢（ばんどうぜい）廣瀬文庫版『太平記』一四・官軍箱根を引しのぞく事
・奥州勢（あうしうぜい）坂本につく事廣瀬文庫版『太平記』一五・表題
・たとひ尊氏つくし勢（ぜい）を率して上洛すとも廣瀬文庫版『太平記』一六・正成兵庫に下向の事
・六はらぜいうちまけぬと聞えければ廣瀬文庫版『太平記』三・主上御夢の事付楠が事
・是は大和勢（やまとぜい）にて候か廣瀬文庫版『太平記』三・笠置軍の事付陶山小見山夜討の事
・鎌（かま）くら勢（ぜい）みな川よりひがしに陣を取てゐけるが廣瀬文庫版『太平記』一四・

やはぎさぎ坂手越河原たゝかひの事

・今上りの千葉勢（ちばぜい）これを聞ゝて廣瀬文庫版『太平記』一五・三井寺合戦并当寺撞鐘の事付俵藤太が事

・あとにつゞけるくま野勢（のぜい）五百よ人、此矢二すじを見て廣瀬文庫版『太平記』一七・山門ぜめの事付日吉神託の事

このような用法は他にも江戸前期の謡曲『烏帽子折』に用例がみられ、濁音形で現れている。

・関東勢（くはんとうぜい）を引ぐして御むかひがてら参宮の望にて『烏帽子折』52オ

また現代でも固有名詞等に付く「～勢」は「日本勢」「アメリカ勢」などが挙げられるが、全部濁音で使われている。

このように、固有名詞等に付く「～勢」の用法は室町・江戸前期頃に現れ、濁音形のまま現代まで使い続けられてきたのではないかと考えられる。

４．「～勢」の語彙特徴について

4-1　「～勢」の前部要素の特徴

「～勢」の語彙は『続日本紀』には用例が確認されている。序論でも述べたように本論文で使用した『続日本紀』の底本は平安時代のものだとはいえないが、少なくとも平安時代の状況をある程度反映しているのではなかろうか。平安時代に既に以下の「地勢」「有勢」が使われていた可能性がある。この「地勢」「有勢」は「～勢」が二字漢語の後部要素として使われている。

・従二玉野一至二賊地比羅保許山一八十里、地勢平坦無レ有二危険一　『続日本紀』天平九年・四月戊午

・令下近江国司禁中断有勢之家専貪二鐵穴一。貧賤之民不レ得二採用一『続日本紀』天平一四年・一二月戊子

『日本国語大辞典　第２版』により、平安末・鎌倉初期になると、「～勢」に和語が前接しているとみられる用例が出現してくる。

・語二義家一曰、僕欲レ試二君弓勢一如何『扶桑略記』康平五年・一二月二八日（『日本国語大辞典　第２

版』による）

・仰二御家人等面面一、被レ注二手勢一『吾妻鏡』文治五年・七月二八日（『日本国語大辞典　第２版』による）

更に本章 3-33 で述べたように固有名詞等に接続して接尾辞的に働く「～勢」は室町・江戸前期頃より文献に確認できるようになる。

・関東勢（くはんとうぜい）を引ぐして御むかひがてら参宮の望にて『烏帽子折』52 オ
・新田義貞むほんの事付天狗催越後勢（ゑちごぜい）事廣瀬文庫版『太平記』目録

4-2　「勢」の自立性

「勢」は以下のように、古くは単独でも使える漢語であった。

・阿修羅王ト云フ者有リ、身ノ勢、極テ大キ也『今昔物語集』三・一〇
・サレバヨクヨクハカリ事ヲメグラシテ、勢ヲモヨホシ、後日ニヨセサセ給フベウヤ候ラン延慶本『平家物語』四・永僉議

『日葡辞書』によると、自立語の『勢』は《勢力（勢い)》と《軍勢（兵隊)》の二通りの意味をもっていた。

・Xei.　(精・勢) 勢力. Xeiuo tçucarasu (精を疲らす) 疲労させる. Xeiuo tçucusu (精を尽す) 全力を尽くす，あるいは，全力をうち込む. Xeiuo iruru (精を入るる) 努めはげみ，念を入れる. また，軍隊，あるいは，軍勢. 例，Xeiuo soroyuru, Xeiuoatçumuru (勢を揃ゆる，勢を集むる) 兵の検閲をする，または，軍勢の編成をする. Xeiuo comuru. (勢を籠むる) 城の中などに軍勢を入れる.▶Saxitçcauaxi,su; Soroye,uru; Soxxi,suru;Tçuqi,quru『邦訳日葡辞書』

江戸末・明治期になり『和英語林集成』で示すように、「勢」は未だに自立用法をもっていた。但し以下で示すように、このときの「勢」は主に《勢力（勢い)》の意味で使われており、《軍勢（兵隊)》の意味で使われている場合は「敵の勢」というの形に限られていた。

・Sei, セイ, 勢, (ikioi). n. Strength, force, energy, vigor, ability; power,

authority, influence; an army. Kuszri no sei a tszyoi, the medicine is strong. - ga tszkiru, strength is exhausted. - wo dasz, to put forth one's strength. Teki no -, the enemy's army. - ga tszku, to be invigorated. -ippai ni, with all one's ability. - no yowai h'to, a person of no vigor

『和英語林集成』(初版)

ところが現代では「勢」は単独では使えなくなり、自立用法を失っている。

このように、「勢」は古く単独で使う用法と二字漢語の後部要素に使う用法をもっていた。平安末・鎌倉初期頃には「～勢」に和語が前接する用法が出来た。更に室町・江戸前期頃になって、接尾辞的に働く「～勢」が出来た。一方で「勢」の単独で使う自立用法は江戸末・近代以降になると徐々に縮小し、現代では「勢」の自立用法が消えている。

以上をまとめると、〈表 6〉になる。

〈表 6〉

文　献	地勢	有勢	音勢	難勢	文勢	猛勢	動勢	大勢	多勢	無勢	軍勢	番勢	両勢	京勢	総勢	党勢	敵勢	諸軍勢	下向勢	関東勢	坂東勢	奥州勢	やまと勢	かまくら勢	みやこ勢	もよおし勢	みせ勢	さき勢	すけ勢	ふせ勢	かたらい勢	よ勢	おさえ勢	ひき勢	おち勢	あと勢	て勢	こ勢	おお勢	ゆん勢
続日本紀	□	□																																						
扶桑略記（日国）																																								□
今昔物語集											□																													
色葉字類抄	△																																							
平治物語									□	□																														
保元物語						□																																		
延慶本平家物語										△																											●	●	
古今著聞集			□																																					
私聚百因縁集（日国）				□																																				
妙一本仮名書き法華経								△																																
吾妻鏡（日国）																																				□				
源平盛衰記	△																																							
文明本節用集											△																			△								●	
詩学大成抄																																								●
玉塵抄																														□										
山中文書（日国）												□																												
江濃記（日国）																												□												
天草版平家物語										○	●																									●	●	●	
天草版伊曽保物語																																					●		
易林本節用集																													●		●							●	
史記抄					□																																	●	
日葡辞書						●	●	○	○	○	●	●				●	●										●	●	●	●	●	●	●			●	●	●	●
烏帽子折			●								●									●																●			
当代記（日国）																																			□					
三河物語																																		●	●					
慶長古活字本太平記													□																											
元和三年板下学集											●																													
寛永版曽我物語（日国）								△																																
虎明本狂言集									△																															
満散利久佐					●																																			
廣瀬文庫版太平記						●							△	●					●	●	●	●	●	●		●	●											●	●
四天王女大力手捕軍（日国）																									□															
前太平記										△								●							●												●		●
武家義理物語									△																															
釈迦の御本地																																								●
嫗山姥													●																								●	●	
艶狩剣本地				●																																				
書言字考節用集											●																		●							●			
けいせい伝受紙子																●																								
柳多留（日国）															□																									
椿説弓張月								●																												●			
和英語林集成（初版）						○			●		●																			●						●			●
和英語林集成（再版）						○			●		●																			●						●		●	●
和英語林集成（三版）	○					○			○	○	●																			●						●		●	●
日本大辞書										○																											●		
福翁自伝															●																								
こゝろ																																					●		
夜明け前															●																								
ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典	○				○			●	●	●	●				●		●																			●	●	●	●
現代語（参考）	○				○				●	●					●					●																		●	

注：　□　音表記なし、清濁不明　　△　音表記あり、清濁不明　　○　音表記あり、清音　　●　音表記あり、濁音

以下で５節より、「～勢」の語彙の特徴、そして連濁する傾向をもとに、時代に分けて、それぞれの時代における「～勢」の連濁条件を探る。

５．平安時代の「～勢」の連濁

本章 4-1 で述べたように、二字漢語の「～勢」は平安時代には文献に出現していたとみられる。

地勢『続日本紀』天平九年・四月戊午　有勢『続日本紀』天平一四年・一二月戊子　権勢『家伝』上

山勢『凌雲集』奉和江亭晩興呈左神栄清藤将軍　水勢『菅家文草』七・左相撲司標所記

国勢『東寺百合文書』せ・天禄四年九月一日・東寺伝法洪家牒　波勢『本朝麗藻』下・与諸文友泛船於宇治川聊以道遥

風勢『本朝文粋』一三・請修餝美福門額字告弘法大師文　威勢『百座法談』　軍勢『今昔物語集』二五・九

この時代には濁音と判別できる資料は少ないが、後代の連濁状況（6-1 を参照）より、この時代の二字漢語の「～勢」は鼻音の前接によって「軍勢」「権勢」「山勢」は連濁していた可能性があるとみられる（第ｉ段階）。

６．鎌倉・室町時代の「～勢」の連濁

6-1　漢語前接の場合

鎌倉・室町時代には、また新たに以下の漢語前接の「～勢」が文献に出現したとみられる（以下●が付いた語は文献に濁音形で出現するものである）。

●諸軍勢『日葡辞書』　一番勢『史記抄』　二番勢『毛詩抄』九

●番勢『日葡辞書』　●動勢『日葡辞書』　●猛勢『日葡辞書』　●敵勢『日葡辞書』

小勢延慶本『平家物語』九・河原合戦　無勢延慶本『平家物語』六・祈園女御　余勢延慶本『平家物語』五・奈良炎上

義勢『吾妻鏡』建暦三年・五月二日　勢勢『愚管抄』五・二条　眼勢『保元物語』下・為朝鬼が島に

多勢『平治物語』上・六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事　形勢『古事談』一・宇多法皇被抱御腰于源融霊給事

音勢『古今著聞集』一二・四二八　難勢『私聚百因縁集』八・六　人にん勢『名語記』五

武勢『源平盛衰記』一三・高倉宮鳴呼廻宣　挟勢『空華日用工夫略集』応安四年一月一五日

奥勢慶長古活字本『太平記』一九・奥州国司顕家卿上洛　京勢慶長古活字本『太平記』二五・藤井寺合戦事

両勢慶長古活字本『太平記』八・持明院殿行幸六波羅事　大勢慶長古活字本『太平記』一二・公家一統政道事

見勢『遊楽習道風見』　兵勢『文明本節用集』三二５　語勢『史記抄』一七・滑稽列伝　文勢『史記抄』三・史記集解序

加勢『応仁記』三・近江越前軍之事　字勢『山谷抄』八　群勢『政基公旅引付』文亀元年・八月一五日

気勢『玉塵抄』九　強ごう勢『易林本節用集』七八２

以下に挙げるように、『日葡辞書』では、漢語前接の「～勢」の連濁語は基本的に鼻音前接のある場合に現れている。

●Gunjei 軍勢　●Xogunjei 諸軍勢　●Banjei 番勢　●†Dôjei 動勢　●Mŏjei 猛勢

●†Teqijei 敵勢

Ixei 威勢　Taixei 大勢　†Cŏxei/Gŏxei 強勢　‡Xôxei 小勢　Caxei 加勢　Guixei 義勢

Yacuxei 薬勢　Taxei 多勢　Buxei 無勢　Maxei 魔勢　Yoxei 余勢　Xoxei 諸勢　Qenxei 権勢

この中で「敵勢」は鼻音が前接していないのに濁音形で現れており、第ｉ段階の例外となる。何故「敵勢」は濁音形で現れたのだろうか。

語種からみると「敵テキ」はもともと漢語に属する。一方で以下のように「敵」は室町時代において既に単独でも使えた。

・アル　トキ　リンゴク　ヨリ　teqiga オコッテ『天草版平家物語』51

また「敵」の訓読語として「かたき」があるが、『日葡辞書』では「かたき」の項目に「Voyano cataqi 親のかたき親を殺した敵」「Cataqiuo toru かたきを取るある人を、自分が殺すべき不倶戴天の敵だときめる」が挙げられているように、「かたき」は単純に「敵」「味方ではない」の意味ではなく、「とある事情から非常に憎い相手」の意味で使われているのである。そのため「かたき」は漢語「敵」に対応していないと考えられる。更に「敵」の対義語「みかた」は和語である。これらの事情から、「敵」は和語扱いされているのではないかと考えられる。「肉ニク」「菊キク」など一字漢語が和語扱いされる過程にはまだ不明な点が多いが、これらと同じように「敵テキ」も和語扱いされたのではなかろうか。「～勢」に和語扱いされた「敵」を前接したため、以下 6-2 で述べる和語前接の「～勢」のように連濁したと考えられる。

6-2　和語前接の場合

一方で、4-1 で述べたように、和語前接の「～勢」は平安末・鎌倉初期頃には文献に出現してくる。

●こ勢『日葡辞書』　●て勢『日葡辞書』　●ゆ勢『日葡辞書』　●ゆん勢『日葡辞書』　●よ勢『日葡辞書』
●おお勢『日葡辞書』　●さき勢『日葡辞書』　●ひき勢『日葡辞書』　●すけ勢『日葡辞書』
●ふせ勢『日葡辞書』　●みせ勢『日葡辞書』　●おさえ勢『日葡辞書』　●かたらい勢『日葡辞書』
そい勢『政基公旅引付』永正元年・四月五日　かみ勢『三木』　うま勢慶長古活字本『太平記』二六・四条縄手合戦事
くに勢慶長古活字本『太平記』二二・義助朝臣病死事　つき勢慶長古活字本『太平記』三・桜山自害事
たばかり勢慶長古活字本『太平記』二六・四条縄手合戦事　とりあつめ勢慶長古活字本『太平記』三六・清氏叛逆事
もよおし勢慶長古活字本『太平記』一四・官軍引退箱根事　うき勢慶長古活字本『太平記』三六・山名伊豆守落美作城事

『日葡辞書』では、和語前接の「～勢」は以下のように全部連濁している。

Cojei 小勢 Tejei 手勢 Yujei 弓勢 Yunjei 弓勢 Yojei 夜勢 Vôjei 大勢 Saqijei 先勢
Fiqijei 引勢 ‡Suqejei 助勢 †Fuxejei 伏勢 †Mixejei 見せ勢 ‡Vosayejei 押さえ勢
Cataraijei 語らい勢

資料性格上の事情もあり、和語前接の「～勢」は全て濁音形で確認できてはいないが、清濁の判別ができる『日葡辞書』では和語前接の「～勢」は全て連濁していることから、鎌倉・室町時代の和語前接の「～勢」は連濁していたのではないかと考えられる。和語が前接すると連濁が起こるという現象は、「～勢」のほかに、第１章６節で述べた「ウイザン初産」「アトザン後産」の「～産」にもみられる（第ⅱ段階）。

6-3 「～ゼイ勢」の「類別」用法の発生と拡大

4-2 でも述べたように、鎌倉・室町時代の「勢」は自立語としても使われ、当時自立語の「勢」には「勢い」（勢力）と「兵隊」（軍勢）の二通りの意味があった。

一方で『日葡辞書』によると当時、和語前接の「～勢」は、ほとんどが「ゼイ」と発音され、《兵隊》で使われていることが分かる。

・Tejei（手勢）自分の配下の兵士や軍勢.
・Yojei（夜勢）夜，敵を急襲するために行く軍勢. Yojeiuo facobu（夜勢を運ぶ）夜襲などをするために，その軍勢を派遣する.
・Saqijei（先勢）前衛の軍勢.
・Fiqijei（引勢）退却して行く軍勢，または，引きさがって行く軍勢.
・‡Suqejei（助勢）援軍.
・†Fuxejei（伏勢）敵に攻めかかるために，待ち伏せをしたりして隠れている軍勢.
・†Mixejei（見せ勢）戦争の際にわざと敵に見せつける軍勢.
・‡Vosayejei（押さへ勢）敵を押しとどめたり，敵を山路とか隘路とかへ通さないようにしたりするために，ある場所に配備された軍勢や兵士ども.
・Cataraijei（語らひ勢）援助，または，救助の軍勢.
・Cojei（小勢）少人数.
・Vôjei（大勢）たくさんの人々. ▶ Caqeyaburi,ru;Fiqitachi,u.
・Yunjei（弓勢）Yumino iqiuoi.（弓の勢）弓の射手の力，または，弓の力. ▶Yujei.
・Yujei（弓勢）Yumino chicara.（弓の力）人が持っている，弓の弦を引っ張る力. ▶Yunjei

但し「ユンゼイ」「ユゼイ」弓勢は例外である。「ユンゼイ」の確例は室町末期には用例がみられる[6]。「ユンゼイ」は連濁しているが、以下の用例のように《弓の兵隊》ではなく《弓の勢い》で使われていることが分かる。

・菩薩ハ位ガマシテ吾ガ悟ルバカリデモナク、人ヲモヲスエテ悟ラスルユンゼイガアルゾ『詩学大成抄』九
・カホドノ大キナルバケ物、一スヂトヲルヤニイタミホロビケル、ユンゼイノホドコソユヽシケレ『詩学大成抄』九

「ユンゼイ」は前部要素「ユミ」に撥音便が生じて「ユン」となっている。奥村(1952)は「飛びて」が「飛んで」になる例を挙げ、「鼻音と連濁との関係は、漢語の場合に留まらず、非常に一般的な法則性だった」と指摘している。つまり「ユミ」に撥音便が生じ「ユン」となったときに連濁を起こしたが、これは前述した漢語前接の場合の「～勢」と同じく、鼻音の前接によって連濁しているのではないかと思われる。

また、「こ勢」「おお勢」については『日葡辞書』では《人数》であると書かれている。この場合は、《兵隊》と同じように《人の集合体》を指しており、《勢い（勢力)》の意味とは異なると思われる。

こうして濁音形「～ゼイ」には兵隊という集合体を分類するという用法が徐々に形成したと思われる。前接部に兵隊をどのように分類するかを限定する語がきて、和語前接の「～ゼイ勢」は鎌倉・室町時代において多数現れた。本稿では以下で、ある集合体を分類することを「類別」とよぶことにする。「～ゼイ勢」の場合は、兵隊という集合体を「類別」するのに使われている。詳細は後述するが、「類別」用法が出来たこの時期より、濁音形「～ゼイ勢」は接尾辞へと移行していくと考えられる。

「～ゼイ勢」のような「類別」表現は現代語に多数みられる。「類別」表現については、また本論第４章２節で詳しく述べることにする（第ⅲ段階)。

７．江戸時代の「～ゼイ勢」の「類別」用法

江戸期に入り、以下のような「～勢」が文献に出現した。

●関東勢『烏帽子折』52 オ　●越後勢廣瀬文庫版『太平記』目録
●坂東勢廣瀬文庫版『太平記』一四・官軍箱根を引しのぞく事　●奥州勢廣瀬文庫版『太平記』一五・表題

[6] これに対して「ユゼイ」は最初に文献に確認できたのは『日葡辞書』で、「ユンゼイ」より出現時期が遅れている。この事情を考えると、おそらく「ユンゼイ」が連濁したのち、撥音が脱落して「ユゼイ」が出来た可能性が高いとみられる。

●東国勢廣瀬文庫版『太平記』七・先帝船の上臨幸の事　●六波羅勢廣瀬文庫版『太平記』三・主上御夢の事付楠が事

●筑紫つくし勢廣瀬文庫版『太平記』一六・正成兵庫に下向の事　●下向勢廣瀬文庫版『太平記』一七・表題

西国勢廣瀬文庫版『太平記』一六・新田殿兵庫を引かるゝ事　浅倉勢『前太平記』巻七

●多勢『和英語林集成』(初版)[7]　●同勢『けいせい伝授紙子』一・三　助じょ勢『太閤記』二一・八物語巻中・要道

作勢『醒睡笑』七　碁勢『鷹筑波』五　能勢『四座役者目録』下　事勢『翁問答』下・本

腎勢『私可多咄』五・三四　分勢『四天王女大力手捕軍』六　観勢『念仏往生記』四

句勢『浪化宛去来書簡』元禄七年・五月一三日　論勢『去来抄』修行　虚勢『箚録』　盛勢『集義外書』三

微勢『読史余論』二・源頼朝父子三代の事　勇勢『国姓爺明朝太平記』五　我勢『児源氏道中軍記』二

病勢『隣語大方』四　栄勢『志津の岩屋講本』　岸勢『頼山陽詩集』十二・下筑後河　火勢『江戸繁昌記』初・火場

金こん勢『柳多留』一二二　総勢『柳多留』一二三　潮勢『山陽詩鈔』三・壇浦行　理勢『慎機論』

渓勢『篁園全集』一・冬日遊覧分得三肴　運勢『和英語林集成』(初版)

●おち勢『三河物語』一　●あと勢『三河物語』三　●みやこ勢『前太平記』巻八

●やまと勢廣瀬文庫版『太平記』三・笠置軍の事付陶山小見山夜討の事

●かまくら勢廣瀬文庫版『太平記』一四・やはぎさぎ坂手越河原たゝかひの事

●ちば勢廣瀬文庫版『太平記』一五・三井寺合戦并当寺撞鐘の事付俵藤太が事

あつめ勢『信長記』六・大づくの城開退く事　たのみ勢『信長記』一上・三川の国小豆坂合戦の事

たすけ勢『信長記』一〇・羽柴筑前守ひでよし卿播州拝領の事

よりあい勢『太閤記』四・前田又左衛門尉利家末森之城後攻之事　ふせぎ勢『里見九代記』

あつまり勢『木曽物語』二　みつぎ勢『播州佐用軍記』上・七・上月城を捕囲事　つれ勢『新田老談記』

かくし勢『四天王最後』四　つくり勢『渡辺綱三田合戦』　よせ勢『天満千句』一〇　かり勢『鎌倉袖日記』三

かけつけ勢『武家名目抄』軍陣部・駆付勢　みず勢『月欠皿恋路宵闇』大詰

上掲の語例には、特に漢語前接の「～勢」で鼻音の後でなくても濁音形で現れる場合が

---

[7] 二字漢語の「大勢」「多勢」「無勢」については、前代の『日葡辞書』では清音「Taixei」「Taxei」「Buxei」で現れていたが、江戸後期になると濁音になる動きがみられる。

・再て討手の大勢（たいぜい）を向られなば、いかにし脱れ給はん『椿説弓張月』続・四〇四

・Ta-zei, タゼイ, 多勢, (ōzei) n. A large army, or crowd of men『和英語林集成』(初版)

「大勢」「多勢」が濁音形で現れるのは、同じ意味の和語前接の「おお勢」からの影響ではなかろうか。「オオゼイ」の前接部を音読みにして「タイゼイ大勢」または「タゼイ多勢」になる。また「多勢に無勢」という言い方は以下で示すように、中世より文献に出現していた。

・防ぎ戦ふと雖も、多勢に無勢、叶ふべしとも見えざりけり流布本『平家物語』六・洲俣合戦

但しキリシタン資料によると、当時は清音「タセイニブセイ」であった。

・ムカシガ　イマニ　イタル　マデ　taxeini buxeiua カナワヌ『ロドリゲス日本大文典』

「無勢」が清音である状態は近代まで続き、『和英語林集成』(三版) では清音「Busei」であり、また濁点が多く施されている 1895 年の『日本大辞書』にも清音「ぶせい」で現れている。しかし現代では「無勢」は濁音「ブゼイ」となっているため、「無勢」が濁音になるのは「多勢」より遅れ、20 世紀頃以降だとみられる。慣用句「多勢に無勢」の影響で、江戸後期に「多勢」が濁音化するにつれ、「多勢」とペアで現れる「無勢」も現代で濁音形で現れるようになったと考えられる。

更に増えたことが目立つ。その用例は以下のとおりである。

・東国勢（とうごくぜい）百万余騎にて上洛し廣瀬文庫版『太平記』七・先帝船の上臨幸の事
・奥州勢（あうしうぜい）坂本につく事廣瀬文庫版『太平記』一五・表題
・新田義貞むほんの事付天狗催越後勢（ゑちごぜい）事廣瀬文庫版『太平記』目録

因みに、慶長古活字本の『太平記』には既に漢字表記の「東国勢」「奥州勢」「越後勢」がみられる。これが、廣瀬文庫版『太平記』には上掲のように濁音形「トウゴクゼイ」「アウシウゼイ」「ヱチゴゼイ」で現れている。

ではなぜ鼻音の前接がないにもかかわらず「東国勢」「奥州勢」「越後勢」などは濁音形で現れたのだろうか。

6-3 で述べたように室町期まで、和語前接の「～勢」は兵隊を「類別」する用法をもっていた。江戸時代になり、「～ゼイ$_{勢}$」の「類別」用法は漢語前接の「～勢」にも拡がったのではかなろうか。上掲の「東国勢」「奥州勢」「越後勢」なども「東国の兵隊」「奥州の兵隊」「越後の兵隊」のように、兵隊を「類別」していると考えられる。「東国勢」「奥州勢」「越後勢」などは鼻音の前接がなくても、兵隊を「類別」する用法で使われているため、濁音形「～ゼイ$_{勢}$」で現れたと思われる。つまり、兵隊を「類別」する用法で使われていれば濁音形「～ゼイ$_{勢}$」をつければいい、といった前代に発生した用法は語彙的に拡大し、漢語をも受けるようになったといえる。こういった濁音形「～ゼイ$_{勢}$」は、他の語に後接してどのような兵隊かを「類別」するのに使われているため、実質上、一種の接尾辞と見なすことができるのではないかと考えられる。このような接尾辞は本論第１章で述べた「九州産」「長野産」など、産地を表す「～サン$_{産}$」に似ている。では「～ゼイ$_{勢}$」はどういう特徴をもつ接尾辞なのか。これについて、また本論第４章１節で詳しく記述する。

兵隊を「類別」する用法で使われる「～ゼイ$_{勢}$」は江戸期に大量に造語され、前掲した「東国勢」「奥州勢」「越後勢」以外にもまた以下のような例がみられる。

・関東勢（くはんとうぜい）を引ぐして御むかひがてら参宮の望にて『烏帽子折』52 オ
・六はらぜいうちまけぬと聞えければ廣瀬文庫版『太平記』三・主上御夢の事付楠が事
・是は大和勢（やまとぜい）にて候か廣瀬文庫版『太平記』三・笠置軍の事付陶山小見山夜討の事
・鎌（かま）くら勢（ぜい）みな川よりひがしに陣を取てゐけるが廣瀬文庫版『太平記』一四・やはぎさぎ坂手越河原たゝかひの事
・諸国のもよをし勢路次の軍に降人に出たりつる坂東勢（ばんどうぜい）廣瀬文庫版『太

平記』一四・官軍箱根を引しのぞく事

・今上りの千葉勢（ちばぜい）これを聞ゝて廣瀬文庫版『太平記』一五・三井寺合戦并当寺撞鐘の事付俵藤太が事

・たとひ尊氏つくし勢（ぜい）を率して上洛すとも廣瀬文庫版『太平記』一六・正成兵庫に下向の事

・あとにつゞけるくま野勢（のぜい）五百よ人、此矢二すじを見て廣瀬文庫版『太平記』一七・山門ぜめの事付日吉神託の事

・北国下向勢（げかうぜい）こゞへ死の事廣瀬文庫版『太平記』一七・表題

この時期より、接尾辞「～ゼイ勢」は前接部の語種の制限から解放され、兵隊を「類別」する語であれば和語（かまくら勢など）でも漢語（東国勢など）でも前接部にくるようになった（第ⅳ段階）。

８．近代以降の「～ゼイ勢」の「類別」用法

近代以降、以下のような「～勢」が文献に出現した。

北條勢『太陽』1917 年 5 号　仏帝勢『西洋事情』二・四　長州勢『福澤全集諸言』P67

信州勢『朝日新聞』1936. 7. 11 朝刊　関西勢『朝日新聞』1938. 1. 1 朝刊　東海勢『朝日新聞』1940. 2. 25 朝刊

嘉義勢『朝日新聞』1938. 7. 11 朝刊　ソ連勢『朝日新聞』1960. 1. 27 朝刊

米国勢『朝日新聞』1964. 10. 14 朝刊　韓国勢『朝日新聞』1964. 9. 24 夕刊

豪州勢『朝日新聞』1953. 1. 16 朝刊

均勢『泰西国法論』　戦勢『万国公法』三・二　賊勢『日誌字解』　情勢『新聞雑誌』二号・明治四年五月

時勢『安愚楽鍋』初　姿勢『新聞雑誌』六〇号・明治五年九月　伏勢『学問のすゝめ』三・一身独立して一国独立する事

辞勢『今昔較』上　衰勢『東京新繁昌記』三・新橋芸者　世勢『東京新繁昌記』三・新橋鉄道

党勢『文明論之概略』五・九　激勢『近世紀聞』六・二　体てい勢『近世紀聞』初・二　藩勢『近世紀聞』六・二

不勢『近世紀聞』九・一　砲勢『近世紀聞』三・三　雨勢『米欧回覧実記』一・一四　海勢『米欧回覧実記』一・三

概勢『米欧回覧実記』例言　流勢『米欧回覧実記』一・六　陣勢『五国対照兵語字書』　危勢『経国美談』後・一五

強きょう勢『経国美談』一・一〇　衆勢『経国美談』後・一二　勝勢『経国美談』後・二　内勢『経国美談』後・一

体たい勢『小学読本』一　商勢『当世商人気質』四・二　趨勢『薩長土肥』緒論　局勢『想実論』八

退勢『国文学読本緒論』二　家勢『ありのすさび』二　惰勢『消息』　去勢『風俗画報』二三三号・服飾門

常勢『一年有半』附録・経済界　球勢『最近野球術』内野篇・フワーストベース　現勢『比興詩を論ず』六

対勢『朝日新聞』1905. 6. 30 朝刊　優勢『吾輩は猫である』八　機勢『草枕』三

攻勢『雲は天才である』一　守勢『雲は天才である』一　隊勢『歩兵操典』第二七六　態勢『歩兵操典』第三四三

寡勢『李陵』一　潜勢『黄金伝説』　増勢『経済実相報告書』一　樹勢『帰郷』牡丹の家　敗勢『野火』一

弱勢『遅過ぎた日記』連合国人の認識不足・九月一八日　教勢『秘事法門』三　外勢『私のサハリン』
へろへろ勢『近世紀聞』一〇・一　おだわら勢『太陽』1917年5号　あしかが勢『太陽』1895年7号
いば勢『太陽』1925年13号　はしば勢『太陽』1909年1号　さとみ勢『太陽』1917年5号
にった勢『太陽』1901年4号　たけだ勢『太陽』1901年3号　かみがた勢『福翁自傳』329
あきた勢『朝日新聞』1934.8.17夕刊　にいがた勢『朝日新聞』1936.7.11朝刊
かごしま勢『朝日新聞』1936.7.13朝刊　あさひかわ勢『朝日新聞』1937.6.22朝刊
やまなし勢『朝日新聞』1937.6.27朝刊　みえ勢『朝日新聞』1937.7.3朝刊
しまね勢『朝日新聞』1938.1.1朝刊　ふくしま勢『朝日新聞』1938.6.27朝刊
さいたま勢『朝日新聞』1938.6.29朝刊　やまぐち勢『朝日新聞』1938.6.29朝刊
かがわ勢『朝日新聞』1939.6.21朝刊　わかやま勢『朝日新聞』1939.6.28朝刊
いわて勢『朝日新聞』1939.7.5朝刊　とっとり勢『朝日新聞』1940.7.4朝刊
よこはま勢『朝日新聞』1940.7.7朝刊　かながわ勢『朝日新聞』1940.8.2朝刊
ふくい勢『朝日新聞』1941.7.4朝刊　ながの勢『朝日新聞』1941.7.5朝刊
タイペイ勢『朝日新聞』1938.7.11朝刊　モンゴル勢『太陽』1895年3号　ローマ勢『太陽』1917年5号
インド勢『朝日新聞』1936.3.18夕刊　アメリカ勢『朝日新聞』1966.12.31朝刊
ドイツ勢『朝日新聞』1959.10.3朝刊

上掲語のうち、他の語に後接して使われる、つまり接尾辞「～勢」は現代で全部濁音形「～ゼイ勢」である。但し以下の用例のように、昭和初期より接尾辞「～ゼイ勢」は兵隊ではなく、ゲームや試合のチーム、つまり競技グループを「類別」する用法となった。

・関東勢の陣営暗し、早実敗れ去る『朝日新聞』1932.8.19夕刊
・前年全国の覇者岐阜商を繞る愛知、三重勢を迫撃『朝日新聞』1937.7.3朝刊
・オリムピック印度勢の大将　戦い迫って本国へ『朝日新聞』1936.3.18朝刊
・ドイツ勢、地力出そう　きょうから日独陸上東京大会『朝日新聞』1959.10.3朝刊

兵隊を「類別」する用法から、同じく勝負を競り合うことで兵隊に類似したものとして、競技グループを「類別」する用法となったと考えられる。

但しこの場合、前代の「ふせ勢」「みせ勢」などといった和語動詞連用形に接続する用法が消滅し、接尾辞「～ゼイ勢」は専ら「関東勢」「三重勢」などのような地域名、または「印度勢」「ドイツ勢」などのような国名などの固有名詞に付くようになった。何故このような現象が起きるのだろうか。

前述したように、接尾辞「～ゼイ勢」は鎌倉・室町時代に形成し、江戸期を経て大量の

「～ゼイ勢」の語彙が出来た。こうした接尾辞は語中において意味の中心を担わず、前接部に対して付属的な関係である。そのため、独立性が相対的に高く、事柄的意味をもつ名詞性成分には付きやすいが、独立性が相対的に低く、後部を修飾する関係にある形容詞性成分などには付きにくいのではないかと考えられる。

他の接尾辞の場合でも、例えば「～カ化」は「迅速化」「大型化」など、名詞性成分に付きやすい現象が観察される。また、詳しくは本論第３章で述べるが、接尾辞「～ボン本」の場合も、「中古本」「赤表紙本」は「チュウコボン」「アカビョウシボン」のように名詞性成分に付く場合は濁音形「～ボン」のままであるのに対して、形容詞性成分に付く場合の「ふる古本」「あか赤本」はもともと濁音形「フルボン」「アカボン」であったが、明治期になって「フルホン」「アカホン」のように清音化し、接尾辞「～ボン本」の類から追い出されている現象がみられる。

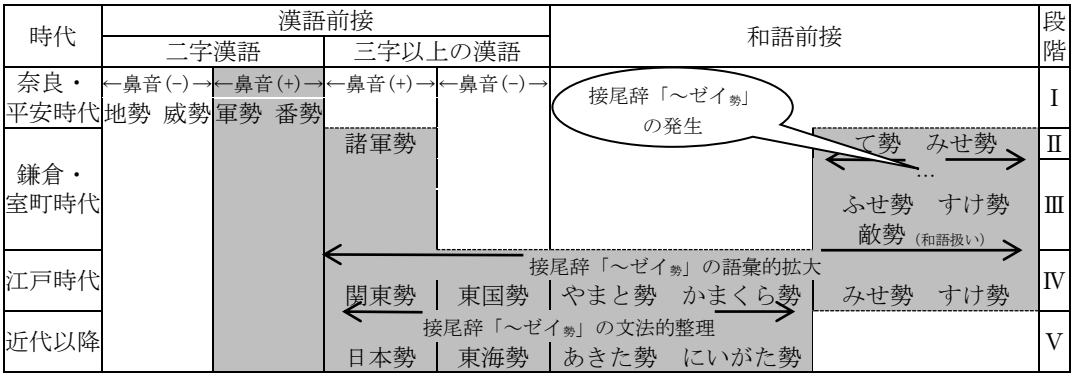
接尾辞「～ゼイ勢」の和語動詞連用形に接続する用法が消滅したのも上述の「～カ化」「～ボン本」と同じく、形容詞性成分によって修飾されにくいという、接尾辞のもつ特性が働いているのではなかろうか。和語動詞連用形に接続する「ふせ勢」「みせ勢」などは、前部要素「ふせ」「みせ」は「伏せておいた兵隊」「見せかけるための兵隊」のように、修飾成分として働いているため、名詞性成分ではなく形容詞性成分に近いと考えられる。そのため、「ふせ勢」「みせ勢」などは接尾辞「～ゼイ勢」にふさわしくないものとして追い出され、消滅したのではないかと思われる（第ｖ段階）。

９．まとめ

以上で「～勢」の連濁の史的変遷と接尾辞「～ゼイ勢」の発生と変遷について考察した。現代では二字漢語の「～勢」は基本的に連濁せず、和語前接の「～勢」は前代で連濁した「おお勢」などは濁音形のまま現代で残存しているといえる。また「～勢」の連濁とは別に、濁音形「～ゼイ勢」で地域名や国名などの固有名詞に後接し、競技グループを「類別」する、という接尾辞用法があると思われる。

このように考えると、「～勢」の連濁の史的変遷と接尾辞「～ゼイ勢」の発生と変遷については以下〈図 2〉にまとめることができる。

〈図 2〉



接尾辞「〜ゼイ勢」は鎌倉・室町時代の和語前接の場合に発生し、江戸期において語彙が拡大して、更に近代以降に兵隊の「類別」から競技グループの「類別」へと変り、また前接部も徐々に固有名詞に限られるように特化していき、現代の接尾辞「〜ゼイ勢」になったと思われる。接尾辞「〜ゼイ勢」が濁音形で現れるのは、鎌倉・室町時代に和語の前接により連濁した「〜ゼイ」から発生したからだとみられる。

第２章　調査文献

続日本紀／今昔物語集／虎明本狂言集／妙一本仮名書き法華経／古今著聞集／平治物語／保元物語／延慶本平家物語／文明本節用集／史記抄／毛詩抄／詩学大成抄／天草版平家物語／天草版伊曽保物語／玉塵抄／易林本節用集／慶長古活字本太平記／日葡辞書／元和三年板下学集／三河物語／釈迦の御本地／満散利久佐／廣瀬文庫版太平記／前太平記／武家義理物語／烏帽子折／けいせい伝受紙子／嫗山姥／桧狩剣本地／書言字考節用集／椿説弓張月／和英語林集成（初版）（再版）（三版）／朝日新聞／日本大辞書／太陽／福翁自伝／こゝろ／夜明け前／ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典

第３章　「～本」の連濁の史的変遷

１．先行研究

従来、複合語の後部に位置して「本ホン」が「浄瑠璃本ボン」のように連濁すると考えられてきた。そして連濁の共時的な条件を探ることに主眼がおかれてきた。

例えば、窪薗晴夫(2004)は「本ホン」の連濁にはモーラ数の条件が働いていると指摘している。語全体が４モーラ以下の場合は連濁せず(ミホン見本・フルホン古本など)、5 モーラ以上の場合は連濁する（ブンコボン文庫本・カラーボンカラー本など）というものである。しかし４モーラ以下の場合でも「ネコボン猫本」「エヴァボンエヴァ本」「コピボンコピ本」など、連濁する場合が多数みられる。

また奥村三雄(1984)などは、修飾関係では連濁しやすいと指摘している。「～本」の場合も、例えば「ジョウルリボン浄瑠璃本」「ブンコボン文庫本」「オオガタボン大型本」などは「浄瑠璃を内容とする本」「文庫判で出版された本」「大きめなサイズの本」のような意味を有しており、前接部と「本」の間で修飾関係を成している場合に連濁しやすい、との考えである。しかし修飾関係を成しているものでも「筆で書いた本」は「カキホン書き本」、大学入試問題集（表紙が赤いことから）は「アカホン赤本」など、連濁を起こさない例外もある。しかも詳しくは後述するが、この「書き本」「赤本」などは古く濁音形「カキボン」「アカボン」だったものが清音形へと変わったのである。こうした事象は修飾関係の観点では説明できない。

では現代において「～本」の連濁条件は何か。本章ではこの問題について「～本」の連濁の通時的考察を通して再検討する。

２．考察対象

序論で述べた調査方法で以下のような「～本」の語彙が集められ、考察対象とする。

悪本　安本　案本　異本　慰本　印本　院本　淫本　影本　会え本　円本
艶本　戒本　額本　禾本　華本　画本　刊本　完本　官本　監本　韓本
元がん本　贋本　奇本　帰本　起本　基本　偽本　脚本　旧本　教本　経本
曲本　祖本　見けん本　献本　絹本　顕本　元げん本　原本　広本　荒本　校本
絖本　稿本　藁本　講本　合ごう本　刻本　国本　古こ本　孤本　五本　御本
今本　根本　混本　材本　財本　三本　残本　槧本　七しち本　子本　四し本
私本　紙本　資本　地じ本　借本　写本　主本　手しゅ本　春本　小しょう本

正しょう本　抄本　証本　書しょ本　諸本　新本　素す本　数す本　図本　世せい本
正せい本　成本　製本　石本　施本　千本　選本　全本　善本　双本　宋本
草そう本　送本　装本　造本　蔵本　俗本　素そ本　大本　台本　拓本　他本
多だ本　駄本　地ち本　治本　着本　中本　注本　張本　勅本　珍本　通本
定本　底本　点本　伝本　唐本　搨本　謄本　藤本　同本　徳本　読とく本
二本　日に本　納本　農本　配本　白本　版本　翻はん本　秘本　尾本　美本
標本　副本　復本　複本　譜本　粉本　返本　邦本　坊本　木ぼく本　墨本
本本　梵本　無本　木もく本　模本　紋本　訳本　洋本　藍本　略本　臨本
類本　瑠本　零本　暦本　猥本　和本　話本
悪性本　一千本　易林本　求版本　古刊本　排印本　油印本　影印本　影写本
影抄本　影照本　鸚鵡本　怪談本　懐中本　家刻本　家塾本　活刻本　活字本
活版本　勧化本　巻子かんし本　巻子かんす本　稀覯本　義太夫本　貴重本
教訓本　狂言本　教則本　禁止本　巾箱本　稽古本　戯作本　芥子本　現行本
原刻本　限定本　見林本　後印本　光悦本　豪華本　合巻本　講釈本　好色本
行成こうぜい本　講談本　校訂本　高麗本　五行本　国字本　滑稽本　蒟蒻本
西鶴本　再刊本　再刻本　嵯峨本　冊子本　薩摩本　左翼本　三千本　慈海本
自書本　重刊本　重刻本　習字本　袖珍本　縮刷本　縮照本　手稿本　手識本
首書本　手沢本　初印本　上製本　小説本　掌中本　浄瑠璃本　初刻本
書写本　所蔵本　所伝本　初版本　署名本　新刊本　寸珍本　精選本　贅沢本
整版本　西洋本　石印本　絶版本　線装本　草子本　奏覧本　速記本　大字本
談義本　単行本　丹緑たんりょく本　丹緑たんろく本　朝鮮本　通行本　定家本
粘葉でっちょう本　殿中本　透写本　当世本　特製本　特価本　二階本　人情本
馬上本　八行本　発禁本　半紙本　筆彩本　風流本　複製本　付訓本　不足本
覆刻本　文庫本　平話本　坊刻本　翻刻本　本地本　翻訳本　饅頭本　無点本
木版本　模刻本　山口本　洋装本　落巻本　落紙本　療治本　流布本　廉価本
論議本　和刻本　和装本
あいづ本　あお本　あか本　あげ本　あしかが本　あとずり本　あぶらげ本
あまくさ本　いき本　いしうず本　いちかた本　いろずり本　いろ本
うかがい本　うきよえ本　うきよ本　うす本　うたい本　うづき本　うつし本
えいり本　えど本　えどり本　え本　おおうち本　おお本　おりべ本　おり本
かがり本　かきいれ本　かき本　かし本　かな本　かわち本　きよせ本
きんぴら本　くさ本　くろ本　こばなし本　こ本　した本　しばい本
しゃれ本　しらみ本　すみのくら本　すり本　するが本　そこ本　ぞっき本

その本　たなかざり本　たね本　ちりめん本　つぎ本　つつみ本　て本
としふさ本　とじ本　なおえ本　ながうた本　なき本　なぐさみ本　なみ本
ならえ本　なら本　なん本　ぬき本　ぬけ本　ね本　はした本　はなし本
はなれ本　は本　ひいな本　ひかえ本　ひらがな本　ふくざわ本
ふくろいり本　ふる本　まい本　まき本　まくら本　まさ本　ましゃ本
ますがた本　まな本　まめ本　まる本　まれ本　みくじ本　みせ本
みちゆき本　みつぎり本　みの本　み本　むかし本　むしくい本　むだ本
もと本　ものがたり本　やさか本　や本　やまぐち本　やり本　やわらか本
ゆか本　よことじ本　よこ本　よせ本　よつぎり本　よみ本　わらい本
エロ本　ビニール本　リプリント本
悪ちゃり本　唐紙ずり本　経いり本　真かき本　中がた本　点とり本
八文字や本　半ぎり本　饅頭や本　木版ずり本　洋とじ本
あい性本　あさのは表紙本　うえ字本
クロース装本

但し「一本」「合がっ本」「欠本」「根こっ本」「雑本」「日じっ本」「舌本」「千六せろっ本」「日にっ本」「抜ばっ本」「別本」のように、入声音・促音につづく「～本」の語例は連濁を起こさないものとして、考察対象から省いた。

３．用例の出現時期とその清濁

「～本」は近代まで濁音形で現れたのは「根本」「無根本」「張本」「張本人」「千本」「本本」「中本」「通本」「かな本」「かき本」「まき本」「なぐさみ本」「ひかえ本」「うえ字本」「うきよ本」「おおうち本」「はなし本」「きんぴら本」「あか本」「しゃれ本」「くろ本」「あお本」「こ本」「ながうた本」「くさ本」「むかし本」「ゆか本」「しばい本」「浄瑠璃本」「手沢本」「当世本」「狂言本」「活字本」「戯作本」「稽古本」「人情本」「袖珍本」「懐中本」「巾箱本」「小説本」「粘葉本」「滑稽本」「流布本」の 43 語である。

(1) 根本・無根本

「根本」は『日本霊異記』には出現している。使用された資料の底本は鎌倉時代のものではあるが、書写された内容は奈良時代の原本をある程度反映していると考えられる。「根本」は奈良時代に既に使われた可能性がある。

・三野ノ国ノ狐ノ直等ガ根本是レナリ『日本霊異記』上・二

『文明本節用集』にも「根本」が現れている。この用例は濁点が付けられているが、半濁音を示すものである可能性もある。

・根本（コンボン）『文明本節用集』六九一

次にキリシタン資料には「根本」は以下のように濁音形で現れている。「根本」は少なくとも室町末期には濁音で使われていたと思われる。

・ヨ　ノ　ミダレ　ソメタ　Conbon　ワ　スギシ　カワウニネンニ『天草版平家物語』一 14
・Conbon. コンボン（根本）Nemoto.（根本）根源，あるいは，始め．▶Mu〜『邦訳日葡辞書』

江戸時代にも以下のように「根本」は濁点が付けられた形で多数の文献に出現しているが、その実際の発音は濁音か半濁音だったと思われる。

・此五をこんぼんとして、じよのざいごうむりやう也『土井本太平記』三五・きたのつやものかたりのこと、つけたりあをとさゑもんか事
・後には様付てよぶ　よし野はこんぼんの事『好色一代男』五
・我が身もくるわを夜ぬけしてこんぼん戀路のうき名とる『嫗山姥』二

江戸末になると、『和英語林集成』（初版）には「根本」は半濁音形で現れてくる。江戸期において「根本」は濁音から半濁音へと変わったと考えられる。

・Kom-pon, コンポン, 根本, n. The origin, beginning; the place or cause from which any thing originates. Ayn. Moto, hajimari, sho-hotsz, kon-gen『和英語林集成』（初版）

現代でも「根本」は半濁音で使われている。このように、「根本」は古く濁音で使われていたが、江戸期に半濁音へと変わり、現代でも半濁音で使われている。

ところで「無根本」という語形もあった。『日葡辞書』には「無根本」は濁音形で現れている。

・Muconbon. ムコンボン（無根本）仏法語(Bup.). 根源のないこと『邦訳日葡辞書』

但しその後、「無根本」は文献に確認できなくなり、姿を消したと思われる。

(2) 張本・張本人

「張本」は『本朝文粋』には出現している。『本朝文粋』に使用した資料の底本は江戸時代のものであるが、内容は平安時代の原本をある程度反映しているのではないかと考えられる。「張本」は平安時代に既に使われた可能性がある。

・皆以二今日之善根一、将レ為二来世之張本一『本朝文粋』一三・為仁康上人修五時講願文

また『色葉字類抄』にも「張本」が出現し、濁音形が確認される。『色葉字類抄』に使用した資料の底本は後代の書写にかかるものだが、平安末期の状況をある程度反映しているのではないかと考えられる。「張本」は平安末期に既に濁音で使われた可能性がある。

・張本　流例分　チヤウボン三巻本『色葉字類抄』上チ[畳字]前田本 69 ウ 2

それ以降も「張本」は濁音形で多数の文献に確認される。但し現代では既に使われていない。

・カイゾク　ノ　Chŏbon　サンジュウニン　アマリ　カラメテ　シンゼラレタ　ヲンショウニ　シホンシテ『天草版平家物語』26
・Chŏbon. チャウボン（張本）頭（かしら），または，長．例，Areua mufonninnochŏbongia.（あれは謀叛人の張本ぢゃ）あの男は反逆者の首領であり、大将である．▶Nirami,u『邦訳日葡辞書』
・我はうらべのくまたけと申す山賊のちやうぼん『嫗山姥』四
・この人々は、ことさらむほんのちやうぼんなれば『土井本太平記』一・すけともとしもとくはんとうげかうの事、つけたり御つけふみのこと
・Chō-bōn ママ，チャウボン，張本，n. A ring leader. Tōzoku no -, chief of

banditti. - nin, a ring-leader, chief『和英語林集成』(初版)

・ちやう・ぼん((‥‥))〈呂注：前条「帳簿」((第一、二チヨ合))のこと〉(第四上)名。{(張本)} 漢語。(一)事ノ起コリ。(二)発頭人(悪事ニ)『日本大辞書』

ところで「張本人」については、最初に文献に確認できたのは『日葡辞書』で、濁音形で現れている。

・Chŏbonnin. チャウボンニン(張本人)同上〈呂注：「張本」の条のこと〉『邦訳日葡辞書』

その後の文献にも多数の濁音形が確認され、「張本人」は濁音で近代まで使われていたと思われる。

・張本人(チヤウボンニン)左傳注預為後地曰ーー『書言字考節用集』四 17

・Chō-bōn ママ, チャウボン, 張本, n. A ring leader. Tōzoku no -, chief of banditti. - nin, a ring-leader, chief『和英語林集成』(初版)

・ちやうぼん・にん((‥‥))〈呂注：前二条「帳簿」((第一、二チヨ合))のこと〉(‥‥)〈前条「張本」(第四上)のこと〉名。{‥‥人}〈呂注：前条「張本」のこと〉字音。発頭人(悪事ニ)。＝首謀『日本大辞書』

但し現代では「張本人」は以下のように清音に変わっている。

・張本人　チョウホ’ンニン　チョウホンニン『NHK日本語発音アクセント辞典』

このように、「張本」「張本人」は古くより近代まで濁音で使われていたが、現代では「張本」は使わなくなり、「張本人」は清音へと変わった。

(3) 千本

「千本」は『梁塵秘抄』には出現している。『梁塵秘抄』に使用した資料の底本は後代によるものではあるが、内容は平安末期の原本の状況を反映しているのではないかと考えられる。「千本」は平安末期には既に使われていた可能性がある。

・阿古也の聖が立てたりし千本の卒都婆『梁塵秘抄』二・四句神歌

キリシタン資料には「千本」は以下のように濁音形で現れている。「千本」は少なくとも室町末期には濁音で使われていたと思われる。

・Xenbon　ノ　ソトバ　ヲ　ツクッテ『天草版平家物語』一

江戸時代に入り、「千本」はまた以下のように濁点が付けられた形で現れているが、その濁点は半濁音を表している可能性もある。但し現代では「千本」は濁音で使われているため、「千本」は古くから濁音のまま現代まで使われてきた可能性が高いとみられる。

・ほそかはむつのかみあきうぢはせんぼんにしゆくしてゐたりけるか『土井本太平記』三〇・よしのとのとしやうこううりんと、御くはほくの事
・千賀（センガ）　一本（センボン）『書言字考節用集』一三・94

（4）本本

「本本」は『日本国語大辞典　第 2 版』によると、鎌倉時代の『皇字沙汰文』に出現している。

・故無違変之法、所謂元々本々左物不移右『皇字沙汰文』下（『日本国語大辞典　第 2 版』による）

「本本」はキリシタン資料にも現れ、濁音形が確認される。「本本」は少なくとも中世末期には濁音で使われていたとみられる。

・ハジメテ　fonbonni［呂注：本本に］　ソクタウタガ『天草版平家物語』207

江戸期に入り、「本本」はまた多数の文献に濁点が付けられた形で現われているが、その濁点は半濁音を表している可能性もある。

・本々（ほんぼん）の御奉公『佐々木先陣』三
・今はむかしのかたりぐさ、これがほん〲゛／のめうとじや『三筋緯客気植田』下

近代以降「本本」は文献に確認できなくなり、姿を消したと思われる。

(5) 中本

「中本」は最初に文献に確認できたのは江戸中期の『弁疑書目録』であるが、漢字表記のため、清濁は不明である。

・観音経絵鈔　三冊　中本『弁疑書目録』上

「中本」とみられる語は『日本国語大辞典　第 2 版』では江戸末期の人情本『糸柳』に濁音形で現れているとしているが、資料での確認ができておらず、その実際の清濁は不明である。

・然れども詳細に説き続けては、小説の如くなりて、人情本（チウボン）〈呂注：中本〉の得意に背く事となれば、只大略を記すのみ『糸柳』二・一一回（『日本国語大辞典　第 2 版』による）

その後、明治期の『日本大辞書』に「中本」は濁音形で現れている。「中本」は少なくとも明治期には濁音で使われていたと思われる。

・ちゆう・ぼん((‥‥))〈呂注：前八条目「重罰」((第一、二合))のこと〉（全平）名。{‥‥本}〈呂注：前条「中辨」の略〉字音。（一）小菊紙ニ摺リ、其大キサニ仕立テタ書物。（二）〔小菊紙ニ摺ル處カラ〕。人情本ノ異名。（三）半紙版ノ本『日本大辞書』

現代では「中本」は使わなくなり、姿を消したと思われる。

(6) 通本

「通本」は江戸後期の『青楼籬の花』に濁音形で出現しており、江戸後期において濁音で使われていたとみられる。

・はかないものがたりはこれまでの通本（つうぼん）にいくらもありて、めづらしからねば『青楼籬の花』前章

但しそれ以降の文献には現れておらず、姿を消したと思われる。

(7) かな本

「かな本」は平安時代の『後二条師通記』には出現している。

・又罷出参内、賀名本進上云々『後二条師通記』寛治四年・一二月一三日

江戸中期になって、「かな本」は以下のように濁音形が確認される。「かな本」は少なくとも江戸中期には濁音で使われていたと思われる。

・書物屋共の咄を聞けば、近年出来た仮名本（かなぼん）の中では『当風辻談義』四・辨財天宮古路を讃給ひし事

現代でも「かな本」は濁音形で使われているが、以下のように、清音で使われることもある。

・かな本、仮名本　カナボン　カナホン『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

このように、「かな本」は江戸中期には濁音で使われていたが、現代では清音も使われている。

（8）かき本

「かき本」は室町時代の『百丈清規抄』には出現しているが、漢字表記のため、清濁は不明である。

・モトワ板木ト云モノワナウテカキ本ハカリソ『百丈清規抄』一

その後、「かき本」は江戸前期の『諸艶大鑑』にも出現したが、濁点が付けられていないため、その実際の発音は清音か濁音か不明である。

・稀なる御筆者の書本（かきほん）、大竹集にてかたるぞかし『諸艶大鑑』七・勤の身は狼の切売よりは

但し、江戸中期の『弁疑書目録』には「かき本」は濁音で現れている。「かき本」は少なくとも江戸中期には濁音で使われていたと思われる。

・或ハ此ノ弁疑書目、所々ニ、亦カキボンヲ出ス『弁疑書目録』下

ところが明治期になり、「かき本」は『日本大辞書』に清音形で現れてきており、また現代でも清音で使われている。

・いん・ぽん（‥‥）〈呂注：前条「淫奔」（第一上）のこと〉名。｛(印本)｝　スベテ、版デスツタホン。（かきほんノ対）。＝ハンポン『日本大辞書』

このように、「かき本」は江戸中期に濁音で使われていたが、近代以降に清音化したと思われる。

(9) まき本

「まき本」とみられる用例は室町中期の『大乗院寺社雑事記』には出現している。

・仁王講本来ハ巻本ニハアラス、折本也『大乗院寺社雑事記』文正元年・四月晦日

室町後期になり、『運歩色葉集』に濁音形の「まき本」が確認される。「まき本」は少なくとも室町後期に濁音で使われていたと思われる。

・巻本（マキボン）『運歩色葉集』二三五２

それ以降の文献には「まき本」が出現することは確認できなかった。現代では「まき本」が古い書籍の体裁などに使う場合は濁音で使われることが多い。

(10) なぐさみ本

「なぐさみ本」は江戸前期の『西鶴織留』に濁音形で現れている。「なぐさみ本」は江戸前期には濁音で使われていたと思われる。

・春は慰（なぐさ）み本（ぼん）、夏は扇子、秋は踊道具、冬は紙子『西鶴織留』一・四・所は近江蚊屋女才覚

それ以降、文献に出現することは確認できなかった。

(11) ひかえ本

「ひかえ本」は江戸中期の『元祿大平記』には出現しているが、漢字表記のため、清濁は不明である。

・講談をきくためのひかえ本には、由的の首書よろしく候『元祿大平記』五・初学の為によい事をいふ

明治期になり、「ひかえ本」とみられる用例は濁音形で文献に現れた。「ひかえ本」は少なくとも明治期頃には濁音で使われていたと思われる。

・店主底冊（ヒカエボン）ヲ閲シ其時刻閑隙ニ当レバ諾シ『西洋聞見録』後・一

それ以降の文献には「ひかえ本」は確認できなかった。

(12) うえ字本

「うえ字本」は江戸中期の『弁疑書目録』に出現しているが、漢字表記のため、清濁は不明である。

・植字本、足利本、落巻本、落紙本、書写本等ニ至テハ『弁疑書目録』上

江戸後期になり、「うえ字本」とみられる用例は『浮世風呂』に濁音形で出現している。「うえ字本」は少なくとも江戸後期には濁音で使われていたと思われる。

・活字本（うゑじぼん）を求ましたから幸ひに異同を訂してをります『浮世風呂』三・下

それ以降の文献には「うえ字本」は確認できなかった。

(13) うきよ本

「うきよ本」は『日本国語大辞典　第２版』によると、江戸中期の『茶契福原雀』に出現している。

・今色さとのうわさおほくの咄につづりて浮世本の品々有といへ共『茶契福原雀』中

（『日本国語大辞典　第２版』による）

明治期の『日本大辞書』には「うきよ本」は濁音形で確認される。「うきよ本」は少なくとも明治期頃には濁音で使われていたと思われる。

・うきよ・ぼん（‥‥）〈呂注：前条「浮き世節」（第三上）のこと〉名。｛‥‥本｝〈呂注：前六条「浮き世」のこと〉ウキヨノコトヲ書キツヅツタモノガタリノホン。＝セウセツ。＝ハイシ『日本大辞書』

それ以降、「うきよ本」は文献に確認できなかった。

（14）おおうち本

「おおうち本」は『日本国語大辞典　第 2 版』によると、江戸中期の随筆『老人雑話』に出現している。

・大内介は西国一の大名なりし。周防の山口の城に居る。紙を大明へつかはし書物をすらせて取寄けり。今に至て山口本とも、大内本とも云『老人雑話』坤（『日本国語大辞典　第２版』による）

明治期の『日本大辞書』には「おおうち本」は濁音形で現われている。「おおうち本」は少なくとも明治期頃には濁音で使われていたと思われる。

・おほうち・ぼん（(‥‥)）〈呂注：前条「大内菱」（第二オ）のこと〉（全平）名。｛‥‥本｝〈呂注：前四条「大内」のこと〉書物ノ名。ムカシ周防ノ大内義隆ガ明国ニ紙ヲヤリ、摺ラセテ取リ寄セタ書物ノ称ヘ。今稀世ノ珍物トシテ尊ブ『日本大辞書』

それ以降の文献には「おおうち本」は確認できなかった。

（15）はなし本

「はなし本」は江戸中期の俳諧『鶯宿梅』に出現している。

・たのみける此戸守りを噺し本『鶯宿梅』

同じく江戸中期の文献で『御存商売物』には「はなし本」は濁音形で現れている。「はなし本」は江戸中期に濁音で使われていたと思われる。

・はなしぼんはあとにのこり、さま〳〵／のくちあひやぢぐちをいつて、みんなにはらをよらせる『御存商売物』上

それ以降、「はなし本」は文献に出現することは確認できなかった。

(16) きんぴら本

「きんぴら本」は江戸中期・後期の文献に現れ、濁音形が確認される。

・終に金平本（きんぴらぼん）一冊読だ事なきものも、よんで嬉しがったに『当風辻談義』四・辨財天宮古路を讃給ひし事
・むかし所謂金平本（きんぴらぼん）の作者、式亭三馬題『浮世床』二・序

それ以降の文献には「きんぴら本」が出現することは確認できなかった。

(17) あか本

「あか本」は江戸中期の俳諧『童の的』に出現している。

・赤本も足しに成もの鳴子引『童の的』一

同じく江戸中期の文献で『禁現大福帳』『御存商売物』には「あか本」は濁音形で現れ、また江戸後期の『浮世風呂』にも「あか本」は濁音形で出現している。「あか本」は江戸中期から後期にかけて濁音で使われていたと思われる。

・懐紙摺もの赤本（あかぼん）の類其外児らしき品を得たるときは悦ぶ躰をあらはき『禁現大福帳』三
・あかぼんくろぼんといへば、ぢごくのおにだとおもふか『御存商売物』二・ウ
・私どもの幼少な時分は、ねずみの嫁入や、むかし咄の赤本（あかぼん）が此上なしてございました『浮世風呂』二・上

ところが明治期に入ると、「あか本」は『日本大辞書』に清音形で現れてきて、今

でも「あか本」は清音形で使われている。

・あか・ほん（全平）名。{赤本}〔近古ノ草双紙ノ表紙ノ赤カッタトコロカラ〕クサザウシノ異名『日本大辞書』
・赤本　アカホン『ＮＨＫ発音日本語アクセント辞典』

このように「あか本」は江戸中期から後期にかけて濁音で使われていたが、近代以降に清音へと変わったと思われる。

（18）しゃれ本

「しゃれ本」は江戸中期の『傾城買指南所』に濁音形で現れている。

・近来出来る似山の洒落本（しやれぼん）のたぐひじやござらぬ『傾城買指南所』叙

それ以外にも、江戸中期・後期の文献には多数の「しゃれ本」が濁音形で確認される。

・ことにしゃれぼんなぞといふたわひもなきもおののために、世をせばめられ『御存商売物』二・オ
・必しも洒落本（しやれぼん）とおなじく評し給ふことなかれ『春色梅児誉美』二・第三齣
・仇さんはしゃれ本（ぼん）を直にやらかして、楽しんだり苦しんだりして居るのに、草双紙のはなしなんぞは耳へはいるものか『春色辰巳園』初・五回

現代でも「しゃれ本」は基本的に濁音で使われているといえる。但し、中央公論社が出している『洒落本大成』が「しゃれほんたいせい」のように、「洒落本」は現代で清音で使われる場合もある。

（19）くろ本

「くろ本」は江戸中期の『御存商売物』に濁音形で現れている。「くろ本」は少なくとも江戸中期には濁音で使われていたと思われる。

・あかぼんくろぼんといへば、ぢごくのおにだとおもふか『御存商売物』二・ウ

ところが明治期に入ると、「くろ本」は『日本大辞書』に清音形で現れてくる。

・くろ・ほん（全平）名。{‥‥本}〈呂注：前条「黒牡丹」のこと〉あかほんノ類。昔シ天保、文化ノ頃、発行ニナツタ草双紙ノ一種。表紙ヲ黒ニシタモノ『日本大辞書』

このように「くろ本」は江戸中期には濁音で使われていたが、近代以降に清音に変わったと思われる。

（20）あお本

「あお本」も上述した「くろ本」と同じく、江戸中期の『御存商売物』に濁音形で現われている。「あお本」は少なくとも江戸中期には濁音で使われていたと思われる。

・どうぞして、あをぼんその外の地ほんにけちをつけんとはかる『御存商売物』二・オ

ところが、明治期に入ると「あお本」は『日本大辞書』に清音形で現れてくる。

・あを-ほん　青本（名）ゑざうし（絵双紙）を見よ『大日本国語辞典』

このように、「あお本」も江戸中期には濁音で使われていたが、近代以降に清音に変わったと思われる。

（21）こ本

「こ本」とみられる用例も江戸中期の『御存商売物』に濁音形で出現している。「こ本」は少なくとも江戸中期には濁音で使われていたと思われる。

・くろぼんがむすこの小ぼん夜泣きをしてならぬゆへだます『御存商売物』上

ところが明治期になると、「こ本」は『日本大辞書』に清音形で現れてくる。

・こ・ほん（全平）名。⊙｛小本｝小サナ書物『日本大辞書』

「こ本」は江戸中期には濁音で使われていたが、近代以降に清音化したと思われる。

(22) ながうた本

「ながうた本」も江戸中期の『御存商売物』に濁音形で現れている。

・ながうたぼん・義太夫のぬきほん・さいしばひあふむせきなぞをよび、いつぱひにもてる『御存商売物』中

それ以降、「ながうた本」は文献に確認できなかった。

(23) くさ本

「くさ本」は江戸中期の『啌多雁取帳』に出現しているが、濁点が付けられておらず、その実際の清濁は不明である。

・雁が飛べば石亀のじたんだと言ふごとく、つひに艸本（くさほん）の作はなさねども、蔦十が趣向を咄すに任せ『啌多雁取帳』叙

明治期になり、『柳橋新誌』にも「くさ本」とみられる用例が現れ、濁音形が確認される。「くさ本」は少なくとも明治期には濁音で使われていたとみられる。

・余れ稗史注 クサボンを読むに往時の名妓、奴と私する者頗る多し『柳橋新誌』初

それ以降の文献には「くさ本」は確認できなかった。

(24) むかし本

「むかし本」は江戸後期の『浮世風呂』に濁音形で出現している。「むかし本」は少なくとも江戸後期には濁音で使われていたと思われる。

・宇治拾遺をはじめとして、其外の昔本（むかしぼん）に、能う書記てある物ぢや『浮世風呂』四・中

それ以降の文献には「むかし本」は確認できなかった。

（25）ゆか本

「ゆか本」は同じく『浮世風呂』に濁音形で現れている。少なくとも江戸後期には「ゆか本」は濁音で使われていたと思われる。

・あれで床本（ゆかぼん）を大騒に書せて持居るがをかしい『浮世風呂』三・下

それ以降の文献には「ゆか本」は確認できなかった。

（26）しばい本

「しばい本」とみられる用例は明治期の『西国立志編』に濁音形で現れている。「しばい本」は少なくとも明治期頃には濁音で使われていたと思われる。

・ソノ著ハストコロノ書、小説アリ、詩アリ、戯曲注 シバヰボンアリ、史類アリ『西国立志編』一・三〇

それ以降の文献には「しばい本」は確認できなかった。

（27）浄瑠璃本

「浄瑠璃本」は江戸前期の『好色一代男』には出現しているが、漢字表記のため、その清濁は不明である。

・手枕して煎じ茶がぶがぶ呑尽し、あくびしてはあがり、おりては浄瑠璃本など読『好色一代男』五・五

但し同じ頃の『諸艶大鑑』には「浄瑠璃本」が濁音形で現れていることが確認される。「浄瑠璃本」は江戸初期には濁音で使われていたと考えられる。

・道行づくしの浄瑠利本（じやうるりぼん）、皮付の大楊枝、喜三郎が琢砂をたしなみ『諸艶大鑑』11ウ

現代でも「浄瑠璃本」は濁音で使われている。

・浄瑠璃本　ジョールリボン『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

「浄瑠璃本」は江戸前期に濁音で使われ、また現代でも濁音で使われている。「浄瑠璃本」は江戸前期から濁音のまま現代まで使われてきた可能性が高いとみられる。

（28）手沢本

「手沢本」は江戸中期の随筆『蘐園雑話』には出現している。

・訳筌示蒙は分けずにとぢ、示蒙の方は先にある由。手沢本訳筌は板刻の本同じことなり『蘐園雑話』

近代以降、「手沢本」は大正期の『渋江抽斎』に濁音形で出現した。「手沢本」は少なくとも大正期頃には濁音で使われていたと思われる。

・抽斎遺す所の手沢本（しゅたくぼん）には、往往欄外書のあるものを見る『渋江抽斎』五五

それ以降、「手沢本」が文献に出現することは確認なかった。

（29）当世本

「当世本」は『日本国語大辞典　第 2 版』によると、江戸中期の『興談浮世袋』に出現している。

・幾らも世上の当世本に出て、古めかしけれど『興談浮世袋』一・大黒恵比須草摺引の事（『日本国語大辞典　第 2 版』による）

同じ頃の『御存商売物』には「当世本」は濁音形で現れている。少なくとも江戸中期には「当世本」は濁音で使われていたと思われる。

・つきなみのくわいをもようし、しやれぼん・袋ざし・壹まいずりそのほかのとうせひぼんをあつめ『御存商売物』上

それ以降の文献には「当世本」は確認できなかった。

（30）狂言本

「狂言本」は江戸中期の『役者論語』に出現している。

・狂言本とてくわしく書事は、金子一高よりはじまりける也『役者論語』続耳塵集

同じ頃の『御存商売物』にも「狂言本」とみられる用例が出現し、濁点が付されているのが確認される。但し、この濁点は半濁音を表している可能性もある。「狂言本」は江戸中期には濁音か半濁音で使われていたと思われる。

・もしへ、子どものきやうげんぼんをおよびなんし『御存商売物』中

それ以降の文献には「狂言本」は確認できなかったが、現代では「狂言本」は濁音で使われている。

（31）活字本

「活字本」は江戸中後期の『好古日録』に出現している。

・御厨子所預ノ家所蔵ノ水鏡、活字本也『好古日録』一九

現代では「活字本」は濁音で使われている。

・活字本　カツジボン『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

（32）戯作本

「戯作本」は江戸後期の『浮世風呂』に濁音形で出現している。江戸後期には「戯作本」は濁音で使われていたと思われる。

・戯作本（けさくぼん）には語路の能く廻つた地口はおかしくないゆゑ用ぬ『浮世風呂』四・上

それ以降の文献には「戯作本」は確認できなかった。

(33) 稽古本

「稽古本」とみられる用例は江戸後期の『浮世床』に出現しているが、漢字表記のため、その清濁は不明である。

・けいこ本のところどころへ〇や△や、いろいろな切かけをして覚たといふ奴だ『浮世床』初・上

近代以降、濁音形の「稽古本」が『日本大辞書』『門三味線』に確認され、現代でも「稽古本」は濁音で使われている。「稽古本」は少なくとも近代以降は濁音で使われてきたと思われる。

・けいこ・ぼん（第三上）名。{‥‥本}〈呂注：前条「稽古袴」のこと〉稽古ニ用井ル書物（オモニ音曲ニ）『日本大辞書』
・『忍夜恋曲者』、けい古本（こぼん）手に持ちて別々に床に上れど『門三味線』一　九
・けいこ本　ケイコボン『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

(34) 人情本

「人情本」は『日本国語大辞典　第 2 版』によると、江戸後期の『婦女今川』に出現している。

・こりやアただのしやれ本同様な人情本だ『婦女今川』(『日本国語大辞典　第 2 版』より)

近代以降、「人情本」は濁音形で文献に出現しており、現代でも「人情本」は濁音で使われている。「人情本」は少なくとも近代以降は濁音で使われてきたと思われる。

・人情本（にんじやうぼん）上中下、下宿屋の書出しを挿はさめるは『当世書生気質』三
・にんじやう・ぼん（(‥‥)）〈呂注：前条「人情」((第三、ジョ合))のこと〉（第三、四上）名。{人情本}字音。主ニ男女ノ痴情ヲ記シタ書物。＝中本『日本大辞書』
・人情本　ニンジョーボン『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

(35) 袖珍本

「袖珍本」は江戸後期の『甲子夜話』に出現しているが、漢字表記のため、その

清濁は不明である。

・巾箱本・袖珍本の事を本邦にて馬上本と唱へしよし、五山釈家の文にて見しと近藤重蔵物語なり『甲子夜話』二〇

近代以降、「袖珍本」は『新聞語辞典』に濁音形で確認される。「袖珍本」は少なくとも近代以降は濁音で使われていると思われる。

・袖珍本（しゅうちんぼん）『新聞語辞典』

（36）巾箱本

「巾箱本」も江戸後期の『甲子夜話』出現しているが、漢字表記のため、清濁は不明である。

・巾箱本・袖珍本の事を本邦にて馬上本と唱へしよし、五山釈家の文にて見しと近藤重蔵物語なり『甲子夜話』二〇

明治期には「巾箱本」は『布令必用新撰字引』に濁音形で現れている。「巾箱本」は少なくとも明治期には濁音で使われていたと思われる。

・巾箱本　キンサウボン　チヒサナホン『布令必用新撰字引』

（37）小説本

「小説本」は明治期の『和英語林集成』（三版）に現れ、濁音形が確認される。

・Shōsetsu セウセツ 小説 n. A story, novel, fiction: - bon, a story-book『和英語林集成』（三版）

また、『暗夜行路』（底本が昭和十八年本の復刻本）にも「小説本」が濁音形で現れている。

・持って来た小説本（せうせつぼん）を読み始めた『暗夜行路』二・四

「小説本」は近代に濁音で使われていたと思われる。

(38) 粘葉本

「粘葉本」は明治期の『日本大辞書』に濁音形で現れている。近代以降に「粘葉本」は濁音で使われていたと思われる。

・でつてふ・ぼん ((‥‥〈呂注：前十一条「鉄石」((第二逼))のこと〉、第三チョ合)) (第三上) 名。{牒帖本＝粘葉本} ヤマトトヂ『日本大辞書』

(39) 滑稽本

「滑稽本」は大正期の小説『明暗』に濁音形で現れている。

・英語の滑稽本（こっけいぼん）を出して津田に渡した『明暗』一〇四

また「滑稽本」は現代でも濁音で使われており、近代以降に出現してから現代まで濁音で使われてきたと思われる。

・こっけい本　コッケイボン『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』

(40) 流布本

「流布本」は近代以降に濁音形で現れている。

・『破提宇子』の流布本（るふぼん）は、革頂山文庫の蔵本を、明治戊辰の頃、杞憂道人鵜飼徹定の序文と共に、出版したものである『るしへる』一・注

４．「～本」の語彙特徴について

4-1　「～本」の前部要素の特徴

「～本」は以下「旧本」「双本」「戒本」「徳本」のように『万葉集』『歌経標式』『三代格』『伝教大師消息』に出現している。使用した資料の底本は後代に書き写されたものであるが、書写された内容は奈良・平安時代頃の原本をある程度反映しているのではないかと考えられる。このように考えると、後代による謄写とはいえ、奈良・平安時代には「旧本」「双本」「戒本」「徳本」は既に使われていた可能性がある。

・右一首歌今案不レ似二反歌一也。但旧本以二此歌一載二於反歌一 『万葉集』一・一五・左注

・双本<此事比多母止>以二六句一為二一終一。三句為二一韻一、六句為二二韻一 『歌経標式』

・受戒之後、皆令下先必読二誦二部戒本一諳中案一巻鞨磨四分律鈔上 『三代格』二・延暦二五年正月二六日・太政官符

・同殖二徳本一、不レ顧二譏誉一 『伝教大師消息』(『日本国語大辞典　第2版』より)

平安中期以降、和語の前接の「～本」は以下「て本」「かな本」のように、『宇津保物語』『源氏物語』『後二条師通記』に出現している。その中に「かな本」が出現した『後二条師通記』は底本が平安時代の書写本だが、「て本」が出現した『宇津保物語』『源氏物語』は底本が後世に書き写されたものである。但し、書写された内容としては平安・鎌倉時代頃の原本をある程度反映しているのではないかと考えられる。「て本」は平安時代には既に使われていた可能性がある。

・『右大将殿より』とて、て本四くわん、いろいろのしきしにかきて『宇津保物語』国譲上

・いまめかしきてほむならはゞいとようかいたまひてむとみ給『源氏物語』若紫

・又罷出参内、賀名本進上云々『後二条師通記』寛治四年

二字以上の漢語を前接する「～本」は、『日本国語大辞典　第2版』によると、平安末期より「奏覧本」が文献に出現している。

・又上奏以後歌入之条、貫之不レ堪二優美一追入レ之也。仍奏覧本は無二件歌等一云々『袋草紙』上(『日本国語大辞典　第2版』による)

この二字以上の漢語を前接する「～本」は、他にも「定家本」「馬上本」「無点本」などが挙げられ、『河海抄』『史記抄』『蔭涼軒日録』に出現しているのが確認できる。『河海抄』『史記抄』『蔭涼軒日録』の底本は後代によるものだとみられるが、書写された内容としては、室町時代頃の原本をある程度反映しているのではないかと考えられる。このように考えると、後代によるものとはいえ、「定家本」「馬上本」「無点本」などは室町時代頃には既に使われていた可能性がある。

・京極中納言定家本<号青表紙>『河海抄』一

・呉越春秋ト云テ細字ナル馬上本ガアルゾ『史記抄』一一・子胥

・季材持二一冊一来云、此一冊季睦所持本也。幸有二二本一、此一本可レ進云々。愚再三辞退レ之。季材云。留レ之者季睦可レ為二本望一由堅有レ命之故留レ之。無点本也『蔭涼軒日録』延徳二年・四月一九日

4-2　「本」の語彙的意味

自立語「本」は現代では《書籍》を表している。では《書籍》は「本」が古くからもっていた用法なのだろうか。

(1)「本」本来の意味について

自立語「本」の用例は以下のように、『源氏物語』、観智院本『類聚名義抄』などに確認できる。

・君は二三日うちへもまいり給はで、この人をなつけかたらひきこえ給。やがてほむにとおぼすにや、てならひ、ゑなどさま〳〵／にかきつゝみせたてまつり給『源氏物語』若紫

・本　モト　モトヅク　モト井観智院本『類聚名義抄』佛下本・一一三

『源氏物語』の用例は「君がこの人にお話を聴かせることによって、あなたの言葉などが見習う模範になる」の意味で、「本」は《手本》で使われていることが分かる。『類聚名義抄』の用例も同様で、「元となるもの」「元となるものを基準にする」などを意味し、つまり《手本》になっている。つまり、もともと「本」は《書籍》ではなかったのである。

このように考えると、4-1 で述べた平安・鎌倉時代に出現したとみられる二字漢語の「～本」なども、《手本》を表していたということになる。例えば以下のように、「梵本」は「仏教の手本」、「暦本」は「暦の手本」、「証本」は「証拠の手本」、「点本」は「加点された手本」の意味を表していたと思われる。古くは「梵」「暦」「証」「点」のように、物事の基準となったり証拠となったりするような《手本》の意味をもつ要素が上接していたからである。

・宜レ令下書二写梵本一安中国内諸寺塔上　『日本三代実録』貞観三年・八月一七日

・凡暦本進レ寮、具注御暦八月一日『延喜式』一六・陰陽寮

・訖史生以二所レ試書一。置二卿若輔前一。〈除二始終日一之外。若輔不レ在置二丞前一〉学生以二証本一置二博士前一　『延喜式』一九・式部

・大般若経大僧都永超之所奉点也、点本者春日御社御経也『後二条師通記』寛治六年・一〇月二九日

(2)「本」の意味変化

一方で「梵本」「暦本」「証本」「点本」に続き、「～本」には「正」「荒」「草」「異」「ひ秘」のように《手本》の形状や性質を表す要素が上接するようになった。

・世の人、是を興じ見る。十四帖也。その正本は、伝はりて、侍従俊貞といひし人のもとにぞ有ける『宇治拾遺物語』序（『日本国語大辞典　第２版』による）
・此間得二左伝荒本一、日夜校合、欠巻朽損巻等書レ之『明月記』元久元年・八月七日（『日本国語大辞典　第２版』による）
・此間浄意〈備後権守有季入道〉来、依レ請受与二草本二十巻一　『明月記』文暦二年・三月一三日（『日本国語大辞典　第２版』による）
・文ノ前後スル事モアリ。是ニ依テ異本多クデクル也『応永本論語抄』学而
・古今は仰せによりて、ひ本を参らせ入『春のみやまぢ』六月二日

これらの「～本」は《手本》で使われていながらも、その《手本》となる事物が前述したように、外見上「書籍」なのである。このようなことが積み重なった結果、当初余剰的意味であった《書籍》が主たる意味に移行したのではなかろうか。こうして以下のように、室町後期頃に《書籍》の意味を表す自立語の「本」が多くみられるようになった。

・補缺ハ補處トアル本モアルゾ『漢書列伝竺桃抄』季布欒布田叔伝第七
・アレガヨイ此ガヨイト云ヘドモ、彼本ニ是モアリ非モアリ、此本ニ真モアリ偽モアルゾ『史記抄』二[8]
・列子口義ノ本上下二冊、此ヲミル、下ノ巻ニアリ『玉塵抄』七
・九郎衛門尉摂州多田郷へ宿ヲカへ行了。上ルリノ本返了『言経卿記』天正十六年・九月一日

このように、「本」は古く《手本》で使われていたが、室町後期になり、《書籍》を表すようになったのではないかと考えられる。

[8]『史記抄』に関しては、使用した資料の底本は江戸期の写本ではあるが、原本を書き写したものとして、室町期に既に自立語の「本」が使われていた可能性がある

4-3　「本」の自立性

4-2 で述べたように、自立語「本」は古く《手本》を表していたが、平安・鎌倉時代頃には使われていた。そして室町後期より、自立語「本」は《書籍》を表すようになったと思われる。現代でも「本」は自立用法をもち、自立語「本」は主に《書籍》に使われている。

以上をまとめると、〈表 7〉になる。

〈表 7〉

文　献	旧本	根本	張本	千本	本本	中本	通本	奏覧本	鸚鵡本	浄瑠璃本	手沢本	当世本	狂言本	活字本	戯作本	稽古本	人情本	袖珍本	巾箱本	小説本	粘葉本	滑稽本	流布本	なぐさみ本	ひかえ本	うえ字本	うきよ本	おおうち本	はなし本	きんぴら本	ながうた本	くさ本	ゆか本	しばい本	て本	すり本	かな本	かき本	まき本	こ本	あか本	しゃれ本	くろ本	あお本	むかし本
万葉集	□																																													
日本霊異記		□																																												
源氏物語																																			□											
宇津保物語																																			□											
百錬抄																																				□										
本朝文粋			□																																											
後二条師通記																																					□									
袋草紙 (日国)								□																																						
色葉字類抄			●																																											
梁塵秘抄				□																																										
皇字沙汰文 (日国)					□																																									
百丈清規抄																																						□								
大乗院寺社雑事記																																							□							
文明本節用集		▲		▲	△																														△											
運歩色葉集																																							●							
サントスの御作業									○																																					
天草版平家物語		●	●	●	●																														○											
日葡辞書		●	●																																○	○										
倭語類解																																			○											
好色一代男		▲								□																																				
諸艶大鑑										●																												△								
西鶴織留																								●																						
元禄大平記																									□																					
土井本太平記		▲	●	▲																															△											
弁疑書目録	□					□																				□										□	□	●		□						
茶契福原雀 (日国)																											□																			
嫗山姥		▲	●																																											
老人雑話 (日国)																												□																		
鶯宿梅																													□																	
蘐園雑話											□																																			
当風辻談義																														●							●									
童の的																																									□					
禁現大福帳																																									●					
興談浮世袋 (日国)												□																																		
役者論語													□																																	
傾城買指南所																																										●				
鯛の味噌津																													●																	
御存商売物												●	▲																●		●								●	●	●	●	●		
啞多雁取帳																																△														
三筋緯客気植田					▲																																									
好古日録														□																																
浮世風呂						□								●	●											●							●								●				●
浮世床																□														●																
青楼離の花							●																																							
八笑人						△																														△										
甲子夜話																		□																												
婦女今川 (日国)																	□																													
春色梅児誉美																																										●				
春色辰巳園						△																																		△		●				
和英語林集成（初版）		◎	●																																○											
布令必用新撰字引																			●																											
西洋聞見録																									●																					
西国立志編																																		●												
和英語林集成（再版）		◎	●																																○											
柳橋新誌																																●														
当世書生気質																	●																													
和英語林集成（三版）		◎	●																	●															○	○										
日本大辞書		◎	●			●										●	●				●						●	●							○	○		○		○	○		○		
門三味線																●																														
大日本国語辞典																																												○		
渋江抽斎											●																																			
明暗																						●																								
るしへる																							●																							
暗夜行路																				●																										
新聞語辞典																		●																												
NHK日本語発音アクセント辞典		◎								●				●		●	●					●													○	○	● ○			○	○	●			
現代語（参考）		◎		●					●	●	●	●	●	●		●	●	●	●			●	●		●		●	●	●		●			●	○	○	● ○	○	● ○	○	○	● ○	○	○	● ○

注：　□ 音表記なし　　△ 音表記あり、清濁不明　　▲ 音表記あり、濁音か半濁音　　○ 音表記あり、清音　　◎ 音表記あり、半濁音　　● 音表記あり、濁音

以下５節より、「～本」の語彙の特徴、そして連濁する傾向をもとに、時代に分けて、それぞれの時代における「～本」の連濁条件を探る。

５．奈良・平安時代における「～本」の連濁

「～本」の語は 4-1 で述べたように、二字漢語の後部要素として古くから使われていた。奈良・平安時代には以下のような二字漢語の「～本」が文献に出現している。

旧本『万葉集』一・一五・左注　双本『歌経標式』　戒本『類聚三代格』二・延暦二五年正月二六日・太政官符
梵本『日本三代実録』貞観三年八月一七日　混本『古今和歌集』真名序　証本『延喜式』一九・式部
暦本『延喜式』一六・陰陽寮　御本『後撰和歌集』賀・一三七八・詞書　大本『本朝文粋』六・申従三位状
徳本『本朝文粋』一三・為左大臣供養浄妙寺願文　点本『後二条師通記』寛治六年一〇月二九日
絵本『古今著聞集』一一・三八四　三本『参天台五台山記』一
案本『高野山文書』平治元年七月一日・官符絵図記文等奉納状　正しょう本『玉葉』承安三年三月一三日

また平安中期以降、和語が前接する用例が出現する。4-1 でも挙げたように平安時代には以下のような和語前接の「～本」が文献に確認される。平安中期より「～本」は二字漢語の後部要素だけでなく、和語にも前接するようになったと思われる。

て本『宇津保物語』国譲上　かな本『後二条師通記』寛治四年　すり本『百錬抄』永延元年二月一一日

更に『日本国語大辞典　第 2 版』によると、二字以上の漢語を前接する「～本」として「奏覧本」が平安末期の『袋草紙』に出現している。

古い文献には清濁が確定できるものは少ない。しかし後代の用例より、漢語前接の場合は鼻音の後で連濁しており、和語前接の場合は連濁していなかったのではなかろうか（後代の連濁状況については本章６節を参照する）。

また奈良・平安時代に現れた「～本」は、以下のような品詞性を有する要素を前接する（ア）。

和語前接の「～本」

a. 名詞的要素：て本、かな本

b. 動名詞的要素：すり本

漢語前接の「～本」

a. 名詞的要素：梵本、証本、暦本、徳本、点本、絵本、案本

b. 動詞的要素：戒本、奏覧本

c. 形容詞的要素：旧本、正本、大本

６．鎌倉から室町中期までの「～本」の連濁

6-1　漢語前接の場合

室町中期頃までの文献に出現した漢語前接の「～本」は以下のとおりである。

●張本三巻本『色葉字類抄』上チ[畳字]前田本 69 ウ 2　●根本『天草版平家物語』一 14

●千本『天草版平家物語』一 66　●本本『天草版平家物語』三 207

注本『文明本節用集』一六二 7[9]　地ち本『吾妻鏡』文治二年一一月二四日

宋本『吾妻鏡』文治五年九月一七日　復本『吾妻鏡』建久四年四月一三日

荒本『明月記』元久元年八月七日　善本『教行信証』六　草本『明月記』文暦二年三月一三日

秘本『春のみやまぢ』六月二日　異本『応永本論語抄』学而　諸本『杜詩続翠抄』一三

版本『わらんべ草』二　写本『文明本節用集』九六二

印本『臥雲日件録』長禄四年閏九月二二日　校本『史記抄』一一・孫呉

古本『史記抄』八・孝文本紀　他本『史記抄』一四・扁鵲倉公　唐本『蔭凉軒日録』永享一一年五月一四日

画本『蔭凉軒日録』文明一七年一一月二四日　和本『蔭凉軒日録』文明一九年九月二日

書本『蔭凉軒日録』長享三年二月七日

定家本『河海抄』一　馬上本『史記抄』一一・子胥　無点本『蔭凉軒日録』延徳二年四月一九日

透写本『実隆公記』享禄元年閏九月一〇日

〈図 3〉

濁音形が確認できたのは「張本」「根本」「千本」「本本」であり、全て鼻音韻尾の漢字が前接しているのが特徴である(「張本」は古く中国原音では ng 韻尾を有した)。

・張本　流例分　チヤウボン三巻本『色葉字類抄』上チ[畳字]前田本 69 ウ 2

・ヨ　ノ　ミダレ　ソメタ　Conbon[呂注：根本]　ワ　スギシ　カワウニネンニ『天草版平家物語』一 14

・Xenbon[呂注：千本]　ノ　ソトバ　ヲ　ツクッテ『天草版平家物語』一 66

・ハジメテ　fonbonni[呂注：本本に]　ソクタウタガ『天草版平家物語』三 207

[9] 「注本」については『文明本節用集』に「注文（チウモン）　一本（ボン）」がある。但しこれについては〈図 3〉で示すように、その「ホ」の右肩にある点の振り方からみて、これは濁点ではなく、合点である可能性が高いとみられる。

鼻音の後で連濁するという現象は第１章・第２章でも述べたように、古い時代においてかなり一般的だとされている。

このように「～本」は文献史上、最初に二字漢語の後部要素として現われたが、鼻音前接の有無によって連濁していたと思われる。

また、この時代の漢語前接の「～本」には以下のような品詞性の要素が前接する（イ）。

a. 名詞的要素：根本、注本、地本、宋本、版本、古本、唐本、画本、和本、定家本、馬上本、無点本
b. 動詞的要素：張本、復本、写本、印本、校本、書本、透写本
c. 形容詞的要素：荒本、善本、草本、秘本、諸本、異本、他本

6-2　和語前接の場合

室町中期頃まで新たに文献に出現した和語前接の「～本」は以下のとおりである。

としふさ本『河海抄』一　いき本『漢書列伝竺桃抄』韓彭英盧呉第四　かき本『百丈精規抄』一
まき本『大乗院寺社雑事記』文正元年四月晦日　おり本『史記抄』五・項羽本紀　み本『古文真宝桂林抄』坤
とじ本『蔭凉軒日録』長享二年五月五日

上掲の「～本」には以下のような要素を前接する（ウ）。

a.名詞的要素：としふさ本
b.動名詞的要素：いき本、かき本、まき本、おり本、み本、とじ本

和語前接の「～本」は濁音形で確認できた例はない。また『日葡辞書』に現われた和語前接の「～本」も全て清音である。

Tefon（手本）　Vorifon（折本）　Surifon（摺本）

室町中期頃まで、和語が前接する場合の「～本」は連濁しなかったのではなかろうか（第①段階）。

では何故この時代「和語＋～本」は連濁しなかったのだろうか。

７．「本」の意味変化、並びに「書」との競合

7-1　「～本」《手本》について

4-2 で述べたように、平安・鎌倉時代において「本」は《手本》を表していた。この事情を考えると、6-2 で挙げた和語前接の「～本」の用例は以下のように分析することができるのではなかろうか。

(1) て本

以下の(a)は書き写す対象・模範となるもの、(b)は習うべき対象、(c)は模範となる行動、(d)は見習うべき行動を指している。

(a) 『右大将殿より』とて、て本四くわん、いろいろのしきしにかきて『宇津保物語』国譲上

(b) いまめかしきてほむ習はば、いとよう、書い給ひてん『源氏物語』若紫

(c) 「是ヲ見給へ、東国ノ殿原、日本一ノ剛ノ者ノ自害スル手本」トテ、太刀ノサキヲロニフクミ、馬ヨリサカサマニトビ落チ、ツラヌカッテゾウセニケル延慶本『平家物語』巻第九・木曽最期

(d) 早々御自害候へ。高重先ヲ仕テ手本ニ見セ進セ候ハン慶長古活字本『太平記』一〇・高時并一門以下於東勝寺自害事

(2) いき本

以下の(a)は生きた手本、他の人に見習うべきもの、(b)は参考となる言い回しのこと、(c)は典拠にも載っているような歴史を指している。このように「いき本」は「て本」と似たように、模範となるものや行動に使われている。

(a) 忠ノアルモノハ多ケレドモ、謀反ヲモ不起シテ無為デハテタイキ本ゾ『漢書列伝竺桃抄』韓彭英盧呉第四

(b) 急々如律令トテ、律令ハ急ナルモノノイキ本ナリ『史記抄』一六・儒林列伝

(c) 此太史儋カ見秦献公曰始周與秦国合而別別五百載復合、トコニモ引テ云フ事ソ、此カイキ本ソ『史記抄』周本紀

(3) すり本

以下の(a)は経典を印刷したもの、(b)は法典を印刷したもの、(c)は医学書を印刷したものを指している。「すり本」は手本となるものの印刷物を指しているが、同時

に習うべき手本（経典・法典・医学書）に使われていることが分かる。

(a) 入唐僧奮然帰朝。随二身第三傳釋迦像十六羅漢絵像。并摺本一切経一『百錬抄』永延元年二月一一日

(b) 御成敗式目の摺本持来て法印に遣候『言継卿記』大永七年・正月三十日

(c) 近日唐ヨリ持来ル所ノ医書、院ヨリ借給ス。真ニ興有ル書也。摺本卅帖、忽ニ書留ル能ハザルニ依リ忿テ返召ス『中右記』元永元年・一・二

(4) おり本

以下の(a)は経典の体裁、(b)は「師説」の体裁を指している。(c)は幽齋が所持している書籍目録にある一冊の本の体裁を指している。後文に「和歌の色葉」の読み間違えの場面があることから、この本は和歌の入門書である可能性が高い。「おり本」は手本となるものの体裁に使われるが、その対象となる手本は経典や漢文・和歌など学問に関わるものである。

(a) 仁王講本来ハ巻本ニハアラス、折本也『大乗院寺社雑事記』文正元年・四月晦日

(b) 史記ニモ師説トテアルソ、サテハ常徳慶雲ト云寮ニ、一部折本ノ家点アリ『史記抄』五・項羽本紀

(c) 幽齋御所持の書籍の目録拝見、也足（やそく）の御手とみえたり、とりのこをよこぎりにしたる折本なり、〈呂中略〉此時和歌の色葉といふものあり、予わかのいろはとよむ也、然はわかのしきよふとなをし給なり『耳底記』二（『日本国語大辞典　第２版』による）

(5) とじ本

以下の(a)は経典の体裁、(b)は『聯句抄』の体裁を指している。以上で「とじ本」も手本となるものの体裁に使われるが、その手本は経典、聯句など勉学に関わるものである。

(a) 今度自高麗来蔵経函者、太半六十合有之。経亦皆トチ本也云々『蔭凉軒日録』長享二年・五月五日

(b) 今ハトチ本ナレ共、跋モトマデニスト云心デ跋ト云ゾ『湯山聯句鈔』98 ウ

(6) かな本

以下「かな本」の例は正式な場面で贈呈された仮名書きの手本を指す。

・又罷出参内、賀名本進上云々『後二条師通記』寛治四年

(7) かき本

以下「かき本」の例は手本である『百丈清規』を書き写したものを指している。

・モトワ板木ト云モノワナウテカキ本ハカリソ『百丈清規抄』一

(8) まき本

以下「まき本」の例は手本である『山谷抄』の体裁を指している。

・巻第一ハ、巻ハモトノマキ本ノ心ゾ『山谷抄』一

このように「て本」「いき本」「すり本」「おり本」「とじ本」「かな本」「かき本」「まき本」は、意味の面では専ら学問や研究、または模範となるものに使われている。二字漢語「旧本」「唐本」などと同様に「～本」には立派なもの・正式なものという漢語らしさを保っていると考えられる。そのため「～本」に和語が前接していても、二字漢語の「～本」と同じ類の語彙として扱われていたのではなかろうか。二字漢語の「～本」は前述したように、連濁を起こすには鼻音の前接が必要であった。「て本」「いき本」「すり本」「おり本」「とじ本」「かな本」「かき本」「まき本」などは「～本」に鼻音の前接がない。そのため連濁が起こらなかったのではないかと思われる。

7-2　「本」と「書」との競合

4-2 で述べたように、「本」は室町後期より《書籍》を表すようになった。一方、《書籍》を表す漢語としては古くから「書」という漢語があった。

・偏信琴書学者資、三余窓下七条糸『菅家文草』一・停習弾琴（『日本国語大辞典　第２版』による）
・タトヒ四部ノ書ヲカヾミテ、百療ニ長ズトイフ共、イカデカ有待ノ穢身ヲ救療セン延慶本『平家物語』三・医師問答
・然れども今此篇に勧学と云心は、専ら古人の書を読ことをさして学文と云へり『古文真宝前集抄』一（『時代別国語大辞典　室町時代編』による）
・神代ヨリ始テ、持統天皇ノ御宇ニ至マデヲ被レ記タル書三十巻ヲバ、前代旧事

本記トテ、卜部宿禰是ヲ相伝シテ慶長古活字本『太平記』六・正成天王寺未来記披見事

《書籍》に使われるようになり、「本」は「書」と意味上、競合することとなった。しかし室町後期・江戸前期頃には〈表 8〉で示すように、「書」は「経書」「韻書」「史書」などのように勉学や研究のために使う《書籍》に使うのに対して、「本」は「浄瑠璃本」「好色本」「怪談本」などのようにやや手軽なイメージで広範囲の《書籍》に使われるようになった。

〈表 8〉

	書	本
後部要素	遙笛一声聞下レ涙、古書数帙見研レ心『本朝無題詩』五・初冬書懐（『日本国語大辞典　第２版』による）	あくびしてはあがり、おりては浄瑠璃（じやうるり）本など読『好色一代男』五
	外道の経書（キャウショ〈注〉キャウフミ）手筆をこのまじ『妙一本仮名書き法華経』八・普賢菩薩勧発品第二十八	すでに好色本は国法ありて、今売買せず『当世下手談義』五・都路無字大夫、江の島参詣の事（『日本国語大辞典　第２版』による）
	韻書ニハ平声、上声、去声ニ皆雲夢ト入タホドニ不定ゾ『史記抄』一五・司馬相如	おかしさは持参怪談本を読み『川傍柳』二（『日本国語大辞典　第２版』による）
	持統天皇、三河の国に行幸ありとしるせる史書あり『東海道名所記』三（『日本国語大辞典　第２版』による）	狂言本とてくわしく書事は、金子一高よりはじまりける也『役者論語』続耳塵集
自立語用法	夕の窓の下に、意魂を書にうつして、繰かへす夜はほのほのと『懐硯』四・大盗人入相の鐘	忽ぞうし・くさぞうしはこのほうの仲間ちがひなれども、いづれほんとながつけばおなじるいなり『御存商売物』下
	西鶴生涯のうち、述作する所の仮名草子、棟に充、牛に汗して世にはひこる中に、日本永代蔵・本朝町人鑑・世の人心、これを三部の書と名つく『西鶴織留』団水誌	実や、娘の親のならひにて、化物尽の咄の本の中程に、赤子を頭から噛喰ふ顔つきなる娘も、花見紅葉みの先に立て『本朝二十不孝』一・跡の剥たる嫁入長持

こうして古くからあった「書」は依然として古めかしく格調高い意味を保持しているのに対して、新しく出来た「本」は通俗的な意味をもち日常語化して用いられ、両者は意味を分担しつつ共存したと思われる。この意味分担は現代語まで引き継がれていると考えられる（研究書・学術書／とんでも本・コミック本など）。

８．室町後期から江戸期までの「～本」

こうして「本」《書籍》が日常語化した結果、以下のように和語前接の「～本」は室町後期頃から連濁するようになったと考えられる。確認できた濁音形の初出例は『運歩色葉集』の「まきぼん」である。この頃より《書籍》を表す濁音形式「～ボン本」が発生したと思われる（第②段階）。

・巻本（マキボン）『運歩色葉集』二三五 2

こうした和語前接の「～本」の濁音形は、江戸期になって多くの用例が出現するようになった。

・書物屋共の咄を聞けば、近年出来た仮名本（かなぼん）の中では『当風辻談義』四・辨財天宮古路を讃給ひし事
・或ハ此ノ弁疑書目、所々ニ、亦カキボンヲ出ス『弁疑書目録』下
・ことにしゃれぼんなぞといふたわひもなきもおののために、世をせばめられ『御存商売物』二・オ
・どうぞして、あをぼんその外の地ほんにけちをつけんとはかる『御存商売物』二・オ
・あかぼんくろぼんといへば、ぢごくのおにだとおもふか『御存商売物』二・ウ
・ながうたぼん・義太夫のぬきほん・三しばひあふむせきなぞをよび『御存商売物』九・オ
・宇治拾遺をはじめとして、其外の昔本（むかしぼん）に、能う書記てある物ぢや『浮世風呂』四・中

二字以上の漢語を前接する「～本」《書籍》も江戸中期から濁音形が現れるようになった。

・道行づくしの浄溜利本（じやうるりぼん）、皮付の大楊枝、喜三郎が琢砂をたしなみ『諸艶大鑑』11 ウ
・つきなみのくわいをもようし、しやれぼん・袋ざし・壹まいずりそのほかのとうせひぼんをあつめ『御存商売物』三・ウ
・けいこ本（ぼん）のところどころへ〇や△や、いろいろな切かけをして覚たといふ奴だ『浮世床』初・上
・戯作本（けさくぼん）には語路の能く廻った地口はおかしくないゆゑ用ぬ『浮世風呂』四・上

こうして、手軽なイメージの《書籍》を表す「～本」はほとんどが濁音形で現れるようになった。連濁は和語に起こりやすいとされているが、金田一春彦(1976)は「漢語や洋語も和語と同じような親しい単語ということになると連濁をするように

なる」と述べている。「親しい」というのはこの場合、要するに「本」は意味的に通俗的な《書籍》を有し日常語化し、和語との親和性を有するということになる。一方「書」は漢語性を保ちつづけ、和語との親和性を有しなかった。そのため「～本」は連濁し、「～書」は連濁しなかったと思われる。

「本」は《書籍》を表すようになって、江戸期に大量の「～ボン本」の語が生まれ、語彙の拡大が生じ、そのほとんどが濁音形であったのではないかと考えられる（第③段階）。和語前接の「～本」は以下のとおりである。

●かき本『弁疑書目録』下　●はなし本『鯛の味噌津』叙　●しゃれ本『御存商売物』二・オ
●あお本『御存商売物』二・オ　●あか本『御存商売物』二・ウ　●くろ本『御存商売物』二・ウ
●ながうた本『御存商売物』九・オ　●むかし本『浮世風呂』四・中　●ゆか本『浮世風呂』三・下
なき本『恋の若竹』初・序　うたい本『犬子集』一四・雑上　なぐさみ本『西鶴織留』一・四
みちゆき本『御前義経記』六・一　ひかえ本『元祿大平記』五・初学の為によい事をいふ
ひらがた本『弁疑書目録』上　すみのくら本『弁疑書目録』中　あしかが本『弁疑書目録』中
かざり本『弁疑書目録』中　かきいれ本『弁疑書目録』中　やまぐち本『弁疑書目録』中
うきよ本『茶契福原雀』中　おおうち本『老人雑話』坤　まくら本『御伽名代紙衣』三・一
よこ本『異説まちまち』二　わらい本『仮名手本忠臣蔵』一〇　いろ本『雲鼓評万句合』寛延二年
みくじ本『川柳評万句合』明和四年・義五　うす本『柳多留』四　かし本『当世穴嘶』四・書物雑話
ぬき本『御存商売物』九・オ　くさ本『啌多雁取帳』叙　した本『授業編』八　はした本『授業編』二
むだ本『二日酔巵觶』序　よせ本『川柳評万句合』天明八年八月二五日　ぬけ本『好古小録』下
えど本『浮世風呂』三・下　まる本『浮世風呂』三・下　あぶらげ本『春夏帖』春
たね本『明烏後正夢』五・二六回　いしうす本『蘿月菴国書漫抄』三
むしくい本『貞操婦女八賢誌』初・一回　つぎ本『英対暖語』二・八回　えどり本『用捨箱』下・二

注意すべきなのは、以下「カキボン」「小ぼん」「あかぼん」「くろぼん」「あをぼん」のように連濁していることである。これらは明治期以降に清音化するが、この現象の理由については後述する。

・或ハ此ノ弁疑書目、所々ニ、亦カキボンヲ出ス『弁疑書目録』下
・くろぼんがむすこの小ぼん夜泣きをしてならぬゆへだます『御存商売物』上
・あかぼんくろぼんといへば、ぢごくのおにだとおもふか『御存商売物』二・ウ
・どうぞして、あをぼんその外の地ほんにけちをつけんとはかる『御存商売物』二・オ

漢語の例は以下のとおりである。鼻音が前接していなくても濁音形で現れていることが分かる。

●浄瑠璃本『諸艶大鑑』11ウ　●当世本『御存商売物』三・ウ　●稽古本『浮世床』初・上
●戯作本『浮世風呂』四・上　療治本『私可多咄』一・四五　嵯峨本『大和事始』四・印板
悪性本『好色破邪顕正』上　自書本『三冊子』わすれ水　大字本『弁疑書目録』上
見林本『弁疑書目録』上　論議本『弁疑書目録』上　光悦本『弁疑書目録』中　不足本『弁疑書目録』中
朝鮮本『弁疑書目録』中　狂言本『御存商売物』九・ウ
好色本『当世下手談義』五・都路無字大夫、江の島参詣の事　風流本『教訓不弁舌』四・優荒の問答
教訓本『当世阿多福仮面』読阿多福面　二階本『孔雀楼筆記』四　怪談本『川傍柳』二
義太夫本『柳多留』一七　書写本『文会雑記』三・上　新刊本『文会雑記』附録・一
活字本『好古日録』一九　巻子本『難波江』二・下　粘葉本『橘窓自語』四　五行本『楽屋図会拾遺』上
人情本『婦女今川』八・一三回　袖珍本『甲子夜話』二〇　懐中本『珍説豹の巻』前・序
漢字本『江戸繁昌記』四・馬喰街客舎　蒟蒻本『続浮世絵類考』吾妻錦絵の考
半紙本『殿村篠斎宛馬琴書簡』天保四年一月一五日　慈海本『武江年表』元禄九年一一月
整版本『経籍訪古志』四・子上

ところで３節で述べたように、「通本」も江戸後期より濁音形が確認されるようになる。この場合「通本」は人情に通じるところから人情本に使われている。

・はかないものがたりはこれまでの通本（つうぼん）にいくらもありて、めづらしからねば『青楼籬の花』前章

「通本」の前接部「通」は以下のように、江戸期には自立用法をもっていた。

・大つうとはなんの事だへ。つう〈呂注：通〉の利いたは、五六年もあとの事さ『淫女皮肉論』通をそしる品川

そのため、「通本」は「浄瑠璃本」「当世本」などと同じように、自立用法をもつ「通」に濁音形「～ボン本」が付いて出来たのではないかと考えられる。

「～本」は手軽なイメージで広範囲の書籍に使われ、書籍の特徴を限定する語に濁音形「～ボン本」を付ければどんな本の種類でも表せる、という便利な用法として定着したのではなかろうか。こうして江戸時代に大量の「～ボン本」の語彙が出来た

と思われる。この時期に「～本」は以下のような要素を前接する（エ）。

和語前接の「～本」

a. 名詞的要素：みちゆき本、すみのくら本、あしかが本、やまぐち本、
うきよ本、おおうち本、まくら本、よこ本、いろ本、みくじ本、
ながうた本、くさ本、した本、はした本、うづき本、えど本、
むかし本、ゆか本、なみ本、あぶらげ本、たね本、その本、
いしうす本、むしくい本

b. 動名詞的要素：うたい本、なぐさみ本、ひかえ本、かざり本、かきいれ本、
はなし本、わらい本、かし本、しゃれ本、ぬき本、よせ本、
ぬけ本、なき本、つぎ本、えどり本

c. 形容動詞的要素：むだ本

d. 形容詞的要素：ふる本、あか本、うす本、あお本、くろ本、まる本

漢語前接の「～本」

a. 名詞的要素：浄瑠璃本、嵯峨本、悪性本、光悦本、大字本、手沢本、二階本、
当世本、朝鮮本、見林本、論議本、狂言本、怪談本、教訓本、
義太夫本、新刊本、活字本、巻子本、粘葉本、五行本、戯作本、
人情本、袖珍本、懐中本、漢字本、蒟蒻本、半紙本、慈海本

b. 動名詞的要素：療治本、自書本、不足本、書写本、稽古本、整版本

c. 形容動詞的要素：好色本、風流本

前代と比較すると c. 形容動詞的要素、d. 形容詞的要素をうける用法が新たに出現し、用法が拡大した。

９．明治期以降の「～本」

明治期に入ると、前代で濁音だった「カキボン」「小ぼん」「あかぼん」「くろぼん」「あをぼん」は以下で示すように清音へと変わった。『大日本国語辞典』『日本大辞書』には濁点が多数使用されている。しかし「かきほん」「こほん」「あかほん」「くろほん」「あをほん」には濁点が施されていない。これらは現代語でも清音であることから、明治期には清音になっていたと思われる。

・いん・ぽん（‥‥）〈呂注：前条「淫奔」（第一上）のこと〉名。｛(印本)｝スベテ、版デスツタホン。（かきほんノ対）。＝ハンポン『日本大辞書』

・こ・ほん（全平）名。⊙｛小本｝小サナ書物『日本大辞書』

・あか・ほん（全平）名。{赤本}〔近古ノ草双紙ノ表紙ノ赤カッタトコロカラ〕クサザウシノ異名『日本大辞書』

・くろ・ほん（全平）名。{‥‥本}〈呂注：前条「黒牡丹」のこと〉あかほんノ類。昔シ天保、文化ノ頃、発行ニナツタ草双紙ノ一種。表紙ヲ黒ニシタモノ『日本大辞書』

・あを-ほん　青本（名）ゑざうし（絵双紙）を見よ『大日本国語辞典』

上例で分かるように「かき本」「こ本」は江戸期頃から現代まで変わらず「手書きの書籍」「小型の書物」の意味で使われてきた。一方「あか本」「くろ本」「あお本」は江戸期は草双紙、絵双紙の種類を指していたが、現代では大学の入試対応本の意味で使われるようになった[10]。但し同じく表紙の色からきたもので、《書籍》に使われることには変わりはないといえる。

「かき本」「こ本」「あか本」「くろ本」「あお本」はそもそも濁音形をとっていたにもかかわらず、明治期以降には清音形になったのである。何故清音化が起こったのだろうか。

この問題についてまず明治期以降の「～本」の前接部の要素についてみてみる（オ）。

和語前接の「～本」

a. 名詞的要素：しばい本、まな本、まめ本、うきよえ本、ぞっき本

b. 動名詞的要素：かきいれ本、あげ本　かき本

c. 形容動詞的要素：まれ本

d. 形容詞的要素：ふる本、あか本、くろ本、あお本、こ本

漢語前接の「～本」

a. 名詞的要素：巾箱本、小説本、西洋本、木版本、活版本、講談本、習字本、国字本、左翼本、文庫本、所伝本、手稿本、石印本、饅頭本、洋装本、稀覯本、絶版本、和刻本、教則本、特製本、発禁本、特価本

b. 動名詞的要素：単行本、講釈本、翻訳本、流布本、縮刷本、影写本、限定本、所蔵本、複製本、覆刻本、署名本、再刊本、攻略本

c. 形容動詞的要素：滑稽本、廉価本、贅沢本、豪華本、貴重本

「あか本」「くろ本」「あお本」の前接部「あか」「くろ」「あお」はいずれも形容詞の用法をもつものである（あかい・くろい・あおい）。これに対して濁音形の「～

[10]「青本」（駿台文庫）、「赤本」（教学社）、「黒本」（河合出版）がある。

ボン本」は以下のとおりである（『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』による）。

かな本　ぞっき本　しゃれ本
人情本　初版本　希覯本　教則本　活字本　講談本　浄瑠璃本　滑稽本
好色本　稽古本　単行本　上製本

以上はいずれも前接部が形容詞的要素ではない[11]。つまり、形容詞的要素が前接部にくると、清音化が起こる傾向があったのではなかろうか。

では、形容詞的要素が前接部にくると清音化が起こるという現象は、何を意味しているのだろうか。〈図 3〉は（ア）（イ）（ウ）（エ）（オ）をあわせ、古代から現代までの「～本」の前接部の要素について分析したものである。

〈図 4〉

時期	漢語前接			和語前接				
	動名詞	名詞	形容動詞	形容動詞	名詞	動名詞	形容詞	
奈良・平安時代					かな本	すり本		（ア）
鎌倉～室町中期	透写本	鸚鵡本			かな本	おり本		（イ）（ウ）
室町後期～江戸期	書写本	当世本	好色本	むだ本	うきよ本	はなし本	あか本	（エ）
明治期・現代	攻略本	小説本	滑稽本	まれ本	しばい本	かき本	あか本	（オ）

〈図 4〉で分かるように、江戸時代に《書籍》を表すものはほとんどが濁音形で現れていたが、現代では濁音形で現れるものは前接部が名詞的要素・動名詞的要素・形容動詞的要素の「～本」に限られるようになった。これらはいずれも名詞的性格をもっているため、濁音形「～ボン本」の前接部は名詞的要素をもつ語に限定されたのではないかと思われる。

このように考えると、「こ本」も前接部「こ」は形容詞性の接頭辞であるため、清音化したと考えられる。また、動名詞が前接する場合でも、「かき本」《手書きの本》「すり本」《印刷の本》など、前接部の動名詞が形容詞のように修飾語として働く場合は、現代では清音で使われる傾向がある。

《書籍》を表す「～ボン本」は江戸期より、その手軽さから前接部に多数の語をうけるようになった。その結果、「～ボン本」は前接部と複合関係ではなく、前接部に

[11] 数量詞の類は古代的な鼻音による連濁を濁音のまま現代にまで保っており（高山 2012）、独立の体系を有していると思われる。そのため、数量詞の「何本」「二三本」などを除く。「三匹」「三杯」などの数量詞も同様である。

「～ボン本」を付けるという従属関係になっていたのではないかと思われる。このような従属関係は「～化」「～的」などの接尾辞にもみられるため、「～ボン本」は接尾辞的機能を獲得したと考えられる。接尾辞は基本的に名詞的要素に付き、形容詞的要素に修飾されにくい[12]。濁音形式「～ボン本」も接尾辞的機能を獲得した結果、形容詞的要素をうけなくなったのではないかと考えられる。

また、濁音形式「～ボン本」のアクセントについては〈表 10〉のとおりである。

〈表 10〉

有核アクセント	無核アクセント
（例なし）	○●●●のもの：洒落本 ○●●●●のもの：ぞっき本、稽古本、希覯本、活字本、初版本 ○●●●●●のもの：上製本、人情本、単行本、好色本、教則本、講談本、浄瑠璃本

アクセントは『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』によった。「～ボン本」は全部無核アクセントであることが分かる[13]。「～ボン本」は形態上も整うようになった。こうして「～ボン本」が《書籍》を示す接尾辞用法は文法的にも形態的にも完成したと思われる（第④段階）。

濁音形式「～ボン本」は現代では非常に強い造語力を見せている。辞書には「活字

[12] 一字漢語からなる接尾辞として「映画化」「短縮化」の「～化」、「科学的」「優先的」の「～的」、「業務用」「見学用」の「～用」などがある。一字漢語からなる接尾辞「～化」「～的」「～用」を「聞蔵Ⅱビジュアル」の朝日新聞データベースを使い、異なり語数 100 の語を集めて考察してみた。以下で示すように、その前接部は漢語であれ、和語であれ、外来語であれ、名詞・動名詞・形容動詞しか接続しない。

〈表 9〉

上接語の語種・品詞 ＼ 一字漢語接尾辞		～化	～的	～用
漢語	名詞	映画化など［61］	科学的など［77］	業務用など［36］
	動名詞	短縮化など［10］	優先的など［20］	見学用など［39］
	形容動詞	深刻化など［21］		緊急用など［2］
	形容詞			
和語	名詞	おおがた化［1］	こいずみ的［1］	こども用など［11］
	動名詞			かいもの用など［3］
	形容動詞			
	形容詞			
外来語	名詞	アニメ化など［6］	ＳＦ的など［2］	スマホ用など［8］
	動名詞			リサイクル用［1］
	形容動詞	グローバル化［1］		
	形容詞			

「～本ボン」もこれらと似た現象が現れているのではなかろうか。

[13] 『日本大辞書』では「～本ボン」のアクセントは有核型（うきよ本、稽古本など）・無核型（中本、大内本など）の両方があった。

本」「浄瑠璃本」などしか載せられていないが、日常生活では「ねこ本」「エヴァ本」「おや本」「こ本」など、数多くの「～ボン本」が作りつづけられている。

濁音形「～ボン本」は前接部が《書籍》の内容や外見を限定するものを自由にとり、「～ボン本」の形式で表すことができる。例えば、「ゲームの攻略法」を内容とする本は「攻略本」、「料理」を内容とする本は「料理本」、「美容」を内容とする本は「美容本」という。書籍の大きさを限定するもので「小型本」「大型本」「中型本」という。

これに対して、複合語は自由に造語できない。例えば後部要素が「かぜ」の場合、春、夏、秋に吹く風は「はるかぜ」「なつかぜ」「あきかぜ」というが、「*ふゆかぜ」とはいえない（詳細は本論第４章１節を参照）。しかし「～ボン本」は自由に造語できる。「～ボン本」が元の《書籍》を残しつつも、複合語ではない証拠である。

「～ボン本」は「～サン産」「～ゼイ勢」と同じように、一連の語（書籍の内容、体裁などを限定する語）に後接し、ある特定的な意味（どのような《書籍》か）を表している。また「～ボン本」の語彙はアクセントが全て平板型にパタン化しており、濁音形式の「～ボン」自身でも自立性を欠く。以上諸般の事情を考えると、濁音形「～ボン本」は現代語で接尾辞として使われているのではないかと考えられる。

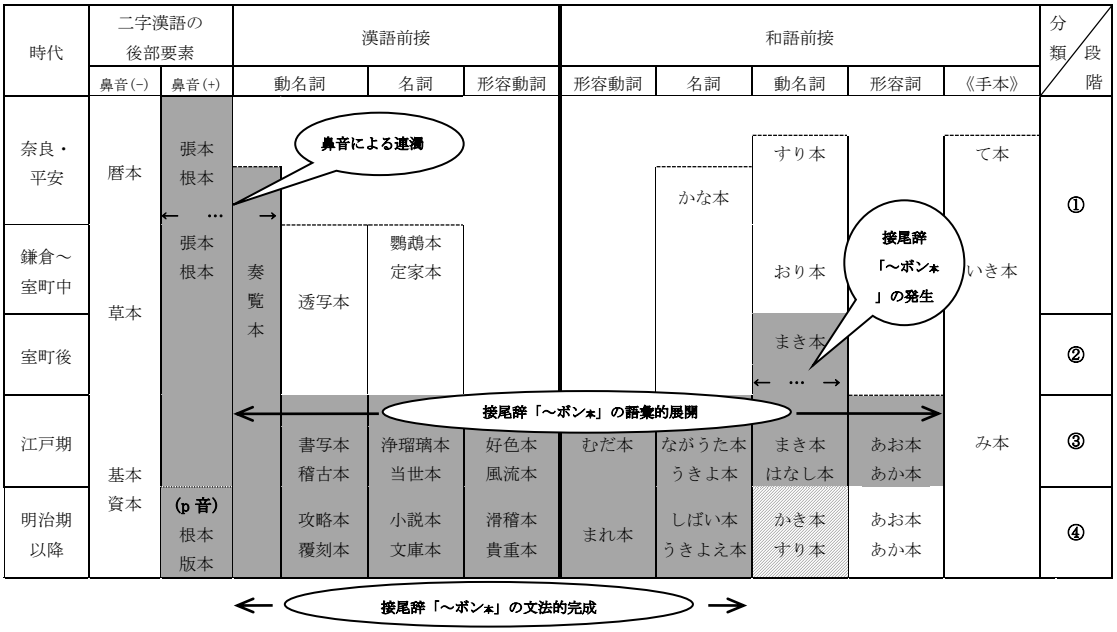
10. まとめ

以上「～本」の連濁の史的変遷を考察し、以下のようにまとめることができる。

「～本」は最初に二字漢語の後部要素に現われ、鼻音が前接しているときに連濁していた。次に和語前接のものが現れるが、濁音形で現れることはなかった。これは、これらの和語前接の「～本」が立派・正式なものに使われ、漢語らしさをもっているからだとみられる（第①段階）。室町後期から「本」は手軽なイメージで《書籍》を表すようになり、日常語化した「～本」は連濁が起こるようになった（第②段階）。濁音形「～ボン本」はその使い方の便利さから広範囲の書籍に使われ、江戸期に大量の「～ボン本」が出来た。「～ボン本」は接尾辞へと移行していく（第③段階）。明治期以降、形容詞的要素前接の「あか本」「あお本」などは濁音形「～ボン本」から弾かれ、清音化した。また造語力が非常に強い「～ボン本」は語彙のアクセントがパタン化し、接尾辞への移行が完成した（第④段階）。

以上をまとめると、以下〈図 5〉になる。

〈図 5〉



「〜本」は現代語では基本的に連濁しない。「〜本」の連濁とは別に接尾辞用法の「〜ボン本」があり、書籍の内容や体裁などを限定する語に後接し、どのような《書籍》かを分類するのに使われている。

第３章　調査文献

万葉集／歌経標式／日本三代実録／延喜式／源氏物語／宇津保物語／本朝文粋／中右記／後二条師通記／三巻本色葉字類抄／観智院本類聚名義抄／日本霊異記／妙一本仮名書き法華経／春のみやまぢ／百錬抄／梁塵秘抄／河海抄／延慶本平家物語／応永本論語抄／蔭凉軒日録／大乗院寺社雑事記／百丈清規抄／文明本節用集／史記抄／山谷抄／漢書列伝竺桃抄／鶯宿梅／運歩色葉集／三代格／言経卿記／天草版平家物語／湯山聯句鈔／玉塵抄／慶長古活字本太平記／日葡辞書／好色一代男／諸艶大鑑／本朝二十不孝／西鶴織留／懐硯／元禄大平記／土井本太平記／弁疑書目録／嫗山姥／書言字考節用集／当風辻談義／禁現大福帳／童の的／蔭園雑話／役者論語／淫女皮肉論／傾城買指南所／鯛の味噌津／御存商売物／啌多雁取帳／三筋緯客気植田／好古日録／甲子夜話／浮世風呂／浮世床／青楼籬の花／春色梅児誉美／春色辰巳園／和英語林集成（初版）（再版）（三版）／布令必用新撰字引／柳橋新誌／西国立志編／日本大辞書／明暗／るしへる／大日本国語辞典／渋江抽斎／当世書生気質／新聞語辞典／暗夜行路／ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典

第４章　接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」について

１．接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」の特徴について

序論５節でも述べたように、接尾辞とは「単独の用法を持たず常に上のような基幹を成す要素と結合して一つの単語を形成する要素」のことで、そして「下に付くものを接尾語（接尾辞）と呼ぶ」（阪倉篤義（1986））。このようにみると「～産」「～勢」「～本」も現代では接尾辞用法をもっているということを、本論第１章・第２章・第３章で言及した。では接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」とはどのような接尾辞なのか。また、一般的に接尾辞とされている「～テキ$_{的}$」「～カ$_{化}$」「～チュウ$_{中}$」などとは、どのような違いがみられるのか。本節では音韻的特徴、語彙的特徴、意味的特徴とに分け、接尾辞および複合語と対照しながら記述する。

1-1　音韻的特徴

(a) 清濁

「産地」を表す「～サン$_{産}$」、書籍の分類を示す「～ボン$_{本}$」、競技グループを「類別」する「～ゼイ$_{勢}$」のように、清音形をとるか濁音形をとるかはその連濁の史的変遷から導かれた結果である。但しどちらにしても、清濁両形の混用はしない。「九州産」「長野産」の「～サン$_{産}$」は清音形で使われ、濁音形で現れることはない。「文庫本」「長唄本」の「～ボン$_{本}$」、「日本勢」「大阪勢」の「～ゼイ$_{勢}$」は濁音形で使われ、清音形で現れることはない。

「世界的」「否定的」の「～テキ$_{的}$」、「映画化」「近代化」の「～カ$_{化}$」、「工事中」「仕事中」の「～チュウ$_{中}$」も清音形で使われ、濁音形で現れることはない。

複合語の場合は、「ハイザラ$_{灰皿}$」「トリザラ$_{取り皿}$」の「～ザラ$_{皿}$」など専ら濁音形で現われる後部要素や、「クツヒモ$_{靴紐}$」「ツリヒモ$_{吊り紐}$」の「～ヒモ$_{紐}$」など専ら清音形で現れる後部要素もある。一方で、「キズツク$_{傷付く}$」「キヅク$_{気付く}$」や「ツリカワ$_{吊り革}$」「ナメシガワ$_{鞣し革}$」などのように、同じ後部要素でも清音形をとったり濁音形をとったりする場合もみられる。

(b) アクセント

「キュウシュウサン$_{九州産}$」「ナガノサン$_{長野産}$」の「～サン$_{産}$」、「ブンコボン$_{文庫本}$」「ナガウタボン$_{長唄本}$」の「～ボン$_{本}$」は全て無核アクセントとなり、「ニッポ’ンゼイ$_{日本勢}$」「オオサカ’ゼイ$_{大阪勢}$」の「～ゼイ$_{勢}$」は全部アクセントの核が「勢」字の直前音

節にくる。接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」にはアクセントのパタン化がみられる。

「セカイテキ$_{世界的}$」「ヒテイテキ$_{否定的}$」の「～テキ$_{的}$」、「エイガカ$_{映画化}$」「キンダイカ$_{近代化}$」の「～カ$_{化}$」、「コウジチュウ$_{工事中}$」「シゴトチュウ$_{仕事中}$」の「～チュウ$_{中}$」の場合は全て無核アクセントとなり、接尾辞「～テキ$_{的}$」「～カ$_{化}$」「～チュウ$_{中}$」もアクセントのパタン化がみられる。

一方で複合語の場合は、「ケムシ$_{毛虫}$」「タマ’ムシ$_{玉虫}$」や「ヨコカゼ$_{横風}$」「ヤマ’カゼ$_{山風}$」などのように、同じ後部要素でもアクセントパタンの違いが多数みられる。

1-2　語彙的特徴

(c) 自立性

「文庫本」「長唄本」の「～ボン$_{本}$」や「日本勢」「大阪勢」の「～ゼイ$_{勢}$」は単独では使えない。「九州産」「長野産」の「～サン$_{産}$」は「九州の産」「長野の産」という言い方はできるが、これは「～の産」の形に限られるもので、別の形にして「＊産は九州だ」「＊産は長野だ」とはいえない。このように、接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」は自立性を欠き、単独では使えない。

「世界的」「否定的」の「～テキ$_{的}$」、「映画化」「近代化」の「～カ$_{化}$」、「工事中」「仕事中」の「～チュウ$_{中}$」も単独では使えない。

一方で複合語は「毛虫」「玉虫」や「横風」「山風」などのように、前部要素と後部要素とが複合して出来たものであるため、前部要素と後部要素はそれぞれ自立性をもち、単独でも使える。

(d) 造語力

「産地」を表す「～サン$_{産}$」は、地名語なら和語でも漢語でも外来語でも前接部にくる。「九州産」「長野産」以外にも「ブラジル産」「オーストラリア産」などのように数多く造語されている。書籍の分類を示す「～ボン$_{本}$」は、書籍の内容や時期、体裁、作者などを限定する語が前接部にくる。「文庫本」「長唄本」以外にも「猫本」「料理本」などのように数多く造語されている。競技グループを「類別」する「～ゼイ$_{勢}$」は地域名や国名など固有名詞なら自由に前接部にくる。「日本勢」「大阪勢」以外にも「アメリカ勢」「アジア勢」などのように数多く造語できる。このように、接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」はある程度、非常に強い造語力を見せているといえる。

接尾辞「～テキ$_{的}$」も「世界的」「否定的」以外に「人間的」「女性的」など、「～

カ化」も「映画化」「近代化」以外に「オタク化」「おばさん化」など、「～チュウ中」も「工事中」「仕事中」以外に「食事中」「散歩中」などと、多数造語されている。

一方で複合語の場合、例えば「春風」「夏風」「秋風」の言い方があるのに対して「*冬風」は言わない。複合語は決められた語彙以外には自由に造語できない。

(e) 前接部の品詞性

「九州産」「長野産」「文庫本」「長唄本」「日本勢」「大阪勢」などのように、《産地》を表す「～サン産」、書籍の分類を示す「～ボン本」、競技グループを「類別」する「～ゼイ勢」の前接部には名詞的成分（九州、長野、文庫、長唄、日本、大阪）しかこない。つまり、接尾辞「～サン産」「～ボン本」「～ゼイ勢」は名詞的成分だけを前接し、形容詞的成分などは前接できない。

「世界的」「否定的」の「～テキ的」は、名詞的成分を前接する場合もあり（世界的)、動名詞的成分を前接する場合もある（否定的)。「映画化」「近代化」の「～カ化」は主に名詞的成分（映画、近代）を前接する。「工事中」「仕事中」の「～チュウ中」の場合は主に動名詞的成分を前接する。「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」は「～サン産」「～ボン本」「～ゼイ勢」と同じく形容詞的成分の前接ができない。

一方で複合語の場合は、「ナガグツ長靴」「カワグツ革靴」や「シロミソ白味噌」「ネリミソ練り味噌」などのように、前部要素には形容詞的成分（なが、しろ）も名詞的成分（かわ）も動名詞的成分（ねり）もくる。

(f) 語全体の品詞

「文庫本」「長唄本」の「～ボン本」、「日本勢」「大阪勢」の「～ゼイ勢」は、語全体が名詞として使われる。また「九州産」「長野産」の「～サン産」は、「九州産の野菜」「この野菜は九州産だ」のように形容詞的に働いているが、接続形式からみれば修飾語となるときは「～産の…」、述語となるときは「～産だ」のように、名詞として扱われる。このように、接尾辞「～サン産」「～ボン本」「～ゼイ勢」が前接部に後接した場合、語全体の品詞が名詞的成分になる。

一方、「世界的」「否定的」の「～テキ的」は語全体が形容詞的成分になる。「映画化」「近代化」の「～カ化」は語全体が動詞的成分になる。また「工事中」「仕事中」の「～チュウ中」は語全体が名詞的成分になる。

複合語の場合は基本的に、語全体の品詞は後部要素によって決められる。後部要素が名詞の場合は「長靴」「革靴」などのように複合語全体も名詞になる。後部要素が形容詞の場合は「塩辛い」「甘辛い」などのように複合語全体も形容詞になる。後

部要素が動詞の場合は「傷付く」「気付く」などのように複合語全体も動詞になる。

(g) 品詞の変化

以上の(e)(f)をまとめると、「九州産」「長野産」の「～サン$_{産}$」、「文庫本」「長唄本」の「～ボン$_{本}$」、「日本勢」「大阪勢」の「～ゼイ$_{勢}$」はいずれも名詞的成分である前接部に付いて名詞を作る。つまり、「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」が後接しても品詞の変化を伴わないのである。

一方で、「世界的」「否定的」の「～テキ$_{的}$」は名詞か動名詞に後接し形容動詞を作る。「映画化」「近代化」の「～カ$_{化}$」は名詞に後接して動名詞を作る。「工事中」「仕事中」の「～チュウ$_{中}$」は動名詞に後接して名詞を作る。このように、「～テキ$_{的}$」「～カ$_{化}$」「～チュウ$_{中}$」はいずれも品詞の変化を伴う。

複合語の場合は、語全体の品詞は後部要素によって決まる。そのため、「革」（名詞）に「靴」が後接して「革靴」（名詞）となる場合は品詞の変化を伴わないこともあり、「長」（形容詞）に「靴」が後接して「長靴」（名詞）となる場合は品詞の変化を伴うこともある。

1-3　意味的特徴

(h) 語彙的意味

「産地」を表す「～サン$_{産}$」は前述した(c)のように現代では自立しない。但し「鉱石を産している」などのように、「産」に由来するサ変動詞「産する」がある。「産する」は《生産する・産出する》である。接尾辞「～サン$_{産}$」は「九州産」＝「九州で産出した（もの)」、「長野産」＝「長野県で産出した（もの)」のように、「産地」を表していながら、もともとの《生産する・産出する》が残っている。

書籍の分類を示す「～ボン$_{本}$」は自立語「本」から来たもので、「文庫本」＝「文庫版で出版された本」、「長唄本」＝「長唄を内容とする本」のように、自立語「本」本来の語彙的意味が残っている。

競技グループを「類別」する「～ゼイ$_{勢}$」は、現代では自立語「勢」は使われていない。但し以下のように、古く自立語「勢」で《兵隊》に使う時代があった。

・Xeiuo soroyuru　兵の検閲をする『邦訳日葡辞書』
・あづまのせいをもよほしておんできをついばつし『烏帽子折』52 ウ

現代では「～ゼイ$_{勢}$」は象徴的な表現で競技グループを兵隊に喩え、競技グループ

を「類別」する用法へと変わったが、「日本勢」＝「日本の陣営（兵隊)」、「大阪勢」＝「大阪の陣営（兵隊)」のように、自立語「勢」本来の《兵隊》が未だに残っているのではないかと考えられる。

このように、接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」はその一字漢語の本来の語彙的意味が未だに残っているといえる。

一方で「世界的」「否定的」の「～テキ$_{的}$」は、原由起子(1986)が指摘するようにもともとは英語「-tic」の訳語として使われるのが起源であるため、「的」本来の《まと・標的》の意味を完全になくしているといえる。また「映画化」「近代化」の「～カ$_{化}$」、「工事中」「仕事中」の「～チュウ$_{中}$」も、以下(i)で述べるようにほとんどアスペクト的意味へと抽象化しており、「化」「中」本来の《化する》《(空間的な）内部》をほとんどなくしていると考えられる。

複合語については「革靴」＝「革を材料に作った靴」、「酢味噌」＝「酢などの調味料を加えた味噌」などのように、ほとんどが本来の意味を保持している。

（i）アスペクト的意味

(g)で述べたように、「～サン$_{産}$」は本来の具象的な《産出》から抽象的に《産地》を表すようになった。「～ボン$_{本}$」は本来の具象的な《書籍》から抽象的に書籍の分類を示すようになった。「～ゼイ$_{勢}$」は本来の具象的な《兵隊》から抽象的に兵隊に類似する競技グループを「類別」するようになった。但しいずれの場合も、接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」はアスペクト的な意味を生み出していない。

「世界的」「否定的」の「～テキ$_{的}$」の場合も、「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」と同じくアスペクト的な意味を生み出していない。「～カ$_{化}$」の場合も「映画化」（映画にする、映画になる）などはアスペクト的な意味が生じていないが、但し「温暖化」などは「暖かくなっていく」のようにアスペクト的な意味が生じることもある。「～チュウ$_{中}$」の場合は、例えば「工事中」などは「工事している」のようにアスペクト的な意味が追加されている。

複合語は「革靴」「酢味噌」などのように、アスペクト的な意味を足されることはない。

以上で、接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」を接尾辞「～テキ$_{的}$」「～カ$_{化}$」「～チュウ$_{中}$」と、そして複合語との相違点を比較してみた。これをまとめると以下〈表 11〉になる。

〈表 11〉

		～産	～本	～勢	～的	～化	～中 (進行の意)	複合語
音韻的特徴	清濁	清音	濁音	濁音	清音	清音	清音	清音型 濁音型 清濁両形型
	アクセント	平板型	平板型	-3 型	平板型	平板型	平板型	それぞれの語に決まる
語彙的特徴	自立用法	なし	なし	なし	なし	なし	なし	あり
	造語力	強い	強い	強い	強い	強い	強い	弱い
	前接部の品詞性	名詞	名詞	名詞	名詞 動名詞	名詞	動名詞	それぞれの語に決まる
	語全体の品詞	名詞	名詞	名詞	形容動詞	動名詞	名詞	後部要素で決まる
	品詞の変化	なし	なし	なし	あり	あり	あり	なし／あり
意味的特徴	語彙的意味	残る	残る	残る	残らない	残らない	残らない	残る
	アスペクト的意味	なし	なし	なし	なし	なし／あり	あり	なし

接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」と複合語との違いは主に音韻的特徴、語彙的特徴の違いにみられる。また接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」と接尾辞「～テキ$_{的}$」「～カ$_{化}$」「～チュウ$_{中}$」との違いは主に品詞を変える機能、そして意味的特徴にみられる。

秋元実治(2005)は文法化過程において意味の「漂白化」が起こることに言及し、「ある意味が完全に消失してしまうことは普通考えられず、ある程度保持していると考えられる」と述べている。本章 1-3 で述べたように、接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」と接尾辞「～テキ$_{的}$」「～カ$_{化}$」「～チュウ$_{中}$」はどちらも抽象的な意味へと変わるという過程がみられ、どちらも文法化が起こっているのではないかと考えられる。しかし以上の〈表 11〉で示したように、接尾辞「～カ$_{化}$」「～チュウ$_{中}$」は具象的な語彙的意味から抽象的な文法的意味へと用法が変わるのに対して、接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」は文法化する段階においてアスペクチュアリティなどの文法的意味を生み出さない。また接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」は「～テキ$_{的}$」「～カ$_{化}$」「～チュウ$_{中}$」のように品詞を変える機能も備えない。「～サン$_{産}$」の場合は具象的な《産出》から、形態上で地名語を前接することにより《産出するところ》、つまり産地を「類別」するという用法へと抽象化したのである。「～ボン$_{本}$」の場合は具象的な《書籍》から、形態上で書籍の内容や時期・体裁・作者などを限定する語が前接部にくることによって《どのような書籍か》つまり書籍を「類別」するという用法へと抽象化したのである。「～ゼイ$_{勢}$」の場合は具象的な《兵隊》から、形態上で国名や地域名などの固有名詞を前接することによって《どの所属の兵隊か》つまり兵隊（競技グループ）を「類別」するという用法へと抽象化したのである。このように、接尾辞「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」「～ゼイ$_{勢}$」は語彙的意味の内

部において意味の抽象化が起きているのではないかと結論付けられる。

２．接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」と「類別」表現

2-1　「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」の「類別」用法

本論の第２章で「類別」という概念を取り上げたが、ある集合体を分類することを本論文では「類別」と呼んでいる。その一例として、地名などの固有名詞に後接し、競技グループの所属を表す「日本勢」「アメリカ勢」の「～ゼイ$_{勢}$」を挙げた。接尾辞「～ゼイ$_{勢}$」のこのような用法は、競技グループという集合体を分類するものである。

一方で同じく接尾辞として働いている第１章で述べた「～サン$_{産}$」と、第３章で述べた「～ボン$_{本}$」はどうだろうか。「九州産」「長野産」などの接尾辞「～サン$_{産}$」は地名語に後接し、商品などの産地を表している。接尾辞「～サン$_{産}$」のこのような用法は、産地という集合体を分類するものだと考えられる。また、「文庫本」「江戸本」などの「～ボン$_{本}$」は書籍の内容や時期などを限定する語に後接し、書籍の分類を表している。「～ボン$_{本}$」のこのような用法は、書籍という集合体を分類するものだと考えられる。このように考えると、「～サン$_{産}$」「～ボン$_{本}$」も「～ゼイ$_{勢}$」と同じように「類別」表現にあたるのではないかと思われる。

2-2　「類別」表現と接尾辞

「類別」表現は現代日本語に多数みられる。和語の場合は、日々という集合体を「類別」するのに使う「～ビ$_{日}$」（給料日・面会日など）、衣類という集合体を「類別」するのに使う「～ギ$_{着}$」（部屋着・体操着など）、店という集合体を「類別」するのに使う「～ヤ$_{屋}$」（ケーキ屋、果物屋など）などが挙げられる。また漢語の場合は、人という集合体を「類別」するのに使う「～ジン$_{人}$」（日本人・一般人など）「～ニン$_{人}$」（料理人・保証人など）、機器・機械という集合体を「類別」するのに使う「～キ$_{機}$」（ゲーム機・コピー機など）、学生という集合体を「類別」するのに使う「～セイ$_{生}$」（東大生・卒業生など）、病理症状という集合体を「類別」するのに使う「～ビョウ$_{病}$」（精神病・五月病など）などが挙げられる。

以上の「～ビ$_{日}$」「～ギ$_{着}$」「～ヤ$_{屋}$」「～ジン$_{人}$」「～ニン$_{人}$」「～キ$_{機}$」「～セイ$_{生}$」「～ビョウ$_{病}$」のような「類別」表現は和語でも漢語でも、それ自身の自立性を欠き単独では使えない（「～ビ$_{日}$」の場合は濁音形「ビ」が単独で使えない）が、他の語に後接してはじめて、ある集合体を「類別」する意味が生じる。また、ある集合体を「類別」するのに使う場合は造語性に富み、辞書に載っているもの以外にも、現代では数多く造語されている。このような用法は「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」と同じように、接尾辞的に働いてい

るのではないかと考えられる。

但し〈表 11〉にも示したように、接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」の類に関しては、音韻的特徴の一つとして濁音で現われることがある（「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」）。「類別」表現に使う接尾辞の特徴を考えれば、上掲の「～ビ$_{日}$」（給料日・面会日）や「～ギ$_{着}$」（部屋着・体操着）が濁音で現れているのも不自然ではない。このように考えると、本論第１章１節で挙げた佐藤大和(1989)の「「日」が太陽を指す場合は連濁せず、日差し・曜日などを指す場合は連濁する」という指摘は、複合語の連濁としては確かにその通りかもしれないが、一方、接尾辞的に働く「類別」表現に使う場合はその限りではない、ということも考慮する必要があるのではなかろうか。「給料日」「面会日」などの「～ビ$_{日}$」は濁音形をする接尾辞であり、複合語の連濁とはもはや無縁になっていると思えるからである。

では「類別」表現は日本語においてどのような存在なのか。どのような役割を果たしているのか。接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」の類とはどのような関係を成しているのか。本論文では連濁の史的変遷を主眼においたため、これらの問題については、未だに不明なところが多い。「類別」表現の実態に関しては、また今後の課題として明らかにする必要がある。

結　　論

１.「～産」の連濁の史的変遷と接尾辞「～サン$_{産}$」の形成

1-1　まとめ

本論第１章では「～産」の連濁の史的変遷について考察した。その結論は以下のようにまとめることができる。

「～産」は最初に二字漢語の後部要素に使われ、鼻音の前接によって連濁していた（難産・安産など）。

江戸中期になり、「～産」に和語の前接ができるようになり、この場合の「～産」は和語化が進んだことによって連濁した（うい産・のち産など）。

この時期までに出来た「～産」の語彙は、連濁語は《出産》を表すものに集中し（難産・うい産など）、非連濁語は《出産》以外を表すものに集中している傾向があった（土産・財産など）。この影響により、江戸後期になり、鼻音前接のない二字漢語にも《出産》を表すことによって、濁音形で出現することがあった（逆産・早産など）。

一方で江戸後期に、《出産》を表さない語彙のグループには、《産地》を表す清音形の「～産」があった（倭産・国産など）。この《産地》を表す用法は江戸末・明治初期より、自立語を受けるようになり前接語彙が拡大し（日本産・外国産など）、清音形の接尾辞「～サン$_{産}$」へと移行していった。

以上の連濁の史的変遷を経て、現代では「～産」は、和語前接の場合は連濁し、漢語前接の場合は、古く鼻音の前接によるもの以外は基本的に連濁しない。但し《出産》を表すときは濁音で現れる場合がある。一方で「～産」の連濁とは別に、接尾辞用法「～サン$_{産}$」があり、地名語に付いて《産地》を表す。

1-2　先行研究との違い

以上の結論をみると、本論第１章１節で挙げた「連濁をおこす言葉は、子供が生まれるお産を意味する」「お産以外のものは連濁をおこさない」という岩岡登代子(2002)の指摘はもう一度考え直す必要があるのではなかろうか。

その理由の一つに、現代では「～産」が《出産》を表していると必ず連濁するとは限らないのである。特に近現代の用語には「ジョサン$_{助産}$」「セイキサン$_{正期産}$」「カキサン$_{過期産}$」などのように、連濁しない場合も多い。《出産》を表すと濁音になるという現象は、前述したように江戸後期よりみられるが、それは江戸中期より以前に出来た「～産」の連濁語グループと非連濁語グループとの間で生じた余剰の弁別特徴によるものである。《出産》を表すことによって新に濁音の形で現れるようになった語があったからといって、それはあくまで傾向にとどまり、特に現代では連濁の

条件として成立しているとまではいえないのではないかと思われる。

もう一つ、「～産」の連濁を考えると同時に、「～産」に接尾辞用法をもつかどうかについても考える必要がある。「九州産」「長野産」の「～産」は、《出産》を表していないために連濁しないのではなく、《産地》を表す接尾辞「～サン$_{産}$」が「日本」「長野」に付いた形なのである。

２．「～勢」の連濁の史的変遷と接尾辞「～ゼイ$_{勢}$」の形成

本論第２章では「～勢」の連濁の史的変遷について考察した。その結論は以下のようにまとめることができる。

「～勢」は最初に二字漢語の後部要素に使われ、鼻音の前接によって連濁していた（軍勢・番勢など）。

平安末・鎌倉初期より和語前接の「～勢」が出現しはじめ、この場合は連濁していた（みせ勢・すけ勢など）。和語が前接すると連濁するという現象は「～産」の場合（うい産・のち産など）にもみられ、和語化が進んでいるなどといった要因が考えられる。

これにより、和語前接の「～勢」はどのような兵隊かを「類別」するのに使われるようになり、室町時代において和語前接の「～ゼイ$_{勢}$」が多数できた。これで濁音形「～ゼイ$_{勢}$」は接尾辞へと移行し

さらに、兵隊を「類別」するのに使う接尾辞「～ゼイ$_{勢}$」は、前接部が漢語のものにも及び、前接する語彙が拡大した（関東勢・奥州勢など）。

近代以降になると、接尾辞「～ゼイ$_{勢}$」は前代で和語動詞連用形に接続する語彙（みせ勢・すけ勢など）が消滅し、前接部が地域名・国名などの固有名詞（大阪勢・アメリカ勢など）に限られるようになった。これは、接尾辞は名詞的成分に付きやすく、形容詞的成分によって修飾されにくい、という性質をもっているからだとみられる。また、兵隊を「類別」する前代の用法から、象徴的な言い方で競技グループを類別するのに使われるようになった。

以上の連濁の史的変遷を経て、現代では「～勢」は和語が前接する場合は連濁し、漢語が前接する場合は基本的に連濁しない。一方で「～勢」の連濁とは別に、接尾辞用法「～ゼイ$_{勢}$」があり、固有名詞に付いて競技グループを「類別」する。

３．「～本」の連濁の史的変遷と接尾辞「～ボン$_{本}$」の形成

3-1　まとめ

本論第３章では「～本」の連濁の史的変遷について考察した。その結論は以下の

ようにまとめることができる。

「本」は古く《手本》を表し、最初に二字漢語の後部要素として現れ、鼻音の前接によって連濁していた（張本・根本など）。

平安中期より和語前接の「～本」が出現した（て本・すり本など）。和語が前接しているとはいえ、連濁することはなかった。これは、立派なもの・正式なものに使われたことにより、「～本」は和語が前接しても漢語らしさを保持していたからだとみられる。

室町時代に入り、「本」はもとの《手本》から《書籍》が新に生じた。《書籍》に使う場合の「本」は日常語化し、和語が前接するときは連濁するようになった（まき本）。

そして江戸時代に入り、日常語化した「～本」は、その使いやすさから、多数の前接部をうけるようになった。和語に付く用法（かき本・あか本）のほかにも、漢語に付くことも可能となった（浄瑠璃本・当世本など）。これらの場合も濁音形「～ボン$_{本}$」で使われていた。こうして濁音形「～ボン$_{本}$」は接尾辞へと移行し、前接する語彙が拡大した。

明治期以降、江戸期に連濁していた「こ本」「あか本」「くろ本」「あお本」「かき本」などに清音化が起こった。これは、「～勢」の場合にもみられた、接尾辞は名詞的成分に付きやすく、形容詞的成分によって修飾されにくいという特性をもっているからだとみられる。形容詞的成分を前接する「こ本」「あか本」「くろ本」「あお本」「かき本」は接尾辞「～ボン$_{本}$」にふさわしくないものとして排除され、「～本」は基本的に連濁しないため、清音になったと考えられる。

以上の連濁の史的変遷を経て、現代では「～本」は一部古く鼻音の前接によるもの以外に、基本的に連濁しない。一方で「～本」の連濁とは別に、接尾辞用法「～ボン$_{本}$」があり、名詞的成分の語に付いて書籍を「類別」する。

3-2　先行研究との違い

「～本」の連濁について、窪薗晴夫(2004)などは第３章１節でも述べたように、語全体が４モーラ以下の場合は連濁せず､5モーラ以上の場合は連濁する､と主張してきた。しかし本論文で「～本」の連濁の史的変遷を考察することによって得た結論では､「～本」は現代では基本的に連濁しないのである。

問題となるのは「文庫本」「攻略本」などだが、従来の研究ではこれらを「文庫＋本」「攻略＋本」という複合語構造として捉えられていた。しかし「エドボン$_{江戸本}$」「エヴァボン$_{エヴァ本}$」など４モーラ以下の「～本」でも濁音で現れる場合があり、また本論第４章

で分析した清濁・アクセント・造語力の強さ等の特徴から総合的にみれば、「文庫本」「攻略本」などは複合語とは異なる性質をもっていることが分かった。したがって本論文では、「文庫本」「攻略本」は「文庫＋本」「攻略＋本」という複合語構造ではなく、「文庫」「攻略」に濁音形接尾辞「～ボン$_{本}$」が付いた形であると、結論付けた。

このように考えると、序論 2-2 の（4）モーラ数でも言及した「4 モーラと 5 モーラの間に音韻的に大きな境界があり、5 モーラ以上の単純語は音韻的には合成語として機能している」という窪薗晴夫(2004)の主張した傾向はどうだろうか。本論文で取り上げた「～本」の用例をみると、確かに 4 モーラ以下の「～本」は清音形をとるものが多く、5 モーラ以上の「～本」は濁音形をとるものが多かった。また、本論第３章の結論として濁音形の「～ボン$_{本}$」は現代では基本的に接尾辞用法にあたるため、5 モーラ以上と「語基＋接辞」の構造をもつ「合成語」と、両者関わっているようにみえたのかもしれない。しかし、「エドボン$_{江戸本}$」「エヴァボン$_{エヴァ本}$」「オヤボン$_{親本}$」「コボン$_{子本}$」などは 4 モーラ以下にもかかわらず、「語基＋接辞」の構造をもつ「合成語」として認識されているのである。接尾辞は名詞的成分に付く性質をもつため、当然その名詞的成分が 2 モーラ以下（接尾辞「～ボン」の 2 モーラも含めると語全体が 4 モーラ以下）の場合でも接尾辞「～ボン$_{本}$」は付く。4 モーラ以下か 5 モーラ以上か、これはあくまで接尾辞「～ボン$_{本}$」が前接語彙に付いた結果であって、モーラ数によって接辞として扱うかどうかが決まるのではないと思われる。

４．「～産」「～勢」「～本」の連濁の史的変遷の類似点と相違点について

本論で「～産」「～勢」「～本」の連濁の史的変遷についての考察を通して、「～産」「～勢」「～本」それぞれの連濁の史的変遷の間には、以下のような類似点と相違点がみられる。

4-1　鼻音の連濁よりはじまること（類似点その１）

「～産」「～勢」「～本」の連濁は、歴史上ではいずれも鼻音の連濁よりはじまった。奥村三雄(1952)が指摘した鼻音の前接による連濁は、他の先行研究にもみられるように、古い時代においてはある程度、規則的に行われていた可能性がある。

一方で本論文の第２章３節で論じた「文勢」のように、古く「ブンゼイ」と濁っていたが現代では「ブンセイ」と清音へと変ったものもみられる。松浦陽子(1993)は「室町末期に連濁していた語が、現代に至るまでに、連濁しない語へと移行するという極めて顕著な傾向」があると指摘しており、「文勢」の濁から清への変化はまさにこの傾向を反映するものとなる。

しかし一方で「アカボン$_{赤本}$＞アカホン$_{赤本}$」「カキボン$_{書き本}$＞カキホン$_{書き本}$」などの

清音化について、これはまた接尾辞の特性に関わる問題となり、古く連濁したものが現代になって連濁しなくなったとはいえない。このことから、連濁を研究するに際し、接尾辞用法の確認も必要なのではないかと思われる。

4-2　和語化が進み連濁すること（類似点その２）

「～産」「～勢」の場合は、「ウイザン$_{初産}$」「ミセゼイ$_{見せ勢}$」など、和語が前接することによって連濁するという現象がみられる。これは結論１節・２節でも述べたように、和語が前接することによって、「～産」「～勢」が和語化されたからだと考えられる。

しかし一方で「～本」の場合は、「テホン$_{手本}$」「スリホン$_{摺り本}$」など、最初に和語が前接していても連濁が起こらなかった。「～産」「～勢」とは違い、「～本」の最初にもつ意味《手本》が「本」の漢語らしさを保ち、たとえ和語が前接しても「～本」の和語化が進まなかったのであろう。ところが、後に「～本」のもつ意味が《書籍》へと変わったとき、「本」の漢語らしさを保つ要素が失われ、和語が前接すると和語化され、連濁するようになった。

金田一春彦(1976)は「漢語や洋語も和語と同じような親しい単語ということになると連濁をするようになる」と述べている。「～産」「～勢」「～本」の和語前接による連濁もまさに、漢語らしさを失い、和語と同じように親しい語となったからではなかろうか。このように、和語化が進むことも、漢語が連濁する要因の一つであると考えられる。

4-3　接尾辞用法を獲得していること（類似点その３）

「～産」は接尾辞用法「～サン$_{産}$」（日本産・長野産など）をもち、地名語に付いて《産地》を表す。「～勢」は接尾辞用法「～ゼイ$_{勢}$」（日本勢・アメリカ勢など）をもち、固有名詞に付いて競技グループを「類別」する。「～本」は接尾辞用法「～ボン$_{本}$」をもち、名詞的成分の語に付いて書籍を「類別」する。

野村雅昭(1978)は次のように述べている（下線は筆者による）。

> ところで、現代語では、この字音語基のなかに、二字漢語の成分としての用法だけでなく、すでに存在する和語や外来語の語基、あるいは、字音複合語基（二字漢語）と結合する用法をも、もつものが存在する。「無-届け」・「今-シーズン」・「近代-化」・「研究-者」・「事務-室」・「アメリカ-人」などの「無（ム)」「今（コン)」「化（カ)」「者（シャ)」「室（シツ)」「人（ジン)」などがそれである。この

ような用法は、二字漢語中の成分としての用法と無関係ではない。しかし、なかには二字漢語中の成分としての機能とことなるものがあること、この用法が近代になってからめざましい発達をとげたこと、現在もなおこの方法による造語がさかんにおこなわれていること、などの理由から、注目してよいと思われる。

下線で示したように野村は、漢語接尾辞は近代より著しく発達しているとしている。接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」の発生時期はそれぞれ違うが、いずれも衰えずに、現代まで使われてきて、しかも強い造語力を見せているといえる。「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は現代でも接尾辞として使い続けられていることは、野村が主張した近代以降における接尾辞の発達と関わっているのかもしれない。

4-4　現代における連濁の仕方（相違点その１）

「～産」「～勢」「～本」の現代での連濁の仕方に違いがみられる。例えば「～勢」の場合、和語前接のときは連濁するが（おお勢など）、二字漢語は基本的に連濁しない（国勢・水勢など）。これに対して「～産」の場合、和語前接のときは同じく連濁するが（うい産・のち産など）、二字漢語は《出産》を表す語は濁音になる場合がある（早産・死産など）。また「～本」の場合は、和語前接のときも二字漢語も基本的に連濁しない（資本・抄本・て本・み本など）。

このような結果になったのは、「～産」「～勢」「～本」の連濁はそれぞれ異なる史的変遷を経てできたからではなかろうか。「～産」は「～勢」と違って「早産」「死産」などの二字漢語にも連濁が起こるのは、江戸中期に二字漢語の連濁条件と和語前接の場合の連濁条件によって形成された連濁語グループと非連濁語グループとの間で、余剰の弁別特徴だった意味の条件が関与することがあったからである。また「～本」が「～産」「～勢」と違って和語が前接しても連濁しないのは、室町期において「本」のもつ意味が《手本》から《書籍》へと変ることが一因であろう。《書籍》に使う「～本」は室町後期に連濁したが、連濁した語が後に接尾辞用法「～ボン本」へと移行したからである。

連濁の史的変遷が違うと、現代における連濁のしかたも変わってくる。この結論も、連濁を研究するに際し、それぞれの語のそれぞれの連濁の史的変遷を明らかにする必要があることを示唆しているのではないかと思われる。

4-5　接尾辞用法の清濁（相違点その２）

同じく接尾辞として使われていても、「～サン産」は清音、「～ゼイ勢」「～ボン本」

は濁音である。

歴史上の接尾辞用法の発生からみると、「九州産」「長野産」の「～サン産」は二字漢語「倭産」「国産」からきたものである。「倭産」「国産」は清音だったため、後に出来た接尾辞用法の「九州産」「長野産」も清音で使われていると思われる。

「日本勢」「アメリカ勢」の「～ゼイ勢」は室町時代に和語前接の「みせ勢」「すけ勢」からきたものである。和語前接の「みせ勢」「すけ勢」は連濁していた。そのため、接尾辞用法の「日本勢」「アメリカ勢」も濁音形で使われているのである。

「文庫本」「攻略本」の「～ボン本」は「本」の《手本》から《書籍》への意味変化がきっかけで、日常語化した「～本」《書籍》は連濁し、後に濁音形のまま接尾辞「～ボン本」へと移行したのである。

接尾辞の清濁の問題についても、その関連語彙の連濁の史的変遷を考察する必要があるのではないかと思われる。

５．接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」について

従来では漢語接尾辞というと、「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」などの類を思い浮かぶが、本論第４章ではもう一種の接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」について記述した。接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」と接尾辞「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」と、さらに複合語との違いを分析しながら、接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」のもつ特徴について記述した。

清濁について、「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」と同じく、清濁両形の混用はしない。これに対して複合語は同じ後部要素でも清音形をとったり濁音形をとったりする場合がある。アクセントについて、「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」と同じく、アクセントのパタン化がみられる。これに対して複合語は同じ後部要素でもアクセントパタンの違いがみられる。自立性について、「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」と同じく単独では使えず、他の語に後接してはじめて意味をもつようになる。これに対して複合語は単独でも使える。造語力について、「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」と同じく強い造語力をもっている。これに対して複合語は、決められた言い方以外は自由に造語できない。以上の類似点を以て、「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」と同じく接尾辞として扱うことができるとした。

但し、接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は接尾辞「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」と違うところもある。品詞について、接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は名詞的成分に付いて名詞を作るが、接尾辞「～テキ的」「～カ化」「～チュ

ウ中」の場合は同じく名詞的成分に付くが、必ず名詞を作るとは限らない。意味について、接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」はアスペクチュアリティなどの文法的意味が生じず、語彙的意味の中で抽象化し、具象的な事物から物事の「類別」へと文法化する。これに対して接尾辞「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」は語彙的意味からアスペクチュアリティなどの文法的意味を生み出したり、品詞を変えたりする。以上の相違点から、接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は接尾辞「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」とは異なる性質をもつものであるとした。

また、接尾辞「～サン産」は産地を「類別」する、接尾辞「～ゼイ勢」は競技グループを「類別」する、接尾辞「～ボン本」は書籍を「類別」する、というように、接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」は「類別」表現でもある。

６．全体のまとめ

漢語の連濁についての研究は今まで、共時的に連濁の条件を探る方法が多かった。この方法では、ある程度の傾向性は見出せるものの、例外も多い。そこで本論文では、共時的に連濁の条件を探る方法だけでなく、連濁の史的変遷を考察するという通時的な方法も使い、例として「～産」「～勢」「～本」を挙げ、現代での連濁条件を再検討した。

「～産」は最初に二字漢語の後部要素に現われ、鼻音の前接によって連濁していた。江戸中期に和語前接の「～産」が出現し、連濁した。この時代までに連濁が起こった語はほとんどが《出産》を表しており、この影響で江戸後期に鼻音の前接がなくても《出産》を表すことにより連濁する二字漢語があった。江戸末・明治期に《産地》を表す接尾辞「～サン産」が成立した。現代では和語前接の「～産」は連濁し、二字漢語の「～産」は基本的に連濁しないが《出産》を表す場合は連濁する場合もある。また「～産」の連濁とは別に、《産地》を表す接尾辞「～サン産」がある。

「～勢」は最初に二字漢語の後部要素に現われ、鼻音の前接によって連濁していた。平安末・鎌倉初期より和語前接の「～産」が出現し、連濁した。この和語前接の「～勢」はほとんどが兵隊を「類別」するのに使われ、室町時代より接尾辞「～ゼイ勢」へと移行し、漢語にも付くようになった。近代以降、接尾辞「～ゼイ勢」は競技グループを「類別」するようになり、前接部が固有名詞に特化した。現代では和語前接の「～勢」は連濁し、二字漢語の「～勢」は基本的に連濁しない。また「～勢」の連濁とは別に、競技グループを「類別」する接尾辞「～ゼイ勢」がある。

「～本」は古く《手本》を表し、最初に二字漢語の後部要素に現われ、鼻音の前接によって連濁していた。平安中期より和語前接の「～本」が出現したが、連濁し

なかった。室町時代に《手本》から《書籍》への意味の変化が生じ、和語前接の「～本」は連濁するようになった。この和語前接の「～本」は書籍を類別するのに使われ、徐々に接尾辞「～ボン本」へと移行し、江戸時代に漢語にも付くようになった。近代以降、接尾辞「～ボン本」は前部要素が名詞的成分に特化した。現代では「～本」は基本的に連濁しない。「～本」の連濁とは別に、書籍を「類別」する接尾辞「～ボン本」がある。

従来の研究では、「～産」には意味の条件によって連濁し、「～本」にはモーラ数の条件によって、もしくは修飾関係で連濁する、とされてきた。本論文で連濁の史的変遷を考察することによって、従来とは異なる結論を得ることができた。特に「～産」「～勢」「～本」にはいずれも接尾辞用法をもつことを明らかにし、接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」によってできた語は、清音の形をしても濁音の形をしても、連濁に関わるような問題ではないということが分かった。なお、接尾辞「～サン産」「～ゼイ勢」「～ボン本」については、未だに不明なところが多いが、品詞を変える機能を備えない、アスペクチュアリティなどの文法的意味を生み出さない、などの点においては、接尾辞「～テキ的」「～カ化」「～チュウ中」とは異なる性質をもっていることを確認した。

７．今後の課題

本論文で「～産」「～勢」「～本」の連濁の史的変遷について考察し、前掲のように明らかにしたところもあり、また以下に挙げるように、未だに不明なところがある。これらを今後の課題にする。

7-1　その他の漢語の連濁の史的変遷

本論文で「～産」「～勢」「～本」を対象に考察することを通して、連濁研究に際し、連濁の史的変遷の考察も重要不可欠であることが分かった。この方法で、共時的研究ではできないような発見もあった。今後の研究においては、「～産」「～勢」「～本」以外に、まだその連濁の仕方が分からない漢語を中心に考察していく必要がある。

更に、序論 2-2 の（3）呉音・漢音でも挙げた「株式会社」「電力会社」の「～会社」は現代で全部濁音で現れているのだが、それは連濁によるものなのか、それとも「～ガイシャ会社」は濁音形をする接尾辞になっているのか。このように、一字漢語にとどまらず、二字漢語の連濁の史的変遷も、本論文で用いた方法で考察をしていく必要がある。

7-2　接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」の実態

本論文ではもう一種の接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」を取り上げたが、その実態に関する分析はこの三例に対しての音韻的特徴、語彙的特徴、意味的特徴にとどまった。では、同じく接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」の類に属するような漢語接尾辞はないか。それらもまた接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」と同じような特徴をもつのか。本論文で分析を行った音韻的特徴、語彙的特徴、意味的特徴以外にも、接尾辞「～テキ$_{的}$」「～カ$_{化}$」「～チュウ$_{中}$」と異なる特徴をもっていないか。これらの問題について、更に今後の研究において明らかにしていく必要がある。

7-3　「類別」表現の実態

本論文では、ある集団を分類することを「類別」と呼ぶことにしたが、その実態についての考察がまだ不十分である。接尾辞「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」はみな「類別」表現にあたるのだが、では「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」の類に属する漢語接尾辞は全部「類別」表現にあたるのか。また、「～サン$_{産}$」「～ゼイ$_{勢}$」「～ボン$_{本}$」の他に、同じく「類別」表現にあたるものとして、本論第４章 2-2 で「～ビ$_{日}$」「～ギ$_{着}$」「～ヤ$_{屋}$」「～ジン$_{人}$」「～ニン$_{人}$」「～キ$_{機}$」「～セイ$_{生}$」「～ビョウ$_{病}$」を挙げたが、それ以外にも「類別」表現はどれほど存在するのか。「類別」表現は日本語の中で、具体的にどのような役割を果たしているカテゴリーなのか。これらの問題を、今後の研究において明らかにする必要がある。

参考文献

秋元実治(2005)「文法化と意味変化」『文法化―新たな展開―』英潮社

有坂秀世(1959)『音韻論　増補版』三省堂

伊東美津(2008)「連濁について」『九州国際大学教養研究』15-2

岩岡登代子(2002)「連濁と日本語」『文学』3-4　岩波書店

江口泰生(1993)「漢語連濁の一視点　貞享版『補忘記』における」『京都大学　国語国文』62-12

江口泰生(1994)「連濁と語構造」『岡大国文論稿』22

榎木久薫(1987)「光明真言土沙勧信記における字音の清濁について　連濁に関する考察を中心として」『東洋大学短期大学紀要』19

榎木久薫(2008)「漢字音の「連濁」は如何なる現象か」『訓点語と訓点資料（訓点語学会)』121

遠藤邦基(1981)「非連濁の法則の消長とその意味　―濁子音と鼻音との関係から―」『国語国文』50-3

奥村三雄(1952)「字音の連濁について」『国語国文』21-5

奥村三雄(1984)「連濁」『日本語学』3-5

小倉進平(1911)「ライマン氏の連濁論」『国学院雑誌』明 43-7,8

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房

木田章義(1979)「連濁とアクセント」『国語国文』48-3

金田一京助(1938)『国語音韻論』刀江書院

金田一春彦(1976)「連濁の解」『Sophia Linguistica』2

窪薗晴夫(1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版

窪薗晴夫(1999)『現代言語学入門 2　日本語の音声』岩波書店

窪薗晴夫(2004)「音韻構造から見た単純語と合成語の境界」『文法と音声』Ⅳ

窪薗晴夫・太田聡(1998)中右実（編)『日英語比較選書 10　音韻構造とアクセント』研究社出版

小林芳規(1970)「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」『広島大学文学部紀要』29-1

阪倉篤義(1986)「接辞とは」『日本語学』5-3

桜井茂治(1972)「平安院政時代における和語の連濁について　―観智院本・名義抄における―」『国語国文』41-6

佐々木勇(2009)『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』汲古書院

佐藤大和(1989)「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子編『日本

語の音声・音韻(上)』明治書院
鈴木豊(2005)「ライマンの法則の例外について　―連濁形「ーバシゴ(梯子)」を後部成素とする複合語を中心に―」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』4
鈴木豊(2007)「ライマンの日本語研究 」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』6
鈴木豊(2008)「ライマン法則例外の成立過程について　「タカラガイ」(宝貝)を後部成素とする語の連濁」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』7
鈴木豊(2013)「字音形態素「サン（山)」を後部成素とする派生語の連濁について」『文京学院大学外国語学部　文京学院短期大学紀要』12
高橋正郎(1939)「濁音前に現れる撥音便と鼻音」『国学院雑誌』昭 14-4,7
高山知明(1997)「漢語形態素の連濁のあり方について」『香川大学国文研究 22』
高山倫明(2012)『日本語音韻史の研究』ひつじ書房
舘野由香理(2012)「現代日本漢語におけるハ行子音の半濁音化について」『文学部紀要』26
田窪行則(1986)「―化」『日本語学』5-3
田村すゞ子　等(1976)「合成名詞の連濁（カで始まる和語について）―語研日本語研修「言語学」の実習から―」『ILT News』59･60
戸田綾子(1988)「和語の非連濁規則と連濁傾向　「日葡辞書」と「和英語林集成」から」『同志社国文学』30
戸田綾子(1994)「現代語における和語の連濁(1)　複合形容詞の連濁」『同志社大学同志社国文学』40
戸田綾子(1999)「現代和語の連濁　語構成から」『日本語・日本文化研究（京都外国語大学)』6
中川芳雄(1966)「連濁・連清（仮称）の系譜」『国語国文』昭 41-6
中川芳雄(1978)「固有名詞の連濁・連清の系譜」『静岡女子大学研究紀要』12
中川芳雄(1978)「連濁涵精」(上)・(下)『国語国文』47-2、47-3
沼本克明(1982)『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
沼本克明(1986)『日本漢字音の歴史』東京堂出版
登坂俊子(1984)「現代語における連濁とアクセント」『学習院女子短期大学　国語国文論集』13
野村雅昭(1978)「接辞性字音語基の性格」」『電子計算機による国語研究 IX』国立国語研究所報告 61

浜田敦(1952)「撥音と濁音との相関性の問題　―古代語に於ける濁子音の音価―」『国語国文』昭 27-4
浜田敦(1960)「連濁と連声　―同化の問題― 」『国語国文』29-10
早田輝洋(1996)「上代日本語の音韻をめぐって」(上)(下)『言語』25-9、25-10
原口庄輔(2000)「新「連濁」論の試み」『平成 11 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告』4
原由起子(1986)「―的　―中国語との比較から―」『日本語学』5-3
飛田良文(1966)「明治大正時代の漢語の連濁現象」『日本文化研究所研究報告』2
肥爪周二(2002)「ハ行子音をめぐる四種の「有声化」」『茨城大学人文学部紀要人文学科論集』37
肥爪周二(2003)「清濁分化と促音・撥音」『国語学』54-2
肥爪周二(2004)「結合標示と内部構造標示」『音声研究』8-2
肥爪周二(2010)「古典語の連濁　―二つの未解決問題―」『古典語研究の焦点』武蔵野書院
平野尊識(1974)「連濁の規則性と起源」『文学研究』71
松浦陽子(1994)「漢語の連濁の史的研究　「日葡辞書」と現代語辞書との比較の観点から」『広島大学教育学部紀要　第２部』42
松浦陽子(1996)「字音語の連濁における先行音節の影響について」『広島大学日本語教育学科紀要』6
三宅知宏(2002)「語の内部関係と音韻現象　形態論と音韻論の接点Ⅱ」『国文鶴見(鶴見大学日本文学会)』36
三宅知宏(2004)「「半濁音化」「促音化」と「枝分かれ制約」　―形態論と音韻論の接点Ⅲ―」『国文鶴見』38
村山七郎(1954)「連濁について」『言語研究』26、27
森岡健二(1986)「接辞と助辞」『日本語学』5-3
森岡健二(1991)『改訂近代語の成立　―語彙編―』明治書院
森山卓郎(1986)「接辞と構文」『日本語学』5-3
保坂華子(2007)「「複合した地名」における連濁とアクセントの関係　後部要素の分析」『神戸大学　神戸言語学論叢』5
屋名池誠(1991)「「ライマン氏の連濁論」原論文とその著者について　付・連濁論原論文「日本語の連濁」全訳」『大阪女子大学　百舌鳥国文』11
山口佳紀(1988)「古代語の複合語に関する一考察　―連濁をめぐって―」『日本語学』7-5

山下喜代(2000)「漢語系接尾辞の語形成と助辞化―「的」を中心にして―」『日本語学』19-11

Hopper, Paul J. & Traugott, Elizabeth Closs (1993) *Grammaticalization*. Cambridge University Press.

Yukio Otsu (1980) Some Aspects of Rendaku in Japanese and Related Problems *Theoretical Issues in Japanese Linguistics* (MIT Working Papers inLinguistics 2Department of Linguistics and Philosophy Cambridge Massachusetts)

呂建輝(2014)「漢語連濁の史的変遷　―後部要素が「産」の漢語について―」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37

呂建輝(2015)「漢語連濁の史的変遷と意味用法の一側面について」『日本語の研究』11-2　日本語学会 2014 年度秋季大会研究発表会発表要旨

呂建輝(2015)「漢語連濁の通時的考察と接尾辞化　―「～勢」の場合―」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』40

参考資料・用例出典

【索引類】

『天草版平家物語対照本文及び総索引　索引篇』1986 明治書院

『色葉字類抄研究並びに索引　索引篇』1964 風間書房

『印度本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引　索引篇』1982 勉誠出版

『永正本六物圖抄　附解説及索引』1959

『恵空編節用集大全研究並びに索引　索引篇』1975 勉誠社

『角川古語大辞典』1982-1999 角川書店

『古字書索引　上・下』1959 日本古典全集刊行会

『古本節用集六種研究並びに総合索引　索引篇』1979 勉誠社

『時代別国語大辞典　室町時代編』1985 三省堂

『三本対照　捷解新語　釈文・索引・解題篇』1972-73 京都大学文学部国語学国文学研究室

『書言字考節用集研究並びに索引　索引篇』1973 風間書房

『塵芥索引』1988 臨川書店

『新編西鶴全集　索引編』2000-07 新編西鶴全集編集委員会

『中世古辞書四種研究並びに總合索引　索引篇』1971 風間書房

『土井本太平記　本文及び語彙索引　索引篇』1997 勉誠社

『日本語アクセント史総合資料　索引篇』1997-98 東京堂出版
『日本古典文学大系索引』1957-69
『文明本節用集研究並びに索引　索引篇』1970 風間書房
『平家正節声譜付語彙索引　上・下』2000 アクセント史資料研究会
『邦訳日葡辞書逆引索引』1998 笠間書院
『邦訳日葡辞書索引』1989 岩波書店
『正宗文庫本節用集総索引』1968 ノートルダム清心女子大学国文学研究室古典叢書刊行会
「安田八幡宮蔵　大般若波羅蜜多経の音注（索引）」『訓点語と訓点資料』119　2007
『和英語林集成　初版・再版・三版対照総索引』2000 港の人

【資料】

『天草版平家物語対照本文及び総索引　本文篇』1986 明治書院
『海人の刈藻　全訳注語句総索引』1991 右文書院
『暗夜行路』1969 日本近代文学館
『伊曽保物語　天草版』1976 勉誠社
『浮世床』1955 朝日新聞社
『永正本六物圖抄　附解説及索引』1959
『延慶本平家物語』1990-96 勉誠社
『鴎外全集』8　1971-75 岩波書店
『鴎外全集』16　1971-75 岩波書店
『大蔵虎明本狂言集の研究』1972-83 表現社
『温故知新書』1962 白帝社
『歌経標式　影印と注釈』2008 おうふう
『歌舞伎評判記集成』1　1972-77 岩波書店
『笠間影印叢刊』50-61『高野本平家物語』1973-74 笠間書院
『傀儡師』1971 日本近代文学館
『京大附属図書館蔵本漢書列伝竺桃抄』1968 尾道短期大学国文研究室
『玉塵抄』1972 勉誠社
『玉葉』1966 すみや書房
キリシタン資料集成『サントスの御作業』1976 勉誠社
『近世著述目録集成』1978 勉誠社
『近世白話小説翻訳集』2　1984-88 汲古書院

『近世文藝資料』9『近世初期遊女評判記集』1965 古典文庫
『近世文藝資料』10『好色物草子集』1968 古典文庫
『近代日本文学大系』7『近松門左衛門集』下 1927-28 国民図書株式会社
『近代日本文学大系』20『為永春水集』1928 国民図書株式会社
『羣書類從』123『凌雲集』1980 日本文化資料センター
『啓迪集』ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵
現代教養文庫 1037『初期黄表紙』1980 社会思想社
現代教養文庫 1039『変革期黄表紙』1982 社会思想社
現代教養文庫 1107『江戸の戯作絵』1984 社会思想社
『交隣須知』1966 京都大学文学部国語学国文学研究室
『国史大系』14『百錬抄　愚管抄　元亨釋書』1901 經濟雑誌社
『国文注釈全書』9『河海抄　花鳥餘情　紫女七論』1908 国学院大学出版部
『言継卿記』3、4　1998 続群書類従完成会
『西國立志編』1888 修學堂
『雑俳集成』1・4『享保江戸雑俳集』1987 東洋書院
『雑俳集成』2・5-6『不角前句付集』1991
『詩学大成抄の国語学的研究』1975 清文堂出版
『洒落本大成』1　1978-88 中央公論社
『洒落本大成』2　1978-88 中央公論社
『洒落本大成』7　1978-88 中央公論社
『洒落本大成』12　1978-88 中央公論社
『洒落本大成』17　1978-88 中央公論社
『洒落本大成』20　1978-88 中央公論社
『洒落本大成』25　1978-88 中央公論社
『初印本　毛吹草』1978-80 ゆまに書房
『抄物資料集成』1『史記抄』1971 清文堂出版
『抄物資料集成』2-5『四河入海』1971 清文堂出版
抄物大系『毛詩抄』1971-72 勉誠社
抄物大系『蒙求抄』1971 勉誠社
抄物大系『東山御文庫蔵称光天皇宸翰　応永二十七年本論語抄』1976 勉誠社
『逍遥選集』1926-27 春陽堂
『昭和文學全集』33『里見弴　菊池寛』1954 角川書店
『新潮日本古典集成』別巻『南総里見八犬伝』2003-04 新潮社

『新訂増補言継卿記』1、2、5、6　1966-67 続群書類従完成会
『新日本古典文学大系』1-4『萬葉集』1999 岩波書店
『新日本古典文学大系』12-16『続日本紀』1989-98 岩波書店
『新日本古典文学大系』19-23『源氏物語』1993-97 岩波書店
『新日本古典文学大系』33-37『今昔物語集』1993-99 岩波書店
『新日本古典文学大系』56『梁塵秘抄　閑吟集　狂言歌謡』1993 岩波書店
『新日本古典文学大系』72『江戸座点取俳諧集』1993 岩波書店
『新日本古典文学大系』78『けいせい色三味線　けいせい伝受紙子　世間娘気質』1989 岩波書店
『新日本古典文学大系』80『繁野話　曲亭伝奇花釵児　催馬楽奇談　鳥辺山調綫』1992 岩波書店
『新日本古典文学大系』86『浮世風呂　戯場粋言幕の外　大千世界楽屋探』1989 岩波書店
『新日本古典文学大系』100『江戸繁昌記　柳橋新誌』1989 岩波書店
『新編西鶴全集　本文篇』1　2000-07 勉誠出版
『新編西鶴全集　本文篇』2　2000-07 勉誠出版
『新編西鶴全集　本文篇』3　2000-07 勉誠出版
『新編西鶴全集　本文篇』4　2000-07 勉誠出版
『前太平記』1988-89 国書刊行会
『漱石全集』9　1993-99 岩波書店
『漱石全集』11　1993－99 岩波書店
『増補史料大成』9-15『中右記』1965 臨川書店
『増補六国史』9-10『三代實録』1940-41 朝日新聞社
『続抄物資料集成』5『古文真宝桂林抄　古文真宝彦龍抄』1980 清文堂出版
『続抄物資料集成』6『山谷抄』1980 清文堂出版
『続抄物資料集成』7『百丈清規抄』1980 清文堂出版
『続史料大成』26-37『大乗院寺社雑事記』1978 臨川書店
『続日本随筆大成』4　1979-81 吉川弘文館
『尊経閣善本影印集成』37『類聚三代格』2005 八木書店
『尊経閣善本影印集成』40『日本霊異記』2007 八木書店
『尊経閣善本影印集成』44『江談抄』2008 八木書店
『大日本古記録』7『後二條師通記』1956-58 岩波書店
『大日本古記録』11『言経卿記』1959 岩波書店

『大日本古記録』13『臥雲日件録抜尤』1961 岩波書店
『大日本仏教全書』133-137『蔭凉軒日録』1980 名著普及会
『談義本集』3　1994 古典文庫
『近松全集』1　1985-96 岩波書店
『近松全集』2　1985-96 岩波書店
『近松全集』7　1985-96 岩波書店
『近松全集』9　1985-96 岩波書店
『中世日記紀行文学全評釈集成』3『源家長日記　飛鳥井雅有卿記事　春のみやまぢ』2004 勉誠出版
『通俗日本全史』3『源平盛衰記』1912 早稲田大学出版部
『定本親鸞聖人全集』1『教行信証』1969 法蔵館
『土井本太平記　本文及び語彙索引』1997 勉誠社
『徳川文藝類聚』12『評判記』1914 国書刊行会
『夏目全集』1　1993－99 岩波書店
『日本近代文学大系』3『坪内逍遥集』1974 角川書店
『日本古典全書』51『東海道中膝栗毛』1953 朝日新聞社
『日本古典文学大系』10-12『宇津保物語』1959-62 岩波書店
『日本古典文学大系』31『保元物語　平治物語』1961 岩波書店
『日本古典文学大系』34-36『太平記』1960-62 岩波書店
『日本古典文学大系』59『黄表紙　洒落本集』1958 岩波書店
『日本古典文学大系』60-61『椿説弓張月』1958-62 岩波書店
『日本古典文学大系』63『浮世風呂』1957 岩波書店
『日本古典文学大系』64『春色梅兒譽美』1962 岩波書店
『日本古典文学大系』69『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』1964 岩波書店
『日本古典文学大系』84『古今著聞集』
『日本古典文学大系』86『愚管抄』1967 岩波書店
『日本古典文学大系』90『仮名草子集』
『日本古典文学大系』91『浮世草子集』1966 岩波書店
『日本庶民生活史料集成』16『奇談・紀聞』1970 三一書房
『日本思想大系』28 石田一良、金谷治校注『藤原惺窩　林羅山』1975 岩波書店
『日本思想大系』35『新井白石』1975 岩波書店
『日本随筆大成』1・19『筆の御霊　東牖子　嗚呼矣草　斉諧俗談　一宵話』1994 吉川弘文館

『日本随筆大成』1・22『三のしるべ　好古日録　好古小録　茅窓漫録』1994 吉川弘文館
『日本風景論』1977 飯塚書房
『日本名著全集』江戸文芸の部 14『滑稽本集』1927 日本名著全集刊行会
『幕末御触書集成』1992-97 岩波書店
『幕末明治新聞全集』1961-62 世界文庫
『八文字屋本全集』2　1992-2013 汲古書院
『評釋江戸文學叢書』2『浮世草子名作集』1970 講談社
『藤村全集』11　1966-71 筑摩書房
覆刻日本古典全集『医心方』1978 現代思潮社
覆刻日本古典全集『延喜式』1978 現代思潮社
覆刻日本古典全集『有林福田方』1979 現代思潮社
『補忘記　貞享版』1962 白帝社
『補忘記 元禄版』1962 白帝社
『三河物語』1970 勉誠社
『未刊文藝資料』3・5 朝倉治彦、吉田幸一共編『茶屋諸分調方記　元禄六年板　附禰宜町往來　國町の沙汰』1953 古典文庫
『妙一記念館本仮名書き法華経』1988-93 霊友会
『室町時代物語大成』7　1973-88 角川書店
『明治欧米見聞録集成』1『西洋聞見録』1987 ゆまに書房
『明治文学全集』28『斎藤緑雨集』1966 筑摩書房
『明治文学全集』68『徳田秋声集』1971 筑摩書房
『役者論語』1954-73 東京大学出版会
『湯山聯句抄　本文と総索引』1997 清文堂出版
『隣語大方』1963 京都大學國文學會

【古辞書】

『乾本　節用集』1961 白帝社
『色葉字類抄　研究並びに索引　本文篇』1964 風間書房
『恵空編節用集大全研究並びに索引 影印篇』1975 勉誠社
『近代用語の辞典集成』37『新聞語辞典』1996 大空社
『広益熟字典』ノートルダム清心女子大学附属図書館佐藤茂文庫蔵
『古辞書叢刊』2『元和三年板下学集』1968 新生社

『古本節用集六種研究並びに總合索引　影印篇』1979 勉誠社
『中世古辞書四種研究並びに總合索引　影印篇』1971 風間書房
『三本対照　捷解新語　本文篇』1972-73 京都大学文学部国語学国文学研究室
『書言字考節用集研究並びに索引　影印篇』1973 風間書房
『諸本集成倭名類聚抄』1968 臨川書店
『天正十八年本節用集』1961 白帝社
『図書寮本類聚名義抄』1969 勉誠社
『文明本節用集研究並びに索引　影印篇』風間書房
『邦訳日葡辞書』1980 岩波書店
『明治期漢語辞書大系』2『漢語字類』1995 大空社
『明治期漢語辞書大系』3『令典熟語解　布令必用新撰字引　日誌字解　増補新令字解　未味字解漢語都々逸』1995 大空社
『和英語林集成』1966 北辰
『和英語林集成』1970 東洋文庫
『和英語林集成』1974 講談社
『倭語類解』1958 京都大学文学部国語学国文学研究室
『和蘭字彙』1974 早稲田大学出版会
『羅葡日対訳辞書』1979 勉誠社
『類聚名義抄』1938-40 日本古典全集刊行會

【近現代辞書】

『岩波国語辞典　初版』1963 岩波書店
『岩波国語辞典　第 2 版』1971 岩波書店
『岩波国語辞典　第 3 版』1979 岩波書店
『岩波国語辞典　第 4 版』1986 岩波書店
『岩波国語辞典　第 6 版』2000 岩波書店
『岩波国語辞典　第 7 版』2011 岩波書店
『ＮＨＫ日本語発音アクセント辞典』1998 日本放送出版協会
『旺文社国語辞典』1960 旺文社
『旺文社国語辞典　新訂版』1973 旺文社
『学研国語大辞典』1978 学習研究社
『学研国語大辞典　第 2 版』1988 学習研究社
『角川国語辞典　25 版』1957 角川書店

『角川国語辞典　新版』1988 角川書店
『角川国語辞典　新版 68 版』1972 角川書店
『角川国語中辞典』1979 角川書店
『角川国語大辞典』1982 角川書店
『言苑』1938 博文館
『言海』1889 秀英舎
『言海　75 版』1907 秀英舎
『現代国語例解辞典』1985 小学館
『言林』1949 全国書房
『広辞苑　第 2 版』1969 岩波書店
『広辞苑　第 2 版補訂版』1976 岩波書店
『広辞苑　第 3 版』1983 岩波書店
『広辞苑　第 4 版』1991 岩波書店
『広辞苑　第 5 版』1998 岩波書店
『広辞苑　第 6 版』2008 岩波書店
『広辞林　新版』1958 三省堂
『広辞林　第 5 版』1973 三省堂
『講談社国語辞典　増補版』1966 講談社
『国語大辞典』1981 小学館
『国語大辞典言泉』1986 小学館
『国民必携類語大辞典　18 版』1917 博愛館
『ことばの泉』1899 大倉書店
『三省堂国語辞典』1960 三省堂
『三省堂新国語中辞典』1967 三省堂
『三省堂国語辞典　新装版』1968 三省堂
『三省堂国語辞典　第 2 版』1974 三省堂
『三省堂国語辞典　第 3 版』1982 三省堂
『三省堂国語辞典　第 4 版』1992 三省堂
『辞海　縮刷版』1954 三省堂
『辞林 21』1993 三省堂
『新国語辞典　9 版』1967 大修館書店
『新辞典』1929 至文堂
『新選国語辞典』1959 小学館

『新選国語辞典　改訂新版』1966 小学館
『新選国語辞典　第 6 版』1987 小学館
『新明解国語辞典』1972 三省堂
『新明解国語辞典　第 2 版』1974 三省堂
『新明解国語辞典　第 3 版』1981 三省堂
『新明解国語辞典　第 4 版』1989 三省堂
『新明解国語辞典　第 5 版』1997 三省堂
『新明解国語辞典　第 6 版』2005 三省堂
『大言海』1933 冨山房
『大辞林』1988 三省堂
『大辞林　第 2 版』1995 三省堂
『大辞林　第 3 版』2006 三省堂
『大増訂日本大辞典　ことはのいつみ』1914 大倉書店
『大辞泉』1995 小学館
『大辞泉』2012 小学館
『大辭典　覆刻版』1974 平凡社
『大日本国語辞典』1919 金港堂書籍
『大日本国語辞典　10 版』1921 冨山房
『大日本国語辞典　修訂 6 版』1940 冨山房
『日本国語大辞典』1975 小学館
『日本国語大辞典　第 2 版』2001 小学館
『日本新辞林』1897 三省堂
『日本大辞書　復刻版』1978 ノーベル書房
『日本大辞典言泉』1981 日本図書センター
『日本大辭林』1894 宮内省
『日本大辞林』1907 吉川弘文館
『福武国語辞典』1989 福武書店
『明解国語辞典　第 12 版』1948 三省堂
『明解国語辞典　新装版改訂版』1967 三省堂
『明鏡国語辞典』2002 大修館書店
『明鏡国語辞典　第 2 版』2010 大修館書店
『例解国語辞典　33 版』1972 中教出版
『例解新国語辞典』1984 三省堂

『例解新国語辞典　第 2 版』1987 三省堂
『和漢雅俗いろは辞典』1889 いろは辞典発行部
『和漢雅俗いろは辞典　増訂 4 版』1899 いろは辞典発行部

【CD - ROM】

「近代女性雑誌コーパス」国立国語研究所 2006
「国立国会図書館所蔵黄表紙集」CD 復刻版 2010 フジミ書房
「新潮文庫　大正の文豪」1997 新潮社
「新潮文庫の 100 冊」1995 新潮社
「新潮文庫　明治の文豪」1997 新潮社
「太陽コーパス　雑誌『太陽』日本語データベース」2005 博文館新社
「明六雑誌コーパス」国立国語研究所 2012

【URL】

「河村文庫画像データベース」滋賀医科大学附属図書館
http://www.shiga-med.ac.jp/library/kawamura/
「聞蔵Ⅱビジュアル」朝日新聞デジタル
https://database.asahi.com/library2/
「九大コレクション貴重資料画像」九州大学付属図書館
http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/
「近代デジタルライブラリー」国立国会図書館
http://kindai.ndl.go.jp/
「少納言　KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス」
http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/
「ジャパンナレッジ」小学館コーパス
http://japanknowledge.com/
「デジタルで読む福澤諭吉」慶應義塾図書館デジタルギャラリー
http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/
「デジタル和英語林集成」明治学院大学図書館デジタルアーカイブス
http://mgda.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/
「電子版霞亭文庫」東京大学附属図書館
http://kateibunko.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/
「電子版黒木文庫」東京大学教養学部

http://kuroki.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/